

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1009集

今宿五郎江 7

—今宿五郎江遺跡第10次調査報告(1)—

2008

福岡市教育委員会

【正誤表】福岡市埋蔵文化財調査報告書第1009集 今宿五郎江 7

頁	行	原	正
前文 3	図	(下図右) +10	10 頁
本文目次 1	5	16年度までの	16)年度までの
本文目次 2	30	流路1085	土壇1085
1	調査諸元	16年度までの	16)年度までの
3	32	〔査番号〕	〔調査番号〕
4	18	平成14年度)	平成14)年度
4	図 17	今宿五郎江遺跡平成6年度	今宿五郎江遺跡平成16年度
7	1	台地縁辺に基用	台地縁辺に沿うように
7	1	、11頁第Ⅱ章	、11頁第Ⅲ章
10	図23	(M1017土層説明) 1…閉まる。	1…詰まる。
13	土層説明	(差し替え)	別表 1
17	表 1(遺物445)	G26-55	G26-05
24	表 5(遺物 5022)	緑釉陶器 皿	緑釉陶器 鉢
24	表 5(標題)	土壇1046遺物	土壇1046出土遺物
25	表 6 (遺物7720)	(器表) [2YR6/8?]	[2YR6/8 ?] 纏
25	表 6 (遺物7720)	(内面) 端部付近横溝で	(内面) 端部付近横溝で調整。
25	表 6 (遺物7721)	遺物7721/ 器表) [4YR7/4薄	[4YR7/4 薄茶]
25	4	遺構1078	遺構1078 (図 49)
26	表 7(遺物7727)	(器表) [2YR6/8?]	[2YR6/8 ?] 纏
28	表 8 (遺物3174)	(器表) [2YR6/8?]	[2YR6/8 ?] 纏
33	1	コンテナ21/2箱	コンテナ1/2箱
33	図 59 (標題)	出土遺物 (1:4)	出土遺物 (1:4、1:2)
34	表 11 (遺物2215)	3～4あ	3～4ある。
36	2	埴形土器	小形丸底壺
40	表13(遺物3225・7714・7715)	(出土位置) G26-	G26-9555
41	図72	(縮尺) 1:40	1:30
41	表14 (遺物7716・7717)	(出土位置) G26-	G26-97
42	表15	(標題) 図76	表15
42	表15	(出土位置) G26-	G26-96
43	図76	(縮尺) 1:40	1:30
46	20	(図 82～85)	(図 82-84-85)
47	14	砂が充ち込んでいる	砂が落ち込んでいる
49	表17(遺物7197)	950+953+128 1	950+953+1281
49	5	(図89、表17-18)	(図89、表17)
49	図90(標題)	流路1042・凹地1043	遺1042・遺1043
50	表18(標題)	凹地1043出土遺物	遺1043出土遺物
50	4～10	「古墳時代～想定できない。」	→ (遺1043出土遺物説明)
50	図91(標題)	凹地1043	遺1043
50	図92(標題)	凹地1043	遺1043
52	表19(遺物7677)	(観察表欠落)	別表 2
57	図105	(縮尺) 1:40	1:80
59	3	砂が充填した状態で	砂が落ち込んだ状態で
59	図110 (遺構番号)	M1022	M1122
59	図110 (遺構番号)	M1022	M1122
66	2	流路1016	土壇1016
67	表22(遺物7159)	(器表) 外面は	外面は黒色
67	表22(遺物7161)	(器表) 胴部を中心に撫で	胴部を中心に撫で調整
68	表23(遺物5002)	(遺物特徴) 帯状に巡	帯状に巡る
74	30	尖端部を作出する。1:40	尖端部を作出する。
77	表29(遺物7705～7708)	(出土位置)G26-	G26-06
83	31	壺7167・7169・7179・7484が	壺7167・7169・7484・7519が
83	図150(標題)	遺構1096 (1:100)	遺構1096 (1:100、1:40)
87	14	遺構1011・1017がある。	遺構1017・1096がある。

《別表》1

M427 土層

M427-16 層

- a 粘土 黒褐色 [10YR 3/2] 夾雑物少。褐鉄鉱斑生成。
- b 粘土 褐灰色 [10YR 4/1] 夾雑物少。褐鉄鉱斑生成。
- c 粘土 灰黄褐色 [10YR 4/2] 夾雑物少。褐鉄鉱斑生成。b との差は小さく、やや明るい。b・c 間には西岸寄りには木炭層分布。

M427-18 層

- d シルト 灰黄褐色 [10YR 4/2] 塊状の細砂を挟む。木質集中。
- e 粗砂 鈍い黄褐色 [10YR 5/3] 締まりなし。
- f 砂混り粘土 鈍い黄褐色 [10YR 5/4] 塊状。東岸 10 層からの流入土か。
- g 粘土 黒褐色 [10YR 3/2] 軟質で、木質(木片~木材)を多量に含む。細砂、シルトの薄層を挟む。

M427-22 層

- h 粘土混り粗砂 灰褐色 [7.5YR 4/2]
- i 粘土 黒褐色 [10YR 3/2] 細砂・シルトが分布しない。粗砂塊(地山土?)を含む。

M427-24 層

- j 粘土(塊) 暗灰黄色 [2.5YR 4/2] 塊状で、間を i が充填。
- k 粘土塊 j と同性状で、間隙を粗砂 [灰黄褐色:10YR 5/2 (より灰色味)] が充填する。

《別表》2

番号	調査番号	土層名	土質(色)	土質(色)	土質(色)	土質(色)	土質(色)	土質(色)
1427	30-44		粘土土層 黄味: 灰褐色	粗砂	334			層片、西側面や平層面
			粘土: 砂混りを含む 鉄質: 少ない(黄味 8.5YR.6) 軟色:				内面: 南向方向の面で開眼 内面: 南向方向の面で開眼	

NO. 649/6

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1009集

いま じゆく ご ろう え
今宿五郎江 7

—今宿五郎江遺跡第10次調査報告(1)—



調査番号 0420
遺跡略号 IZG-10

2008

福岡市教育委員会



図1 今宿五郎江遺跡建景（東から）△で示すのは第10次地点位置



図2 今宿五郎江遺跡第10次地点（南から）



図 3 今宿五郎江道跡調査地点 (南から)



図4 今宿五郎江遺跡第10次地点全景（南から）



図 5 調査区北半部（南から）



図 6 調査区南半部（北東から）



図 7 調査区南半部（東から）



図 8 調査区南半部（北から）



図9 2区全景（北から）



図10 3区全景（北から）



図11 溝427・土壘1062土層 (G26-06区南面、北から)



図12 溝427土層 (G26-05区北面、南から)



図13 調査区北壁土層（東半部、南から）



図14 調査区北壁土層（西半部、南東から）

序

福岡市の西部に位置する今宿平野は、中国の史書にその名を残す糸島平野の東を占め、歴史的にみても重要な位置にある地域です。しかし、大規模な土地区画整理事業の進行に伴い、急速に変貌を遂げつつあります。福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で伊都土地区画整理事業地内の埋蔵文化財について実施した、調査報告第4冊として刊行するものです。

本報告の刊行に至るまでには、関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。また、本書が今宿平野の歴史について、理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成20年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

はじめに

- 1 本書は、2004（平成16）年から2005（平成17）年度にわたり、福岡市西区今宿町地区内伊都土地区画整理事業地で福岡市教育委員会がおこなった、埋蔵文化財発掘調査の報告であり、同事業地内埋蔵文化財調査報告第4冊である。
- 2 報告する調査は、調査番号0420今宿五郎江遺跡第10次調査で、分割して報告するうちの第1である。
- 3 発掘調査は、文化財保護法57条の3（改正前）に基づく通知を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、福岡市都市整備局伊都地区画整理事務所の依頼により、記録保存を目的として、教育委員会埋蔵文化財課（当時）が実施したものである。現場作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。
- 4 発掘調査は、埋蔵文化財課 杉山富雄が担当し、2区および3区に調査では阿部泰之の協力を得た。本書編集は、杉山がおこなった。今回報告の遺物実測は、森本幹彦が行った他、今井隆博、石丸あゆみの協力を得た。掲載図作成は森本幹彦および編者がおこなった。
- 5 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡 例

- 1 書名は、埋蔵文化財調査報告書としての利用を考え、遺跡名によることとし、簡略化を図るため『今宿五郎江』とした。前回報告に続けて第7冊とする。
- 2 位置の記録は、伊都土地区画整理事業にともない設置された基準点（日本測地系）を利用し、その座標値で示すこととした。
- 3 図中に用いる方位は国土座標の座標北であり、真北から0° 19′ 西偏している。
- 4 遺物実測図のうち、土器については特に記さない限り縮尺1/4分の1で図示している。そのほかの縮尺の場合は、棒尺により示すか、必要に応じて遺物番号に続き、付記する。
- 5 報告中では、遺構・遺物に対し、調査中から整理の過程を通じて登録した通し番号で表記した。また、報告後、これを収蔵管理に際しての登録番号とする。このため、報告中の表記が煩雑となるが、調査から収蔵までの過程の情報を一貫して管理し、台帳・図・日誌等関係情報を極力参照、検証できるようなかたちで残してゆきたいとの意図からである。また、番号の種別を明示する必要のあるときは、遺構については区分の記号M、遺物については記号Rを付している。
- 6 調査に際して、位置の表示に座標系の格子を利用した。100mの格子を基に、100mごとにX軸（南北）方向、Y軸（東西）方向に各10等分した格子を設定し（100m区）、南東隅を基準に、2桁の数字で各格子を表示する。同様に100mの格子をX・Y軸方向に各10等分して10m格子（10m区）を、さらに10m格子を各5等分した2m格子（2m区）までを設定した。各単位の格子はそれぞれ1から始まり、上の桁がY軸（東西）方向の、下の桁がX軸（南北）方向の位置を示す。これを図示するように組み合わせて、100m、10m、2mの格子（区）単位で位置を記録、表示に利用した。この区画は第9次調査から11次調査に用いて位置の表示の標準化を図った。
- 7 遺構番号は、調査当初1番から始まる順番号を付していたが、整理時『埋蔵文化財センター収蔵要項』に基づき、遺跡単位での順番号で管理することに変更した。第9次調査の最終の遺構番号が3桁で終わっていたことから、本調査の遺構について、調査時の番号に1000を足した番号で注記をおこなった。従って、現場記録にある遺構番号に単純に1000番を足した番号が遺構の登録、管理番号となる。このうち、現場遺構番号の9番の遺構については、明らかに第9次地点からの延長であ

ることから、第9次地点の遺構番号427をそのまま用いた。また、この番号の系列は第11次調査に引き継いだ。

ただし、この読み替えのうち、前地点の番号を引き継いだ、遺構427については、土層番号は別個に設定していることから、土層番号の重複という問題を生じてしまった（調査次数、調査番号を冠しなければ管理できない）。

遺物番号は、本調査での通し番号とした。ただし、調査の過程で、当初4区として設定した調査

	-1000m									0	+1000m
	00	90	80	70	60	50	40	30	20	10	
	09	99	89	79	69	59	49	39	29	19	
	08	98	88	78	68	58	48	38	28	18	
	07	97	87	77	67	57	47	37	27	17	
	06	96	86	76	66	56	46	36	26	16	
35区	05	95	85	75	65	55	45	35	25	15	
	04	94	84	74	64	54	44	34	24	14	
	03	93	83	73	63	53	43	33	23	13	
	02	92	82	72	62	52	42	32	22	12	
	01	91	81	71	61	51	41	31	21	11	0

	-100m										0	+100m
	00	90	80	70	60	50	40	30	20	10		
	09	99	89	79	69	59	49	39	29	19		
35-38区	08	98	88	78	68	58	48	38	28	18		
	07	97	87	77	67	57	47	37	27	17		
	06	96	86	76	66	56	46	36	26	16		
	05	95	85	75	65	55	45	35	25	15		
	04	94	84	74	64	54	44	34	24	14		
	03	93	83	73	63	53	43	33	23	13		
	02	92	82	72	62	52	42	32	22	12		
	01	91	81	71	61	51	41	31	21	11	0	

	-10m									0	+10
	55	45	35	25	15						
	54	44	34	24	14						
	53	43	33	23	13						
35-3832区	52	42	32	22	12						
	51	41	31	21	11						0

区は、別遺跡の範囲であり、新たに調査番号を付与した。そのため、これと2調査地点間で番号の系列を共有することとなった（0512 谷遺跡第2次調査）。

遺構・遺物について、調査現場において、記録・とり上げ時に現場台帳を作成し、特記事項、諸情報はこれに記入するよう努めた。この紙上のデータを整理の過程でデータ化し、整理・報告時の情報を付加している。さらに収蔵時の情報を加えて、収蔵台帳として整理、出力する予定である。

遺物への注記は、遺物番号、出土遺構・層、出土区画を記入した。遺物番号は文字列である「調査番号」と、数字である「遺物番号」の組み合わせであることから両者をハイフンを繋げた表記とした。遺構については記号Mを冠し、層位は「層」を付して表記とした。出土区画は、先述した

ように調査区画を利用しもので記号Gを冠し100m区の2桁表示と10m区・2m区を連結した4桁表示をハイフオンで繋げた表記とした。現場でとり上げた単位から、抽出・接合により別個体として登録するものについても、遺物台帳で続けて管理している。注記については、変更となった遺物番号を色を変えた注記として該当上部に追記することで行っている。注記前に抽出番号の設定を行った場合はその番号により注記し、出土時、抽出情報については、台帳上で両者の関係を記録することで管理している。

調査番号	0420			
調査地地番	福岡市西区今宿町 地内		遺跡略号	IZO-10
			分布地区番号	112(今宿)
工事面積	130ha	調査対象面積	2,998㎡	
調査実施面積	2,998㎡	調査期間	2004年5月24日～2005年7月6日	

本文目次

I 今宿五郎江遺跡調査の概要

1. 今宿五郎江遺跡の立地	1
2. 伊都区画整理事業に伴う今宿五郎江遺跡の調査	1
(1) 2004(平成16年度)までの調査	1
2002(平成14)年度の調査	1
2003(平成15)年度の調査	1
2004(平成16)年度の調査	1
(2) 2005(平成17)年度以降の調査	1
今宿五郎江遺跡第11次調査(調査番号0531)	1
今宿五郎江遺跡第12次調査(調査番号0655)	3

II 今宿五郎江遺跡第10次調査の概要

1. 今宿五郎江遺跡第10次調査地点の位置	4
2. 発掘調査の経過	4
(1) 試掘・確認調査と調査区の設定	
2004(平成16)年度対象地の確認調査	4
対象地の確認調査の結果	4
(2) 調査の経過	5
1区の調査	5
包含層の調査	7
包含層下遺構・堆積層の調査	7
拡張区の調査	7
(3) 調査成果の概要	7
1区	7
2区	7
3区	8
4区	8

III 今宿五郎江遺跡第10次地点の遺構

1. 土層と遺構分布	9
(1) 土層の観察と記録	9
(2) 表土層	9
(3) 5層・5b層	11
(4) 調査区北半部下層	11
(5) 調査区南半部下層	13
2. 各層検出の遺構	16
(1) 5層の遺構	
5b層の調査と5層中の遺構(図31・32)	16
土壌 1020(図33・34)	16

	土壩 1021 (図34・36)	16
	土壩 1022 (図34・37)	17
(2)	5b層下の遺構	18
	土壩1011 (図38)	18
	流路1012 (図40)	20
	流路1013 (図40)	20
	流路1024 (図42)	21
	流路1026 (図42)	22
	流路1034 (図42)	22
	凹地1041 (図42)	22
	凹地1028 (付図)	22
	流路1029 (付図)	22
	土壩1046 (図44・45)	23
(3)	11層中の遺構	24
	遺構1078・1079・1080・1081 (付図)	24
	遺構1078 (図49)	25
	遺構1079	26
	遺構1081	26
(4)	11層下の遺構	28
	土壩1010 (図51～53)	28
	土壩1014 (図55・56)	29
	流路1064 (図58)	32
	杭列1069 (図60・61)	34
(5)	12層下の遺構	36
	流路1018 (図63～65)	36
	土壩1065 (図66・67)	38
	土壩1066 (図69・70)	40
	土壩1067 (図71)	40
	土壩1077 (図72・74)	41
	流路1085 (図76・78)	43
(6)	28層中の遺構	44
	杭列1074 (図81)	44
	流路1089 (図80)	44
	杭列1090 (図79・81)	46
	杭列1091 (図79・81)	46
	杭列1092 (図79・81)	46
	矢板列1093 (図82～85)	46
	矢板列1094 (図61)	46
	矢板列1095 (図83・86)	47

(7) 13層・17層下の遺構	48
溝1042 (図87・88)	48
流路1043 (図91・92)	50
流路1044 (付図)	51
土壌1051 (図95・96)	52
流路1055 (図87・88)	53
杭列1058 (図99～102)	53
杭列1059 (図99・100)	54
凹地1112 (図103)	56
凹地1113 (図104)	56
流路1114 (図104)	56
杭列1115 (図106・107)	57
杭列1116 (図99・100)	57
杭列1117 (図99)	58
杭列1118 (図99)	58
矢板列1119 (図108・109)	58
杭列1120 (図105)	59
杭列1122 (図110)	60
杭列1123 (図110)	60
3. 溝427	60
(1) 溝427の調査	60
溝427 (図111～119)	60
(2) 溝427-16層中検出遺構	66
流路1016 (図120・121)	66
土壌1039 (図123・124)	67
遺構1047 (図126)	69
土壌1049 (図129・130)	73
土壌1054 (図133)	74
(3) 溝427-16層下検出遺構	74
土壌1061 (図132・134)	74
土壌1062 (図136・137・138)	75
(4) 溝427-22層中検出遺構	78
杭列1053 (図140・141)	78
矢板列1070 (図142～145)	79
遺構1071 (図146～147)	81
(5) 溝427以前の遺構	82
遺構1017 (図149・151)	82
遺構1096 (図150・152)	83
IV まとめ	87

目次

図1 今宿五郎江遺跡遠景 (東から)	図版 1	図32 5b層遺物出土状況 (G26-01・G36-11区、南から)	16
図2 今宿五郎江遺跡第10次地点 (南から)	図版 1	図33 土壙1020 (北から)	17
図3 今宿五郎江遺跡第9・10次調査地点 (南から)	図版 2	図34 土壙1020・1021・1022 (1:40)	17
図4 今宿五郎江遺跡第10次調査地点全景 (南から)	図版 3	図35 土壙1020出土遺物 (1:4)	17
図5 調査区北半部 (南から)	図版 4	図36 土壙1021 (北から)	18
図6 調査区南半部 (北東から)	図版 4	図37 土壙1022 (北から)	18
図7 調査区南半部 (東から)	図版 5	図38 遺構1011 (北から)	19
図8 調査区南半部 (北から)	図版 5	図39 遺構1011出土遺物 (1:4)	19
図9 2区全景 (北から)	図版 6	図40 流路1012・1013 (北から)	20
図10 3区全景 (北から)	図版 6	図41 流路1012出土遺物 (1:4)	21
図11 溝427・土壙1062土層 (G26-06区南面、北から)	図版 7	図42 流路1024・1026・1034・凹地1041 (1:200)	22
図12 溝427土層 (G26-05区北面、南から)	図版 7	図43 凹地1028・流路1029出土遺物 (1:4)	22
図13 調査区北壁土層 (東半部、南から)	図版 8	図44 土壙1046 (1:80)	23
図14 調査区北壁土層 (西半部、南東から)	図版 8	図45 土壙1046 (北から)	23
図15 今宿五郎江遺跡の位置 (1:50,000)	1	図46 土壙1046出土遺物 (1:4)	24
図16 今宿五郎江遺跡調査区地点位置図 (1:2,000)	2	図47 遺構1078出土遺物 (1:4)	24
図17 今宿五郎江遺跡平成16年度確認調査位置図 (1:2,000)	4	図48 遺構1079・1080出土遺物 (1:4)	25
図18 拡張2・3区、谷2次地点 (北から)	5	図49 遺構1078 (北から)	26
図19 2区全景 (東から)	6	図50 遺構1081出土遺物 (1:4)	27
図20 3区全景 (東から)	6	図51 土壙1010土層断面 (西から)	28
図21 今宿五郎江第10次地点調査区 (1:800)	8	図52 土壙1010 (1:40)	29
図22 土層断面模式図	9	図53 土壙1010 (北から)	29
図23 中央土層畦断面 (1:40・80)	10	図54 土壙1010出土遺物 (1:4)	29
図24 中央部土層 (土層畦23、北から)	11	図55 土壙1014 (1:40)	30
図25 北壁土層断面 (1:40・80)	12	図56 土壙1014 (北から)	30
図26 北壁土層 (南東から)	14	図57 土壙1014出土遺物 (1:4)	31
図27 北壁土層 (東端部埋もれ木、南東から)	14	図58 流路1064 (北から)	33
図28 北壁土層 (溝427、南東から)	14	図59 流路1064出土遺物 (1:4)	33
図29 2区南壁土層 (1:80)	15	図60 杭列1069 (東から)	34
図30 2区北壁土層 (1:80)	15	図61 杭列1069 (1:40)	35
図31 5b層遺物出土状況 (G26-01区、東から)	16	図62 杭列1069出土遺物 (1:4)	36
		図63 流路1018 (北東から)	36
		図64 流路1018土層断面 (南から)	36
		図65 流路1018 (1:200)	37
		図66 土壙1065 (1:40)	38
		図67 土壙1065 (北から)	38
		図68 土壙1065出土遺物 (1:4、1:6)	39
		図69 土壙1066 (1:40)	40
		図70 土壙1066 (東から)	40
		図71 土壙1067 (1:40)	41
		図72 土壙1077 (1:40)	41
		図73 土壙1066・1067出土遺物 (1:4)	41
		図74 土壙1077 (東から)	42
		図75 土壙1077出土遺物 (1:4)	42

図76	土壌1085 (1:40)	43	図115	溝427土層3 (1:80、X=63520/63510/63500)	64
図77	土壌1085出土遺物 (1:4)	43	図116	溝427土層 (G26-98北面)	65
図78	土壌1085 (北東から)	43	図117	溝427土層 (G36-05北面)	65
図79	杭列1090・1091・1092 (南から)	44	図118	溝427土層 (G26-02北面)	65
図80	流路1089 (南から)	44	図119	溝427土層 (G35-10西面)	65
図81	杭列1074・1090~1092 (1:80)	45	図120	土壌1016 (1:40)	66
図82	杭列1093 (1:30)	46	図121	土壌1016土層 (南から)	66
図83	杭列1095 (1:30)	46	図122	土壌1016出土遺物 (1:4)	66
図84	杭列1093 (東から)	47	図123	土壌1039 (1:40)	67
図85	杭列1093 (根入れ部、西から)	47	図124	土壌1039 (東から)	67
図86	杭列1095 (東から)	47	図125	土壌1039出土遺物 (1:4)	68
図87	溝1042・1055 (1:100)	48	図126	遺構1047 (東から)	69
図88	溝1042 (北から)	48	図127	遺構1047出土遺物1 (1:4)	70
図89	溝1042出土遺物 (1:4)	49	図128	遺構1047出土遺物2 (1:4)	71
図90	溝1042・凹地1043出土遺物 (1:4)	49	図129	土壌1049 (1:20)	73
図91	凹地1043 (北から)	50	図130	土壌1049 (西から)	73
図92	凹地1043土層 (杭列1118・1059) (南から)	50	図131	土壌1054出土遺物 (1:4)	74
図93	流路1044出土遺物1 (1:4)	51	図132	土壌1061 (1:40)	74
図94	流路1044出土遺物2 (1:4)	51	図133	土壌1054 (北から)	75
図95	土壌1051 (1:40)	53	図134	土壌1061 (東から)	75
図96	土壌1051 (北から)	53	図135	土壌1061出土遺物 (1:4)	75
図97	土壌1051出土遺物 (1:4)	53	図136	土壌1062 (1:40)	76
図98	流路1055出土遺物 (1:4)	53	図137	土壌1062 (北半部、東から)	76
図99	杭列1058・1059・1116~1118 (1:40)	54	図138	土壌1062 (断面、北から)	77
図100	杭列1058・1059・1116~1118 (北から)	55	図139	土壌1062出土遺物 (1:4)	77
図101	杭列1058 杭遺存状況 (南東から)	55	図140	杭列1053 (1:40)	78
図102	杭列1058 遺物出土状況 (北から)	55	図141	杭列1053 (北から)	78
図103	凹地1112 (北から)	56	図142	矢板列1070 (1:40)	79
図104	凹地1113・流路1114 (北から)	56	図143	矢板列1070 (断面、東から)	80
図105	3区東辺部遺構 (1:40)	57	図144	矢板列1070 (断面、西から)	80
図106	杭列1115 (1:30)	57	図145	矢板列1070 (矢板根入れ状況、北から)	80
図107	杭列1115 (東から)	57	図146	遺構1071 (1:40)	81
図108	杭列1119 (1:40)	58	図147	遺構1071 (東から)	82
図109	杭列1119 (北から)	58	図148	遺構1071 (北から)	82
図110	杭列1122・1123 (1:80)	59	図149	遺構1017 (1:100)	83
図111	溝427上部遺物出土状況 (調査区中央部、北から)	61	図150	遺構1096 (1:100)	83
図112	溝427完掘 (調査区中央部、北から)	61	図151	遺構1017 (北から)	84
図113	溝427土層1 (1:80、X=63580/63570)	62	図152	遺構1096 (西から)	84
図114	溝427土層2 (1:80、X=63561/63540)	63	図153	遺構1017・1096出土遺物1 (1:4)	84
			図154	遺構1017・1096出土遺物2 (1:4)	85

表目次

表1	土壤1020出土遺物觀察表	17
表2	土壤1011出土遺物觀察表	20
表3	流路1012出土遺物觀察表	21
表4	凹地1028・流路1029出土遺物觀察表	23
表5	土壤1046出土遺物觀察表	24
表6	遺構1078出土遺物觀察表	25
表7	遺構1079・1080出土遺物觀察表	26
表8	遺構1081出土遺物觀察表	28
表9	土壤1010出土遺物觀察表	29
表10	土壤1014出土遺物觀察表	32
表11	流路1064出土遺物觀察表	34
表12	杭列1069出土遺物觀察表	36
表13	土壤1065出土遺物觀察表	40
表14	土壤1066・1067出土遺物觀察表	41
表15	土壤1077出土遺物觀察表	42
表16	土壤1085出土遺物觀察表	43
表17	溝1042出土遺物觀察表	49
表18	凹地1043出土遺物觀察表	50
表19	流路1044出土遺物觀察表	52
表20	土壤1051出土遺物觀察表	53
表21	流路1055出土遺物觀察表	53
表22	土壤1016出土遺物觀察表	67
表23	土壤1039出土遺物觀察表1	68
表24	土壤1039出土遺物觀察表2	69
表25	遺構1047出土遺物觀察表1	72
表26	遺構1047出土遺物觀察表2	73
表27	土壤1054出土遺物觀察表	74
表28	土壤1061出土遺物觀察表	76
表29	土壤1062出土遺物觀察表	77
表30	土壤1062出土遺物觀察表	86

I 今宿五郎江遺跡調査の概要

1. 今宿五郎江遺跡の立地

今宿五郎江遺跡は、高祖山麓から今宿平野を今津湾へ向かって伸びる丘陵の末端部に位置する。今津湾岸には、博多湾奥に通有の陸繋砂州起源の砂丘が発達する。今宿平野前面にはその砂丘により、閉じられた潟湖の痕跡である湿地が広がっている。今宿五郎江遺跡は、その低地に突出するように形成された砂礫台地とその周縁部に立地している。この台地は地形面としては低位段丘に分類されている⁹⁾。周縁部は、浅く広い谷を形成し、遺跡の一部はその地形まで及んでいる。

2. 伊都区画整理事業に伴う今宿五郎江遺跡の調査

(1) 2004（平成16年度）までの調査

伊都区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、2002（平成14）年度着手し、現在、継続調査中である。このうち、2004（平成16）年度までの調査については、概要を記し¹⁰⁾、一部については報告を行っているので¹¹⁾、ここでは調査地点名を列挙する。

2002（平成14）年度の調査 今宿五郎江遺跡第8次地点、今宿五郎江遺跡第9次地点。このうち、今宿五郎江遺跡第9次地点2区として調査した調査区は、遺跡範囲の検討から、谷遺跡群第1次地点として分別した。

2003（平成15）年度の調査 今宿五郎江遺跡第9次地点。継続調査で、前年度部分を1区、当該年度分を3区として調査を進めた。

2004（平成16）年度の調査 今宿五郎江遺跡第10次調査。3区拡張し、このうち第4区は、遺跡範囲の検討から谷遺跡群第2次調査として区分した。今年度報告。



図15 今宿五郎江遺跡の位置（1：50,000）

(2) 2005（平成17）年度以降の調査

今宿五郎江遺跡第11次調査（調査番号0531）

今宿五郎江遺跡の西縁部にあたる調査地点である。確認調査を平成17年度の2005年5月着手し、対象範囲のうち、その西辺部、北辺部を除く約7,000㎡について本発掘対象とした。本発掘調査は、2005年7月8日から着手した。調査は翌年度におよび、2006年11月30日完了した。

今宿五郎江遺跡第11次調査は、遺跡の西北部に位置を占める。大まかに、調査区の東半部は段丘面上、調査区の西半部は谷部にあたる。調査区の北辺は、上述した後背湿地の縁に近い位置である。南辺は遺跡の西を限る谷部の谷頭に近く、遺跡の立地する中位段丘面の最高所に近い位置にあたる。東辺は第2次調査区に接し、遺跡東半部とは谷によって画された段丘面にあたる。西辺部は遺跡西側の谷を超え、対岸の一部を含む位置にある。

調査の経過 本地点は予想以上の重層遺跡であることがわかり、当初計画したような北側から順に終了するという工程が踏めず、結果として、段丘面全域の遺構検出と北半部遺構、および谷部上部埋

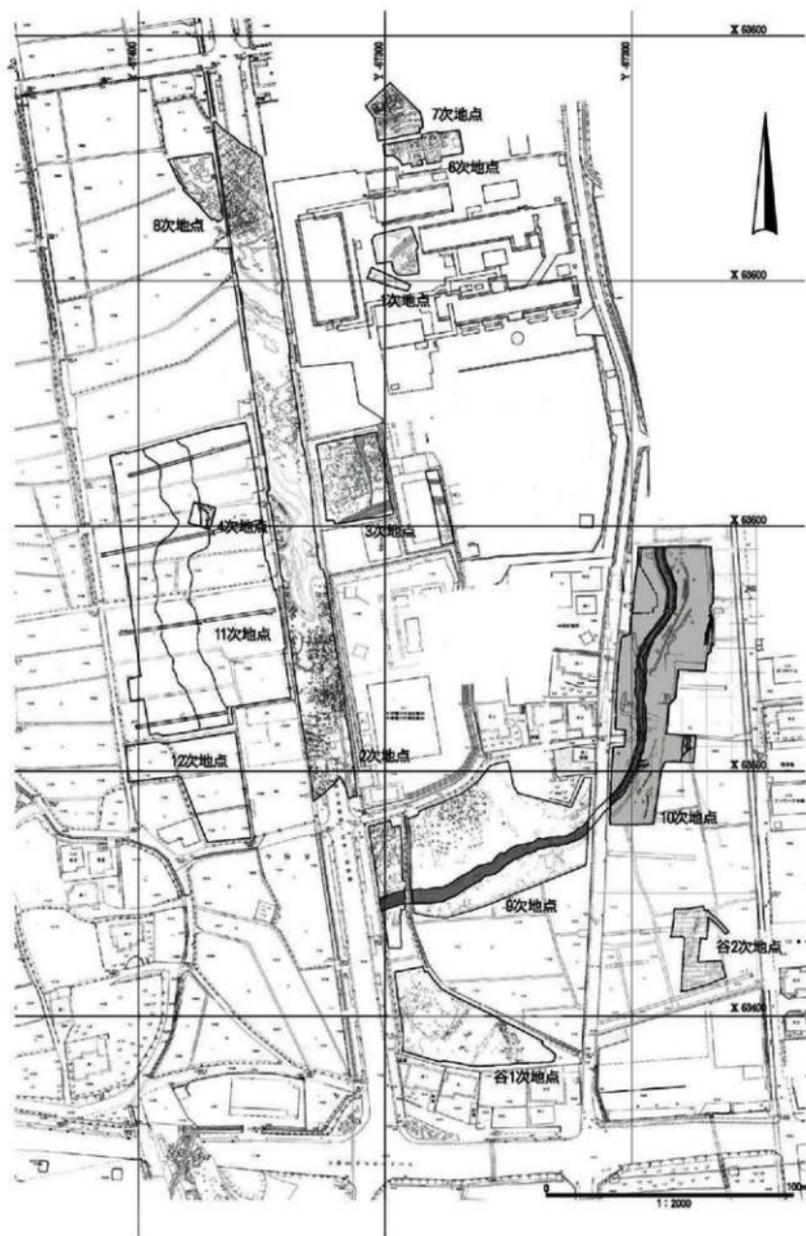


图16 今宿五郎江道林洞调查地点位置图 (1:2,000)

積層の調査を平成17年度でおこない、残る段丘上の南半部の遺構の調査、ならびに谷部下半積層、および谷部に掘削された大溝ほか遺構の調査は平成18年度に跨ることとなった。なお、この過程で西縁部の一部を拡張し、遺構分布の確認を行った。

調査の成果 調査区東半部の段丘面上と同西半の谷部とは内容に別があることから、個別に記述する。

段丘面上の調査 段丘面は南から北へ緩く傾斜し、遺跡北端で後背湿地下に埋没する。段丘面上では、調査区北端部では遺構は不明瞭である。遺物は分布するが、不整な落ち込みが密に分布した状態にあり、自然の営為によるものかと考えられる。

調査区南半部では柱穴、溝といった遺構が密に分布し、掘立柱建物を復原することができた。柱間1×1間、1×2間の規模の建物が大部分であるが、なかに布置りの柱穴をもち3×4間かそれ以上の構成を復原できる建物が含まれる点注目される。溝は弧状を成すものが多く、中心とする遺構を周回するものとみられるが、具体的にそれを示す出土状況は確認できなかった。また、こういった溝とは別に大規模な溝で第2次調査地点から伸びるものがある。段丘面上の遺構は、ほかと同様出土遺物は少量でその中でも弥生時代終末期のものが顕著である。弥生時代以外の出土遺物はごく少量である。

谷部の調査 谷部では、元あった地形を利用して、弥生時代中期後半期の包含層を切って、大形の溝が掘削されている。幅は3m、深さ1m以上で、蛇行し、下流に抜けることなく終わる。

これと上述段丘面上の溝とが対応するような位置関係をもっており、あるいは一連のものとして掘削されたものかもしれない。溝の下流側は、早い時期、おそらく出水などにより急速に埋没し、これに対処するかの様に溝北端部に密集して乱杭が打設されている。この後、泥炭質の砂層が堆積し、埋没してゆくと、その過程で遺跡側から投棄される土器により、弥生時代後期後半期の遺物を大量に含む包含層が形成される。このなかで、矢板列の打設などの人為的な営為も加わるが、その痕跡は限定されている。溝埋没後、谷自体の埋積が始まり、その過程でもやはり大量の土器が投棄されながら、弥生時代終末期まで埋積と包含層の形成が継続する。

出土遺物 調査出土遺物量は、コンテナ3900箱程であるが、その大部分はこの谷部からの出土である。遺物の大部分は弥生土器（後期・終末期）、次いで木器類（農具、容器、漁労具）、さらに、石器類（叩石などの工具、石錘を主とした漁労具）が多い。分量としては少量であるが、鉄器（鋳造鉄斧）・青銅製品（小型仿製鏡、後漢鏡、銅鏡）、碧玉・水晶・未成品、ガラス製品（ガラス小玉）などが混じり、非常に多様である。

弥生土器は、明らかにまともな状態で投棄され、かつ完存の状態の資料を層位的に得ることができた。また、これらに混じり、瀬戸内系の土器を初めとした列島内からの搬入土器、さらに兼良系土器、三韓系土器といった朝鮮半島からの搬入土器が混じる。

今宿五郎江遺跡第12次調査（査番号0655）

今宿五郎江遺跡の範囲西縁部にあたる地点である。西の大塚遺跡の範囲と接し、調査区の設定では、入り組んだ配置となった。11次地点の南に接した位置にある。

【注】

- (1)福岡市土木局 1989 『福岡市土地分類細部調査報告書』遺跡中央部に位置する変電所内での確認調査および、調査中の所見からすると、烏酒ロームに良く似る褐色粘質土がみられ、あるいは、中位段丘かと思われる。
- (2)福岡市教育委員会 2005 『今宿五郎江5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第872集
- (3)福岡市教育委員会 2007 『今宿五郎江6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集

II 今宿五郎江遺跡第10次調査の概要

1. 今宿五郎江遺跡第10次調査地点の位置

遺跡の立地について、前章で触れたが、今宿五郎江遺跡第10地点ほかとして調査した平成16年度対象地は、遺跡の範囲東縁部にあたる(図16)。調査区を含む今回調査対象地の現況は水田である。道路を隔てて西側、台地部最高所となる変電所付近の比高は、現況で3mほどある。水田の東、住宅地となっている一帯は低平な台地となっている。今回調査地は、東西の台地にはさまれた広く浅い谷部に位置している。この谷は、谷集落が立地する遺跡南方の丘陵西縁に沿い、流下するものであり、同丘陵西側を流下する谷が、遺跡南縁部の第9次調査地点で東方へ向きを変え、本次調査区南部で合流する地形である。現況は、南から北へ段差をもった水田である。調査区南方の田面で標高6.0m、調査区北端にあたる田面で標高5.5mを測り、極緩い勾配をもっている。

2. 発掘調査の経過

(1) 試掘・確認調査と調査区の設定

試掘溝の設定伊都区画整理事業地内の埋蔵文化財については、平成8年度女原・徳永地区の一部を除く全域について、試掘・確認調査を実施し、調査対象範囲の絞り込みを行った。これは、ほぼ周知の埋蔵文化財包蔵地として分布地図に掲げる範囲およびその周縁部に重なるものであった。

2002(平成14年度)、事業地内において本発掘調査を着手するにあたり、対象地内について確認調査を重ねて実施し、調査範囲を確定し、調査区を設定した。以後、この手順に従い、年度毎に事業の進捗状況に合わせた対象地を選定し、確認調査を実施の上調査範囲を決定、調査区を設定して本発掘調査を実施している。この、確認調査は、機力掘削によるトレンチ調査で行っている。2004(平成16)年度対象地の確認調査(図17) 上述したような地形環境にある南北約200m、東西60mの田地約1ha余が対象地となった。試掘溝は、遺跡範囲に交差するように、地形を横断する方向(東西方向)に設定し、遺構、遺物の出土状況をみながら南側から開始して、機力で8条を掘削した。現地では、表土(水田耕土)を別場所での利用のため、場外へ搬出する必要が生じ、そのために積み込み場所まで移動集積する作業が加わったことから2004年4月19日着手後、表土集積を終え、調査トレンチの掘削を完了したのは、5月21日である。

対象地の確認調査の結果 対象地北西部では、水田耕土層直下で、台地の裾部となる礫層を確認した。これに沿うようにトレンチ6～8で、西に位置する今宿五郎江9次地点で調査した溝の延長を確認した(M427)。また、これに重なる位置で、密度の高い包含層を確認した。



図17 今宿五郎江遺跡平成16年度確認調査位置図(1:2,000)

谷部では基盤層とする灰色～灰黄色シルト・粘土層直上の砂層中で杭列を検出した。時期は判然としない。近世を含めて平安時代、古墳時代までの可能性が考えられる。水田の可能性を考え注意して掘削したが、水田の耕作面は確認できなかった。その耕土層と思しき層も確認できていない。谷基盤層とした層の上面では、木炭の分布が顕著である。また、骨片らしきものも確認した。灌木の株も埋もれ木となって遺存しており、往時の地表面を示すものである可能性も考えられた。遺物は、台地裾部に沿う帯状の範囲に密に分布し、それを離れて谷中央部に向かっては急激に密度を減じることがわかった。

平成16年度本発掘調査区の確定

以上の所見から、今宿五郎江遺跡側の北半部について本発掘調査が必要と判断した。また、杭列については、部分的に調査区を設定して、年代、性格の確認を進めることとした（本次調査2・3区、谷遺跡第2次地点）。また、対象地南辺部で焼夷弾の出土があった。調査地点の北に所在する三菱工場の空襲の際の流れ弾か。



図18 拡張2・3区、谷2次調査地点（北から）

(2) 調査の経過

1区の調査 確認調査終了後、2004年5月24日から表土鋤取りに着手した。溝、包含層を検出した対象地北西部から機力による鋤取りを進めた。

表土としたのは、台地部では基盤礫層面まで、谷部では、現耕土から5層下部（図23・25）の遺物が検出する深さまでの部分である。

調査区北西部は台地裾部にあたるが、削平されて遺構の遺存しないことを確認した後、残土置場とした。鋤取りは谷中央部（東）方向へは、遺物の出土状況を確認しながら進め、遺物の分布が途切れる位置までを調査区とした。南方向へは溝（427）を確認した位置からやや広げ、やはり遺物の分布が途切れる位置までを調査区とした。結果として東西約35m、南北約110mほどの範囲を調査区とした（1区）。

表土鋤取りは、残土の移動、集積作業を挟みながら、6月18日までを要した。この間、基準点測量をおこない、北側から順次調査格子の基準杭の測設を進めた。今回調査区は1000m格子25・26・35・36に位置する。

調査の経過は大きく包含層の調査の段階と、その下位の遺構、堆積層調査の段階とに分かれる。



図19 2区全景（東から）



図20 3区全景（東から）

包含層の調査 台地縁辺に装用に包含層(5層・5b層、11頁第Ⅱ章)が生成しており、特に調査区中央部ではごく高い密度で遺物を含む(5b層)ことがわかり、まず、包含層の調査を進めることとした。5b層は遺物と礫の洗い出し層となっていた。遺物は、2 m格子ごとにとり上げた。遺物出土量は、整理時の分量でコンテナ400箱ほどであった。その大半は後期弥生土器片である。細片化して、磨耗が顕著である。土器類には、緑釉陶器、越州窯系青磁、瓦の出土があった。その他には、石器、鉄滓が混じる。また、漢鏡、青銅製鋤先、銅鏃が混じって出土した。5b層の掘りあげは10月までを要した。この過程で、5b層生成以前に掘削された遺構(1020～1022)、生成に前後して形成された流路等(1024・1026・1012・1013等)を検出調査した。

包含層下遺構・堆積層の調査 包含層の調査は北から南方へ進めたが、それ以下の調査は、調査区を大きく南北に3区分(南区、中央区、北区)し、南区から順次掘りあげた。各区の完掘に合わせ、デジタルモザイク写真製作および、溝427ならびに最下面の全体遺構図作製のための、測量及び空中写真撮影を行った。

各区とも、台地(裾)部と谷部とに分かれるが、調査は、台地部の基盤礫層面の遺構と、谷部埋積層と各層検出の遺構の調査を併行した。南区を12月中旬略完了した。中央区は12月中旬着手し、2005年2月中旬までを要した。北区は2月上旬着手し、3月末掘り下げを完了した。埋め戻しは、各区毎に完掘後、順次行った。

拡張区の調査(付図) 1区の調査終盤に合わせて、確認調査時杭列を検出した位置について、1区側の杭列を残し、さらに拡張して調査区を設定した。1区の一部から東側に張り出すように2区・3区を設定し、表土鋤取りを行った。また、南に離れた位置に4区を設定し、4月18日から表土鋤取りを行った。4区は、文化財分布地図では、隣接する谷遺跡群の範囲に含まれるため、調査名は谷遺跡群第2次調査地点(調査番号0512)として取り扱うこととなった。

拡張区の調査は、2005年4月14日から行ない、7月6日完了した。

(3) 調査成果の概要

1区 包含層とその下位に遺構面、谷部ではさらに埋積層中に重層的に遺構を検出した。包含層は、台地際に沿って広がる。洗い出しにより、遺物が河原状に堆積する部分がある。流路の変更に伴い、複数枚に分離できる。上位で鎌倉時代の土壌を検出した。

下位の遺構面、台地縁辺部に2条の弥生時代の溝を検出した。一方は中期土器を出土し、やや高い位置で断続的に遺存する(1017)。他方は、谷の堆積と接する位置に掘削された大溝(427)で、埋積層中に大量の後期弥生土器と、木器類、大量の割材等が出土した。溝底の2箇所、矢板列(1053・1070)、埋積土中で土壌(1061ほか)を検出した。谷堆積層、台地礫層上で土壌を検出した。弥生時代、平安時代、鎌倉時代のものがある。

谷部では、杭列が重層的に出土した。水田施設と見えるものがあるが、全域に後世の出水による削剥を受けており、水田の田面等は遺存しない。

遺物は、後述する2・3区を加え木器類を含めてコンテナにして1,430箱ほどが出土した。包含層から大量の後期弥生土器細片に混じり、銅戈銚型、鏡片、銅鏃、青銅製鋤先等が出土した。また、緑釉陶器・越州窯系青磁が多数含まれている。大溝からは、土器・木器類の他、銅鏃が出土した。埋没最終段階には土師器が投棄されている。

2区 拡張区は谷中央部に位置する。遺構検出面は谷堆積層中に3面ある。上位面では北西方向の杭列を、中位面では流路を検出した。下位面は基盤となる谷堆積層面となる。調査区東縁に沿い、や

や東に振れて北流する流路と、杭列を検出した。北半部で、矢板列を検出した。遺物は、小量が主に上位遺構面出土した。

3区 砂層を間において上下2面で遺構を検出した。上位の遺構面では、杭列、穿掘状の凹地を検出した。その流入位置には弧状の矢板列、杭列が複数条設置されている。下位面で、矢板列、南北方向の流路を検出した。遺物は上下面間の砂層から、後期弥生土器が少量出土した。

4区 (谷遺跡群第2次調査) 調査区では、表土下に包含層が生成し、その下に2面の遺構面がある。包含層は調査区西半部に分布し、遺物量は少ない。後期弥生土器を主とする。上位の確認面では北へ向かう流路、杭列を検出した。古墳時代後期の遺物が出土する。木器が一箇所にまとまって出土した。杭列は散漫に分布し、明確な列を掴むことができない。遺存状態から、かなり新しい時期のものが含まれていることがわかる。

下位の確認面では、矢板列、流路を確認した。流路は幅1.5mで緩く蛇行し、北流する。ごく少量の弥生土器が出土した。矢板列は調査区北東隅で、北西から南東方向に伸びる1条を検出した。古墳時代後期遺物を含む流れにより上部を削除され、基部のみが遺存する。

遺物は、包含層・流路を主としてコンテナ9箱ほどの分量が出土した。上記のほか流路下位層から晩期縄文土器が出土した。

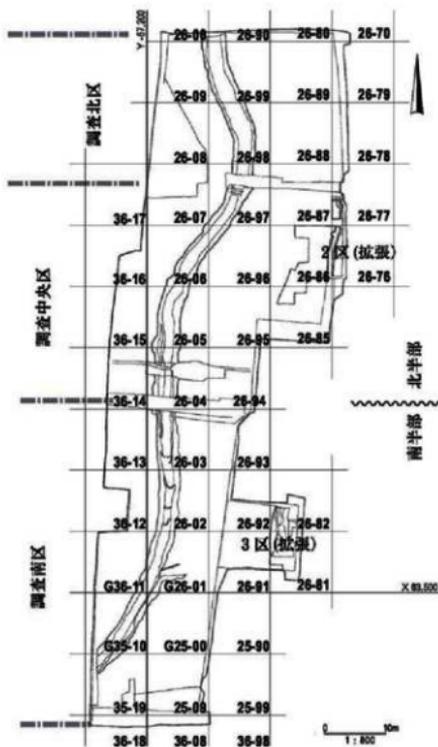


図21 今宿五郎江第10次地点調査区 (1:800)

Ⅲ 今宿五郎江遺跡第10次地点の遺構

1. 土層と遺構分布

(1) 土層の観察と記録 (図18~26)

調査区の2/3は、埋積された谷部にあたることから、調査に際しては、いくつかの層毎に区分し、掘り下げを進めることができた。

土層観察は、10m格子の畦 (南面を基本とする)、調査区中央に残置した観察用畦 (中央土層)、および調査区北壁 (北壁土層) について観察、記録した。他に、調査格子に沿って残置した畦でも観察、記録した。拡張区である2区、3区では、南北の調査区壁について観察、記録した。いずれも谷を横断する、東西方向の土層である。

調査区内の土層について、数字による表記とし、調査の進行に伴い、確認した時点で順番号を付していった。調査は北から南へ進み、折り返して完掘していったことと、台地部と谷部との調査が併行することとなったことから、必ずしも層番号 (名) が、層序を示すものとはならなかった。溝427の埋積土については、この層名の系列による層名を付した。小形の遺構については、遺構を単位に適時、番号または文字による表記を行った。

以下に、調査に際して比較的広範囲で確認し、鍵層となる土層について記述する。

(2) 表土層

ここで表土層とするのは、表土鋤取りに際して機力により除去した部分で、複数層ある。水田耕土を1層として2~4層に区分した。鋤取りは、さらに下位の5層の上部までを含む。

上部は現水田に係わる層である。1層は、現水田耕土及び床土。2層は客土層で、北壁のみで確認される層である。2層は田面の整備に係わるもので、性状からして、おそらく台地部からの客土によるものであろう。

3層および4層は、厚薄あるが、下位の5層と同様、浅く広い谷の埋積層であり、谷部の全域に分

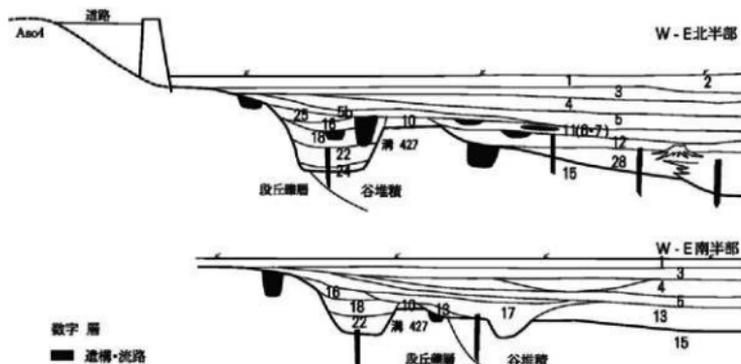
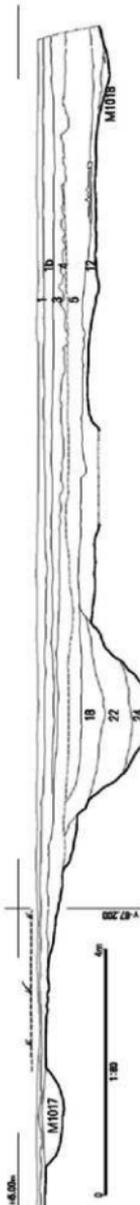


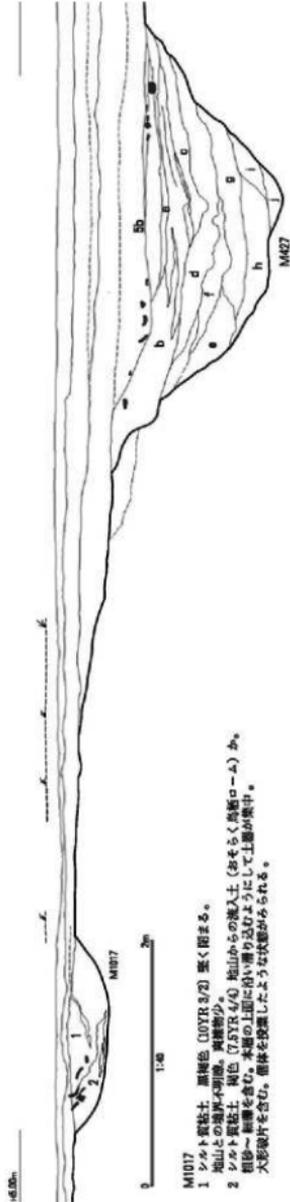
図22 土層断面模式図



- 1層 粗砂混りシルト
1b層 砂混り粘土
3層 粗砂混り粘土
4層 粗砂混り粘土
5層 粘土
12層 粗砂
M1018 粗砂

粗砂混りシルト (2.5Y 4/2) 礫小土の下層部、断面中央、傾斜なし。
粗砂 (0.5YR 4/4) 礫小土(上層部)の露状に粗砂が混在 (3枚)
灰黄色 (0.5YR 4/2) この層まで割合を顕著に含む。下部は流れ下ったように凹凸が顕著。
灰黄色 (0.5YR 3/2) 全体を混ると濃い感じ。4層、下部は流れ出し層で、礫小土の混在 (0.5YR 4)。
暗褐色 (0.5YR 3/3) (S層)、下部は流れ出し層で、礫小土の混在 (0.5YR 4)。
上部に11層がわずかに部分的に露る。

灰い黄褐色 (0.5YR 4/3) 断面の端部、下部のふい分け顕著。



- M1017
1 シルト質粘土 黒褐色 (0.5YR 3/2) 強く閉まる。
2 粗砂と粘土の混合 (0.5YR 4/2) 粘土山からの侵入土 (砂を多く含んだシルト) か。
粗砂一層部を含む。本層の上面は斜い溝り及びようにして土層が集中。
大形鏡片を含む。傾斜を強調したような状態がみられる。

M427

- a 細砂の粗砂一粗砂
b 粘土 (砂混り)
c シルト質砂 (混濁り) 黒褐色 (0.5YR 3/1) 泥 1) 粘結性粘土を多量に含む。
d シルト質砂 (混濁り) 黒褐色 (0.5YR 3/2) 軟質、粘結性粘土 (人工土) も多量に含む。植物の多い層位は多い。
e (f) に向いたが、多量の粗砂上層 (巨穴) を含む。粗砂からの粗砂人工土 (S層)。
f (f) に向いたが、多量の粗砂上層 (巨穴) を含む。粗砂からの粗砂人工土 (S層)。
g 粗砂混り粗砂 (2.5Y 4/2) 粗砂は少なく、泥は粗砂混り、軟質。 (0.5YR 4/3)。
h 粗砂 (2.5Y 4/2) 粗砂は少なく、泥は粗砂混り、軟質。 (0.5YR 4/3)。
i 粗砂 粗い黄褐色 (0.5YR 5/3) 粗砂からの侵入による。傾斜、灰状 (グライ化) 部分があるためか。
j 粘土、黒褐色 (0.5YR 5/3) の間隙を砂質シルトが埋める。シルト：灰色 (7.5Y 5/1), (0.5YR 4)

図23 中央土層断面 (1:40・80)

布する。3層は褐灰色ないし灰黄褐色、粗砂混じりの粘質土である。3層と上位の層では粗砂、時に細礫を顕著に含む。北壁あたりでは東端部では砂層となる。4層は黒褐色粘土で、色調にはやや幅がある。砂は5層よりも少ない。下面は緩い波状を呈す。部分的に砂層を挟む。粗砂、細礫混じりで流水による堆積層が載る。中央土層では、表土から3層まで粗砂が顕著で、以下は小量となる。4層からはごく小量の遺物が出土した。5層と同様の構成であるが、細片資料である。

(3) 5層・5b層

シルト質の粘土層である。北壁土層では4層との色調差は小さく黒褐色、中央土層では暗褐色を呈す。同位置では、4層より明色である。谷部の埋積層で、全域に分布するが、特に調査区北半部に顕著である。5層の下部から遺物の出土が顕著になる。調査時、この5層上部までは、表土として機力により掘取った。調査中央区では、この位置から粘土味が強くなるように観察された。G26-03区を中心とする地点では、5層下部に粗砂の薄層が挟まれており、平面の広がりや追うと帯状の砂堆が検出された。後述するが、雨裂状の流路の痕跡とみられ、重層的に検出された(M1024・1026・1034)。

5層下面では遺物および、礫層由来のクサリ礫で構成される、洗い出し層ともいうような状態で、包含層が形成されている。5b層として分離し、記録、遺物取り上げを行った。先述したように遺物の分量は、コンテナ400程となったが、形成の要因を反映して、土器類の遺存状態は不良である。遺物の時代は、弥生時代後期から終末期、平安時代に含まれるものが顕著である。また、剥片石器、礫石器も目立って出土した。全体に褐鉄鉱の生成が顕著で、それに汚染された状態の遺物も多い。

5b層は台地部では基盤礫層を削り堆積しており、台地部の遺構は、5b層下で検出された。谷部では流路、溝状の凹地を検出した。

(4) 調査区北半部下層

5層から、谷堆積基盤層である15層までの谷部埋積土層間は、中央土層畦を境にして、南北でやや異なるあり方をすることから、北半区と南半区とにわけ、まず北半区土層について記す。

11層(6層)黒褐色粘土質シルト。細かな繊維あるいは、粒状の物質を含み軟質。谷西岸際の6層として記録した層を含む。北壁東端部では埋もれ木を埋めるように堆積しており、埋もれ木の上端に一致している。溝427の最上部の土層と同性状である。直接連続することはないが、土壌14周辺の状



図24 中央部土層(土層畦23 北から)

況からすると16層の一部と同時期のものかもしれない。調査区北区では、本層中から下位の7層にかけて投棄土器群が検出された（遺構1078～1081）。

12層 11層直下の黒褐色シルト質粘土層である。11層との境界は明瞭である。粗砂～細礫を含むほかに、木質を顕著に含む。第9次地点での2層でのあり方と良く似ており、同時期の生成とできるものか。12層は、基盤15層を削り直上に堆積するか、下位の28層上に堆積する。

遺物は後期弥生土器の細片、木質遺物が出土している。コンテナで20箱ほどの分量である。下面、地山上で土塊（1065・1066・1067・1077・1085）、流路（1018・1042・1055）を検出した。

28層 谷中央部を浅く削り、堆積する。黒褐色若しくは褐灰色の粘土、砂層の部分があり、比較的締まっている。2区では南北方向に灰色シルト、木質を多く含む黒褐色細砂層がレンズ状に挟まり、下部が15層を削り込んで流路状となる（1089）。これに沿い、層中で杭列を検出した（1090・1091）。28層下面15層上で杭列1074・1091・1092を検出した。

15層 谷の基盤層である。北壁土層部での深掘りによる観察によれば、西岸部では、大きく谷中央に向かい傾斜するが、谷中央部では、水平な堆積を示している。褐灰色ないし黄灰色を呈す砂混じりの粘土、粘質土である。強く締まる。

(5) 調査区南半部下層

13層 調査区南半部の5層直下では、11層の分布が認められず、砂層が分布する。細部を見ると、粘質土から粗砂までの単位の重なりであり、全体に乱れた感じである。白砂層を含む。全体として灰褐色を呈す。遺物は、層中から散漫に出土した。コンテナ5箱ほどの分量で、大半は後期弥生土器の細片資料である。

17層 13層を削り込み、3区を中心とした調査区南半部の一部に分布する。3区土層断面の観察では、オリブ灰色の砂層であり、粗砂・細砂の薄層の重なりとなっている。遺物は層中から散漫に出土した。コンテナ7箱ほどの分量で、大半は後期弥生土器の細片資料である。

3区を中心とした下位遺構は、13層中、17層下で検出したが、両層の関係から、13層中あるいは13層下の遺構とできる。3区17層分布範囲で検出した遺構115は明らかに17層により洗い出された状態を示している。

- M427 土層
M427-18 層
a 腐状の細砂～粗砂 砂層；黄い黄褐色（10YR 5/3）、粘土質シルト層；灰黄褐色（10YR 4/2）で有機物（泥）混り。
b 粘土（砂混り） 灰黄褐色（10YR 4/2）→23 層
c シルト質砂（泥混り） 黒褐色（7.5YR 3/1） 植物遺体を多数に含む。
d シルト混り粘土 黒褐色（10YR 3/2） 軟質。植物遺体（人工品も）多量に含む。植物の多い部位は砂が多い。
e (b) に同じだが、多量の地山粘土層（巨大）を含む。西岸からの流入土（21 層）。
f 粘土混り粗砂 灰黄褐色（10YR 4/2） 粗砂プロットを挟む。中央部では黄褐色（10YR 5/3）。
M427-22 層
g 粘土 黒褐色（10YR 3/2） 飛入物は少なく、軟質。
M427-24 層
h 粘土 即灰黄色（2.5Y 4/2） 飛入物は少なく、西岸では粗砂混り。軟質。（24層）
i 粗砂 黄い黄褐色（10YR 5/3） 東岸からの流入による。沸状。沸状（グライ化）する部分があるためか、にぶい黄褐色（10YR5/3）。
j 粘土 沸状（24）の間隙を砂質シルトが埋める。シルト：灰色（7.5Y 5/1）。（24層）M427



図26 北壁土層（南東から）



図27 北壁土層（東端部埋もれ木 南東から）



図28 北壁土層（溝427 南東から）



図29 2区南壁土層 (1:80)

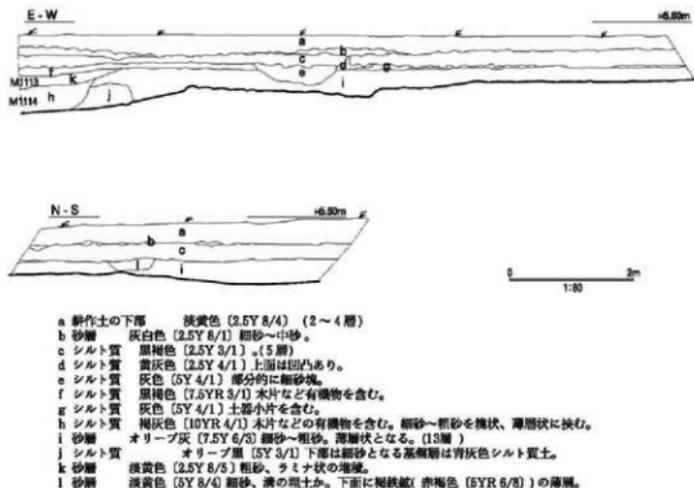


図30 2区北壁土層 (1:80)

2. 各層検出の遺構

(1) 5層の遺構

5b層の調査と5層中の遺構(図31・32) 前項で述べたように、5層下面に生成した洗い出し層を5b層として調査を行った。谷の岸部から台地にかかる範囲に遺物のまもった出土状態がみられるが、特に調査南区で遺物の密度が濃く、図31・32に示すように洗い出された段丘礫と遺物が密集して出土し、河原状を呈す。また、その周辺部の礫層上では、下面の遺物は、その上面の窪みに落ち込んだような状態で、また、粘土質の層に載る地点では、それにめり込んだような状態で出土する。5b層の調査段階で、5b層を掘り込み、5層中あるいは、より上位から掘り込まれたと見える遺構を調査中央区で検出した。遺構は、G26-05区に集中して3基分布し、他の区画では検出できなかった。

土壌1020(図33・34)

G26-0542区で検出した。5b層を掘り込み、直下の溝427の上部層を掘り抜いている。

平面楕円形状で、長径1.3m、短径1.1mを測る。断面は逆台形状で、底面は小さい。深さは0.8mを測る。覆土は黒褐色粘質土(2.5YR8/2)ある。下部では強い粘土質となる。黒褐色の地山土塊を挟んでいる。

出土遺物(図35、表1) 遺物は覆土中からコンテナ1/5程の分量が散漫に出土した。図示する木製品の他は土器の細片資料である。糸切底土師器杯の資料がある。

図35に木製品を示す。一端を面取りし、他端の両縁を削り出している。割材を利用している。

土壌1021(図34・36)

G26-0531区で検出した。5b層を掘り込んでいる。

平面不整な円形状で、径0.6m、断面は台形状で、深さは0.8mを測る。覆土は褐灰色粘土(7.5YR 4/1)で、全体に一樣である。中に流れ込んだ状態で灰状のものが混じる黒褐色土塊を挟む。

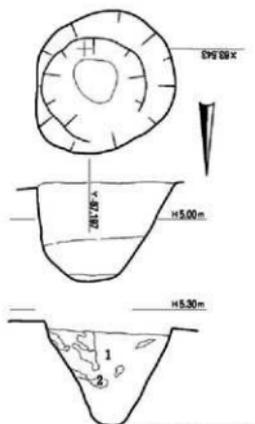
出土遺物 遺物は、ごく少量が覆土中から散漫に出土した。い



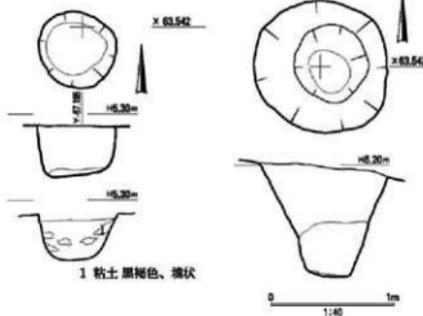
図31 5b層遺物出土状況(G26-01区、東から)



図32 5b層遺物出土状況(G26-01-G36-11区、南から)



1 粘土 黒褐色(2.5 YR 3/2)
下部は油粘土質
2 粘土 黒褐色



1 粘土 黒褐色、漏斗状

図34 土壌1020・1021・1022 (1:40)



図35 土壌1020 (北から)

れも細片の土器資料で、土器器高台碗を含む。
土壌1022 (図34・37)
G26-0531区で検出した。5b層を掘り込んで
いる。

平面不整な円形状で、径1.1m、断面は漏
斗状で、底面は小さい。深0.9mを測る。覆
土は黒褐色粘土 (2.5YR3/2) で、全体に一
様である。中位に流れ込んだ状態で灰状の
ものが混じる黒褐色土塊を挟む。

出土遺物 少量の遺物が覆土中から散漫に
出土した。いずれも土器細片で、須恵器坏、
甕の資料を含む。

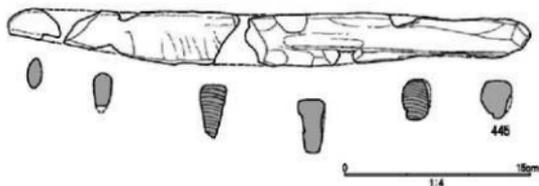


図35 土壌1020出土遺物 (1:4)

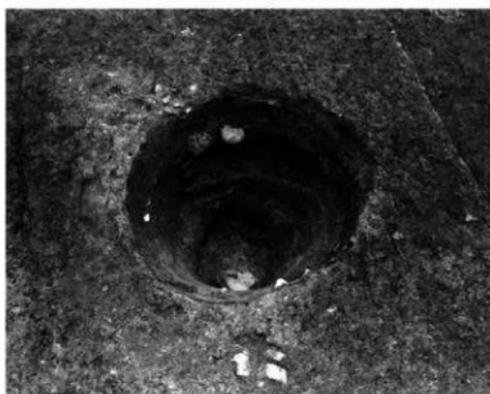
遺物 番号	遺物番号	出土位置	遺物種類 (年代)	材質 (粘土・土器・陶器)	計測単位	口径/長さ	幅/高さ	器底/厚さ	器口/厚さ	計測単位	保存状態(劣)
445	1020	G26- 掘合)+B51.6	木器 刀形	復原	42.0	4.4	2.1				遺存状態不良。
											先端付近は両側縁に刃を有する。柄は刃部側面上、下縁側に溝を有し、柄端には若干のふくらみをもたせている。

表1 土壌1020出土遺物観察表

図36 土壌1021 (北から)



図37 土壌1022 (北から)



(2) 5b層下の遺構

5層、5b層下面の位置でここで報告する遺構は、台地裾部の礫層上検出のものと、谷堆積層上で検出したものがある。いずれも5b層分布範囲での検出である。礫層上では、遺構1011、土壌1046のほかに、5層下部から重複した、雨裂状の流路1024・1026・1034を検出した。凹地1041も同面で検出した。溝427、遺構1017・1124も5b層直下の検出であるが、明らかに古い時期の遺構であり、別項で触れる。谷部では、調査北区で谷西岸に沿う流路1012・1013を、調査南区で流路状の凹地1028～1030を検出した。以上のうちの多くは、自然の営為によるものと見えるが、遺物を出土していることからこれも含め以下、遺構番号順に記述する。

土壌1011 (図38)

G26-0915区を中心に位置する。地山礫層の粘土質層を掘り込み、西から東へ下る谷頭状の凹地である。幅2mほどで、長さ3mで、溝427と交差している。谷へは連続しない。前後関係について、掘り下げ中、土層観察をするなどして確認に努めたが、判断としない。

覆土は、上部は灰褐色粘土層 (7.5YR 4/2)、下部は褐色粘土 (7.5YR 4/4) である。下部層は地山粘土層の流入によるものか。中位では下部層が塊状に混じる。

出土遺物 (図39、表2) 遺物は覆土中から散漫にコンテナ3箱ほどの分量出土した。

取り上げた遺物の中には、緑軸陶器、土師器、須恵器が少量混じるが、いずれも上部の出土であり、5b層の影響を考えられる。下部では、弥生時代中期から後期にかけての土器が出土した。

下部出土遺物を図39に図示する。

甕底部資料では、内面にお焦げ状の付着物が観察される。

下部の遺物から考えると、後述する遺構1017、1096と同類と考えられるが、地形に沿うものではなく、台地部裾の傾斜方向に長軸をとるものである。



図38 遺構1011 (北から)

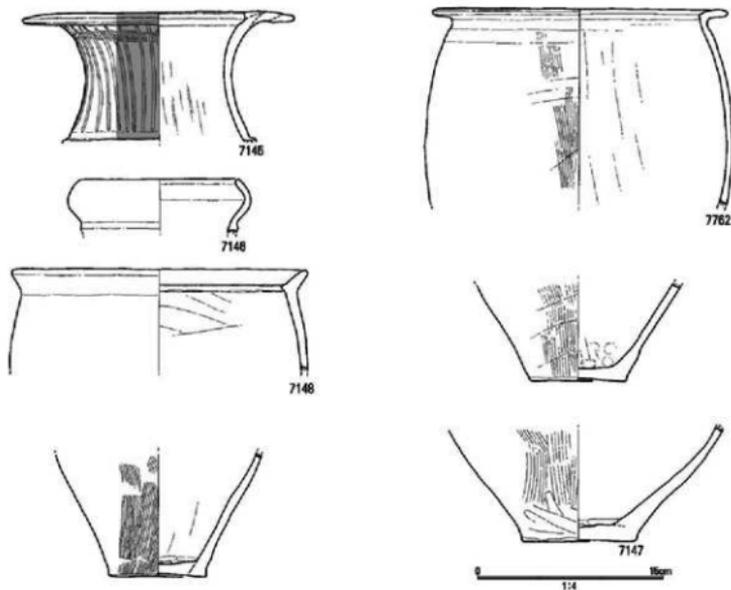


図39 遺構1011出土遺物 (1:4)

遺物番号	出土位置	遺物種別(年代)	計測程度	口径/高さ	底径/幅	底高/高さ	計測機番号	遺存(後-状況)
遺物番号	遺物種別	材質(出土-備注)					形状-測定	
7145	1011 G26-0925 上部 層	弥生土器 甕 (弥生/中期)	復原	220				口縁部小破片、内面やや磨 外：磨面→調整(口縁部下は刷毛目状)→口縁部上面を含む外 面を赤彩(口縁部上面を含む外面を赤彩→頭部に暗文 内面：磨で調整
7146	1011 G26-0915	弥生土器 甕 (弥生/中期)	復原	126				口縁部細片、摩滅 調整不明 口縁部下に強い磨で調整による突起状の残存。
7147	1011 G26-0925 上部 層	弥生土器 甕 (弥生/中期)	実測	92				底部、摩滅。 外：刷毛目調整→磨で調整。底面磨で調整。 内面：磨で調整
7148	1011 G26-0925 上部 層	弥生土器 甕 (弥生/中期)	復原	206	79			大破片、やや磨滅。 外：刷毛目調整→上部磨で調整。底面磨で調整。 内面：磨で調整。
7782	1011 G26-0925 上部 層	弥生土器 甕 (弥生/中期)	復原	238	78			大破片 外：縦刷毛目調整→横方向主体磨で調整 内面：磨で調整。底部に指押さえ痕

表2 土壌1011出土土物観察表

流路1012 (図40)

調査中央区から調査北区にかけ、溝427に沿うように谷側に位置する。検出できたのは、G26-96区からG26-99区にかけて断続し、蛇行した状態である。距離にして30mほどを測る。当初は、下位の11層上に粗砂層の堆積として検出した。断面を見ると、凸レンズ状をなし、中央部上面が盛り上がった状態で遺存しており、砂堆かと考えたが、G26-68区からG26-99区にかけて、溝427掘削排土層である10層を掘り込んだ流路と確認できた。この位置で、深さ0.2m弱遺存し、断面は緩い逆合形状を呈す。底面は不整で、生痕かとおもわれる凹凸が顕著である。

上部は細礫を含む粗砂層、下部は褐色砂層、底面には黒褐色粘質土が観察される。上部砂礫層から土器片が比較的目立って出土した。また、木炭粒も検出された。

出土遺物 (図41、表3)

遺物は主に上部砂礫層から、比較的高い密度で出土した。後述する流路1013とあわせてコンテナ2箱分が出土した。弥生土器のほか、古墳時代前期前葉の土器器資料が顕著である。全体に細片で、器表の磨滅が顕著である。出土遺物を図41に示す。

流路1013 (図40)

流路1012に平行し、谷側に位置する。粗砂の砂堆状の盛り上がりとして検出し、上述の流路1012と同時期か、一連のものとして形成されたものとみえる。緩く蛇行して流れることも流路1012と同様である。流路1012より南へ伸びており、検出した距離は40m程である。

底面は、生痕様の凹凸があり、著しく不整である。



図40 流路1012・1013 (北から)

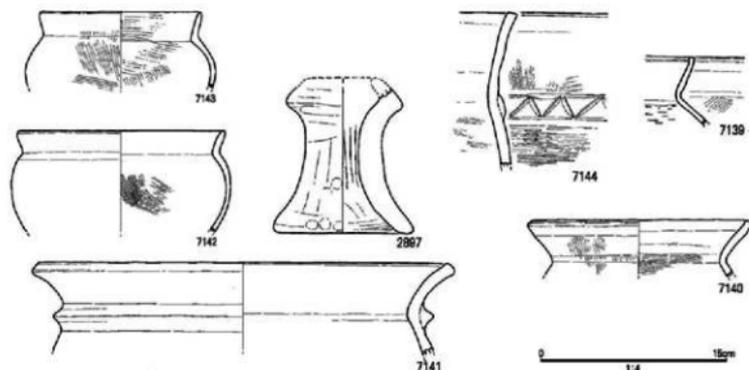


図41 流路1012出土遺物(1:4)

遺物番号	出土位置	遺物種類(中心)	計測構成	口径/高さ	底径/幅/厚	計測番号	遺存(遺-以那)
遺物番号	遺物位置	種類(土-成色-特徴)				形状-特徴	
2897	101 2 G26-9923	赤生土器 器台	実測		110		口縁部を欠く。内面荒れ
	横合口縁か	胎土:粗砂、砂礫を多く含む。 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5 赤香)。				外面:横で調整。胴部部に指押さえ痕 内面:胴部は横刷毛目調整→横で調整。底部に絞り痕	
7139	101 2 G26-9921	土師器 甕(古墳/前期)					細片、やや磨滅
	赤甕式系。図示外に胴部片少量あり。	胎土:砂粒少量含む 器表:ごくうすい赤みの黄(10Y R8.5/5 薄赤色)				外面:胴部刷毛目調整、口縁部付近横で調整 内面:口縁部付近横で調整、胴部造形調整	
7140	101 2 G26-9913?	赤生土器 甕	復原	174			口縁部細片
	内外面磨滅化	胎土:砂粒少量含むが粗砂は少 器表:やわらかい赤みの黄(9Y R7.5/4 磁褐色)				外面:横刷毛目調整→横で調整 内面:横刷毛目調整→口縁部を中心に横で調整	
7141	101 2 G26-9923	赤生土器 甕	復原	33			口縁部細片、磨滅
	外面磨滅化	胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5 赤香)				内外面:横で調整 胴部に三角状赤香	
7142	101 2 G26-9921	赤生土器 鉢	復原	169			口縁部細片、磨滅顯著
		胎土:粗砂多く含む 器表:くすんだ黄赤(2Y R6/8?)				外面:口縁部付近横で調整。以下不明 内面:胴部刷毛目。口縁部付近は横で調整か	
7143	101 2 G26-9922	赤生土器 壺	復原	128			口縁部細片、磨滅
		胎土:砂粒多く含む 器表:うすい黄赤(5Y R8/5 肌色)				外面:刷毛目調整→横で調整 内面:刷毛目	
7144	101 2 G26-9921	赤生土器 大甕					細片
		胎土:砂粒多く含む 器表:うすい黄赤(5Y R8/5 肌色)				外面:叩き→口縁部に刷毛目調整→横で調整。胴部に龜腹状文を有する扁平な尖帯 内面:刷毛目調整、横で調整	

表3 流路1012出土遺物観察表

流路1024 (図42)

調査南区、G26-03区に位置する。5b層下面とする。台地から流れ下る流路である。先端が樹枝状に分岐し、末端部は谷に向かい、谷埋積層中に拡散してゆく。先端部は地山を削り込み、細かく蛇行して、非常に不整である。やや下流部から粗砂層で埋まり、谷側のG26-0343+44区より東では幅広い砂堆となり、下面への削り込みがごく弱くなる。この部分では、下面に細かな凹凸を残す砂層の堆積となる。砂層の中央部は凸レンズ状に盛り上がる。

土層断面での観察によると、流路1024の砂層は5層下面に形成されており、後述する流路1026以下とは、形成時期の差があるものか。

出土遺物 覆土中から散漫に、総量でコンテナ4箱ほどが出土した。大半は土器細片である。土器類は磨耗している。黒色土器、越州窯青磁、須恵器甕など平安時代の土器、陶磁器が顕著である。

流路1026 (図42)

流路1024の南に接した同様の流路である。図上では枝分かれするように見えるが、時間差のある2条の流路であった。末端部で、流路1024と重複する。調査中の所見から、流路1024の砂層が、流路1026の砂層を削り込んで堆積していることがわかる。

流路1034 (図42)

G36-12区から北東方向、流路1024・1026と交差する方向へ流れる。幅で1.5m程を測る。やはり粗砂層でうまり、末端部ではその砂堆となる。砂層は大きく広がり、薄い。

出土遺物 砂層中から、コンテナ1.5箱ほどの遺物が出土した。大半は細片の土器資料である。

凹地1041 (図42)

G26-02・03区に広がる。不整な凹地である。傾斜面に位置するため、西側の一部を検出したのみである。上記の流路とは異なり、段落ちが弧状に広がっている。人為的なものか否かは不明である。暗灰黄色(2・5Y4/2)粘土で埋まる。

出土遺物 覆土中から、土器片がコンテナ1箱ほどの分量出土した。越州窯青磁、緑軸陶器、瓦など平安時代の遺物が主体であるが、弥生土器も多く混じる。

凹地1028 (付図)

凹地1028、流路1029は、調査南区で検出した。凹地1028は、G25-10区に位置する。幅1.0m、長さ2.5mで、ごく浅い。覆土は黒褐色砂で、粘土混じり。

出土遺物 (図43、表4) 覆土中から少量の遺物が散漫に出土した。古墳時代前期までの土器が含まれる。図43に高坏の資料を示す。

流路1029 (付図)

調査区南区、G25-10区からG26-01区にかけて、台地裾に沿い、溝427と平行するよう走行の流路である。上述凹地1028も同様の走向であり、同一の流路の部分であったのかもしれない。流路1029は、幅0.5mでやや蛇行する。埋土は黒褐色砂で、粘土混じり。

出土遺物 (図43、表4) 覆土中から少量の遺物が散漫に出土した。古墳時代前期までの土器が含まれる。図43に土師器壺の資料を示す。

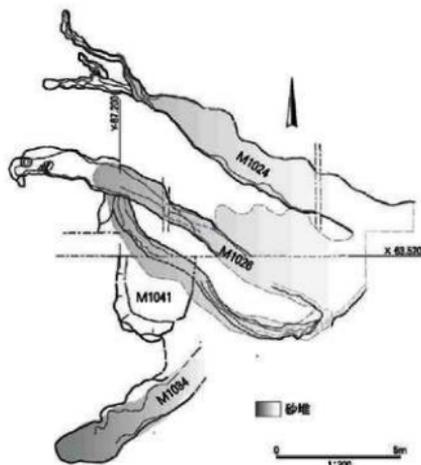


図42 流路1024・1026・1034・凹地1041 (1:200)

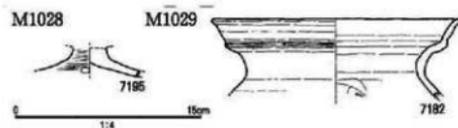


図43 凹地1028・流路1029出土遺物 (1:4)

遺物番号	遺物名	出土位置	遺物種類(年代)	材質(胎土・地質・釉)	口径/高さ	底径/高さ	器高/深さ	計測者番号	遺年(量・状態)
7181	1028	弥生土器 甕 (弥生/中期)	復原	72					底部の大破片
		外面保護化、内面お魚け伏付着物	胎土: 粗砂多(含む) 器表: やわらかい赤みの黄9 YR7.5 /4 磁粉色						外面: 駒毛目調整、底面釉で調整 内面: 釉で調整(深い箇所調整)
7195	1028	土師器 低頸高杯 (古墳/初)	復原						
		いわゆるB種簡型土器の特徴を有するが在産地か	胎土: 砂粒少量 器表: やわらかい黄赤 [10 R7.5/4]						外面: 鏡面磨き調整 内面: 釉で調整
7182	1029 G25-42	土師器 甕 (古墳/初)	復原	198					口縁部破片
		山崎系	胎土: 砂粒少量(黒母含む) 器表: やわらかい黄赤10 R7.5 /5 赤香						外面: 鏡面で調整(口縁部は一部黒母焼文状) 内面: 口縁部調整で調整、胴部磨き調整

表4 凹地1028・流路1029出土遺物観察表

土壌1046 (図44・45)

G36-11区の5b層直下で検出した。台地裾部の平坦地に位置する。平面が不整な円形状、断面は台形状を呈し、底面は不整である。確認面での径0.7m、深さは0.6mを測る。

覆土は上位の5層・5b層と識別が難しい。黒褐色粘質土、塊状の地山土が混じる。規模から柱穴の可能性も考えたが、柱痕跡等は確認できなかった。下半部には掌大から拳大の礫がまとまって投入されている。同位置から、大破片の土器片も出土した。

出土遺物(図46、表5) 下半部謙投入部から、大破片の土器が出土したほかに、覆土中から遺物が散漫に出土した。遺存状態の良好な資料は、図示するようにいずれも平安時代のものである。緑釉陶器、黒色土器、土師器がある。これらの他に、時代は異なるが、栗浪系土器が細片で出土した。

5022は緑釉陶器碗である。軸は高台内底面以外、壘付まで軸が及ぶ。薄く、不透明である。内面には施軸時の刷毛目がむらとなって残る。口

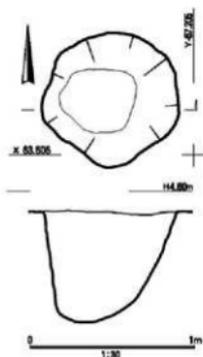


図44 土壌1046 (1:30)



図45 土壌1046 (北から)

縁部外面の、おそらく4箇所に工具を押し上げるように当て、輪花碗としている。胎土は須恵質で、やや粒状性があり、均質堅緻である。5017は、緑釉陶器である。皿として図示するが、軸は前面に掛かり、器厚も全体に均一なことを考えると、反転して蓋ともできる。軸は、斑状のむらがあり、暗い灰みの黄緑色を呈し、半透明、貫入を生じる。図上内底面、外底面对応する位置に重ね焼の目痕が残る。各4箇所を復原でき、極小粒の胎土を用いている。焼成は土師質で、胎土は緻密であるが細粒砂を含み細孔を生じる。

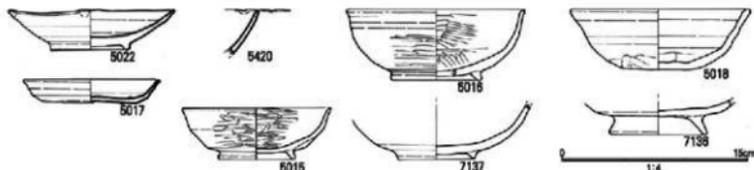


図46 土埴1046出土遺物 (1:4)

遺物番号	出土位置	遺物種類(年代)	材質(粘土・焼成温度)	計測口径	口径/高さ	底径/高さ	器底/高さ	計測器番号	遺存(量・状態)
5015	1046	黒色土器 高合杯(平安)	復原	116	60	42			小破片
		胎土: 砂粒少量。 器表: 黒(N2褐色)							
				外面: 回転線で調整→体部中心に横筋磨き調整。底部の最終調整は回転線で調整 内面: 風磨き調整					
5016	1046	黒色土器 高合杯(平安)	復原	140	70	58			小破片
		胎土: 砂粒少量。 器表: 黒(N2褐色)							
				外面: 回転線で調整→胴下部を中心に横筋磨き。底面最終調整は回転線で調整 内面: 黒で調整→風磨き調整					
5017	1046	緑釉陶器 皿(平安)	実測	107	70	29			大破片
		見込みと底部外面に目録が2ヶ所残る。復原すると本来4ヶ所ずつあったものと思われる。							
		胎土: 砂粒ほとんど含まない。白色軟質。 器表: 釉は暗い灰みの黄緑(2.5GYR5/2)、半透明。 施釉部: 灰みの黄緑(5GY5/3)/釉: 底部付近まで及ぶ。							内外面: 回転線で調整。底部は禁止糸切り→手持ち施釉調整
5022	1046	緑釉陶器 皿(輪花高合皿)	復原	133	62	32			大破片
		胎土: 砂粒ほとんど含まない。灰色。 器表: うすい黄赤(5YR8/5肌色)							
				外面: 回転線で調整 内面: 調整不明					内外面: 回転線で調整。高台: 輪状、削り出し。
7136	1046	土師系 高合杯(平安)	復原			77			底部小破片、厚紙。
		胎土: 砂粒少量。 器表: うすい黄赤(5YR8/5肌色)							
				外面: 回転線で調整 内面: 調整不明					底部、外面やや磨滅。
7137	1046	黒色土器 高合杯(平安)	実測		60				底部、外面やや磨滅。
		胎土: 砂粒少量含むが粗砂少。 器表: 外面はうすい黄赤(5YR8/5肌)							外面: 回転線で調整。底部最終調整は黒で調整または黒削り調整。 内面: 風磨き調整、焼し。

表5 土埴1046遺物観察表

(3) 11層中の遺構

11層中とした遺構は、調査北区で検出した一連の土器の出土状態である。

遺構1078・1079・1080・1081(付図)

G26-89区西辺部からG26-90区にかけて、11層(6層)上面で検出した。11層が堆積する谷の西岸に

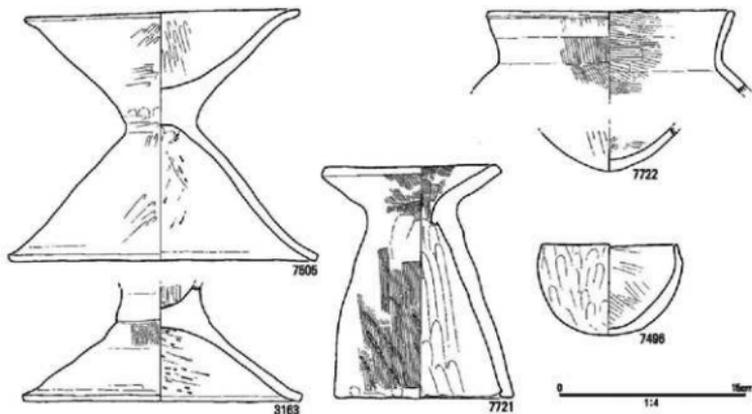


図47 遺構1078出土遺物 (1:4)

遺物 番号	遺構番号	出土位置 遺物内記	遺物種類(年代)	材質	口径/高さ	底径/幅	体高/深さ	計測番号	遺年(遺・枚数)
			付属(胎土・産成・産地)				成形・調整		
7496	107 8 G26-9912		弥生土器 鉢 (弥生/終末期)	実測	104		74		略完形
			胎土: 粗砂を多く含む 器表: やわらかい黄赤 (2.5YR7.5/6洗柿)				外面: 磨擦で調整 内面: 板状工具類で調整(研毛目状)		
7505	107 8 G26-8951		弥生土器 高坏 (弥生/終末期)	復原	222	246	206		略完形、厚減磨面
		系統不明だが外系系か	胎土: 粗砂を多く含む。 器表: くすんだ黄赤 (7.5 R 6/8.5 異朱)。				外面: 磨擦調整。坏と胴の接合部に指押さえ痕 内面: 坏部磨擦調整。胴部は刮削調整、底部付近は磨擦で調整、上部に指押さえ痕。		
7720	107 8 G26-8951		弥生土器 高坏 (弥生/終末期)	実測			226		胴合部、やや磨減。
			胎土: 粗砂を多く含む 器表: くすんだ黄赤 (2YR6/8)				外面: 研毛目調整→磨で調整 内面: 坏部磨擦調整(研毛目状)、胴部接合部調整、底部付近磨擦で調整。		
7721	107 8 G26-9911	外面備付者	弥生土器 器台 (弥生/終末期)	実測	187	146	189		略完形
			胎土: 粗砂多く含む 器表: 明るい灰みの黄赤 (4YR7/4摩)				外面: 叩き→研毛目調整→口縁部、屈曲部、脚部、脚端部付近を磨で調整。 内面: 受け部研毛目調整、脚部磨擦で調整。		
7722	107 8 G26-8951		弥生土器 盃 (弥生/終末期)	復原	194				口縁部小破片。
			胎土: 粗砂を多く含む。要母含む 黄赤みの灰色 (5YR6/1茶鼠)				外面: 研毛目調整→口縁部付近磨擦で調整、底部磨擦で調整 内面: 磨擦研毛目調整→口縁部付近磨擦で調整		

表6 遺構1078出土遺物観察表

沿うような位置で完形の土器、あるいは破片がまとめて投棄されたような状態で出土した。掘形などは検出できず、11層上部から下位の7層にかけて埋没したような出土状態を示す。それぞれの継まりについて遺構番号を付し、遺物をとり上げた。

遺構1078 G26-8951区に位置する。略完形の高坏(7505)、器台(7721)を含むコンテナ4箱ほどの遺物が出土した。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての資料が含まれる。図47に出土土器を図示する。7505は、器表の遺存状態は不良である。坏部は深く、磨擦状の調整痕が観察される。

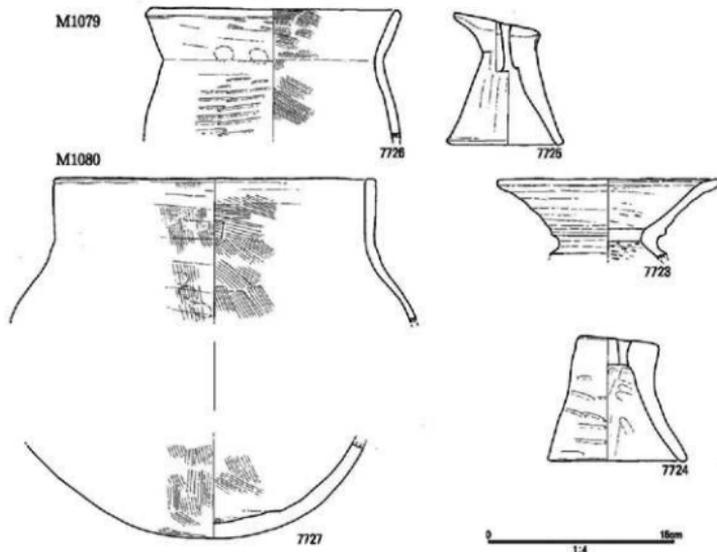


図48 遺構1079・1080出土遺物(1:4)

遺物 番号	発掘番号	出土位置	遺物種類 (JPC)	計測位置	口径/径さ	底径/底径	胎厚/胎さ	計測位置	
	遺物形状		材質 (胎土・焼成温度)						形状・調整
7725	1079	G26-9912	弥生土器 支脚 (弥生/晩末期)	実測	70	85	107		略完形、やや磨滅。
	杏形支脚		胎土：粗砂多く含む 器表：うすい黄赤 (SYR8/6肌色)					外面：磨で調整か 内面：磨で調整か	
7726	1079	G26-9912	弥生土器 甕 (弥生/晩末期)	復原	196				口縁部破片、やや磨滅。
	外面と口縁内面上部に煤付着。		胎土：粗砂を多く含む。 器表：くすんだ黄赤 (SYR6/6JZ7本)					外面：叩き→口縁部を中心に磨で調整。 内面：横斜毛目	
7723	1080	G26-	土師器 器台 (古墳/初)	復原	194				口縁部破片
	山陰系鼓形器台		胎土：粗砂を多く含む 器表：うすい黄赤 (SYR8/6肌色)					外面：横磨で調整 内面：横斜削り調整→口縁部付近と器底部付近を横磨で調整	
7724	1080	G26-	弥生土器 支脚 (弥生/晩末期)	実測	66	11	102		略完形、摩滅顯著
	二次的な焼鳥により赤変。		胎土：粗砂多く含む。 器表：うすい黄赤 (SYR8/6肌色)					外面：叩き→磨で調整 内面：磨で調整	
7727	1080	G26-	弥生土器 甕 (弥生/晩末期)	復原	260				底部、ほぼ完形。
			胎土：粗砂を多く含む 器表：くすんだ黄赤 (SYR6/8?)					外面：刷毛目調整→磨で調整。底部に指押え痕。 内面：刷毛目調整→磨で調整	

表7 遺構1079・1080出土遺物観察表

遺構1079 遺構1078に接したG26-9911区に位置する。コンテナ1/2程の分量の遺物を取り上げた。略完形の杏形支脚(7725)を含む。図48に、出土遺物を図示する。

遺構1080 G26-9914区に位置する。略完形の甕(7727)、支脚(7724)を含むコンテナ1箱強の遺物が出土した。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての資料が含まれる。図48に出土土器を図示する。7723は、山陰系鼓形器台の上部破片である。胎土には粗砂を顕著に含む。

遺構1081 11層が堆積する谷の西岸に沿うG26-9925区に位置する。遺物は図49に示すように集積したような状態で出土した。土器破片と略完形の鉢(7735)、器台(7737)を含むコンテナ2箱程の分量出土した。

遺物は弥生時代終末期の資料がほとんどであるが、古墳時代初頭の資料が含まれる。図50に出土土器を図示する。3174は、棒状の支脚上部資料である。甕7732は、上部の小破片資料である。外面に煤状の付着物、内面にお焦げ状の付着物が残る。7733は布留式土器甕の口縁部細片資料である。胎土に赤褐色粒を含む。



図49 遺構1078 (北から)

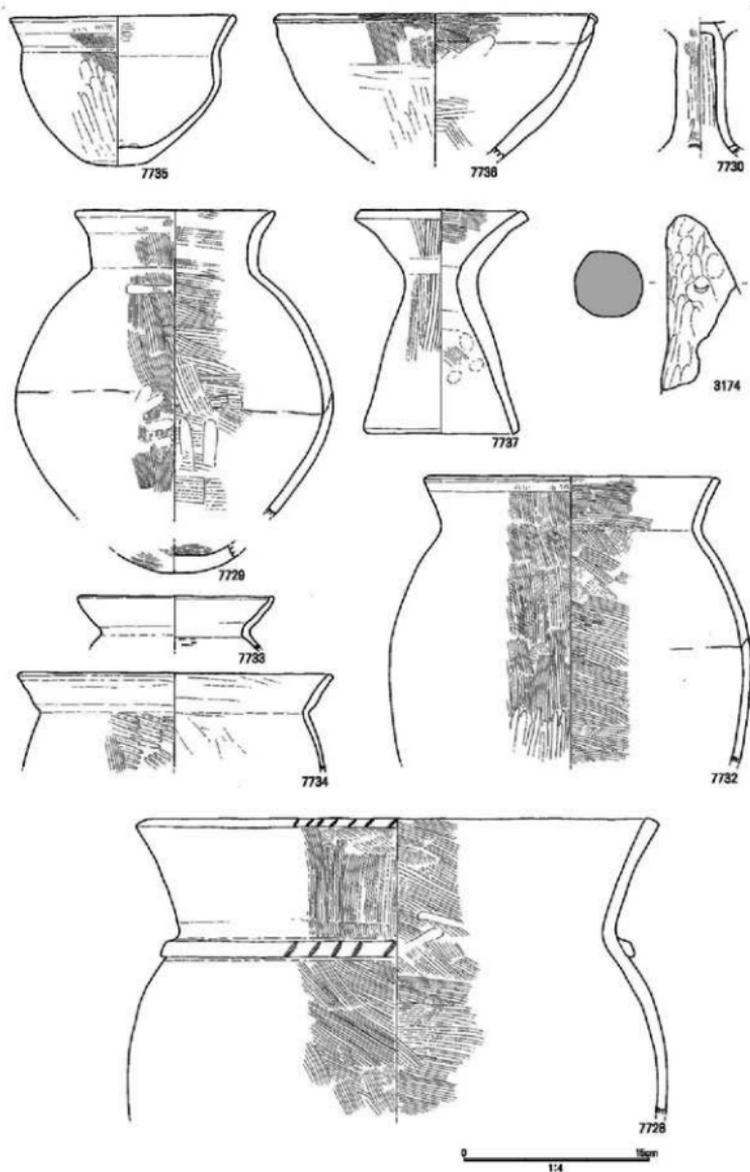


图50 道横1081出土遗物 (1:4)

遺物番号	出土位置	遺物種類 (P/B)	計測位置	口徑/径2	底径/底幅	高さ/深さ	計測箇所	遺存 (量・状態)
遺物番号	遺物種類	材質 (土質・焼成・塗料)		形状・特徴		成形・調整		
3174	1061 G26-9925	土製品 土製棒状土刷	実測					下部を欠く、やや磨滅。 指押さえ風、蓋で調整。三日月形の工具痕がある。
		粘土: 粗砂多く含む。 器表: くすんだ黄赤 (2YR6/8)						
7728	1061 G26-9925	弥生土器 甕 (終末期)	復原	405				
	内外面輝やお焦げ状付着物による酸化。 R 3176 + 3196 接合	粘土: 粗砂を多く含む 器表: やわらかい黄赤 (6.5YR7/6加黄褐色)						外面: 刷毛目調整→胴部付近で調整 内面: 刷毛目調整→胴部付近で調整 胴部に扁平な尖突、口縁部と尖上で列点文(刷毛目と同じ工具)
7729	1061 G26-9925	弥生土器 甕 (終末期)	復原	160				
	胴部中位で分割成形。	粘土: 粗砂を多く含む。雷母と角内石を含む。 器表: うすい黄赤 (5YR8/6肌色)						外面: 刷毛目調整→口縁部付近で調整、胴部部分的に蓋で調整、胴部接合部付近で調整。 内面: 粗い刷毛目調整→胴部部分的に蓋で調整 胴部中位で分割成形。割離面に刷毛目調整が施されている。
7730	1061 G26-	弥生土器 高杯 (終末期)						脚柱部、厚感顯著
		粘土: 砂粒定量含むが、粗砂は少。 器表: 赤褐色。						外面: 刷毛目調整→胴部調整。円形通し孔。 内面: 紋り痕
7732	1061 G26-9925	弥生土器 甕 (終末期)	復原	230				胴部小破片
	外面に縦付筋、内面にお焦げ状の付着物。	粘土: 粗砂を多く含む 器表: 磁粉色						外面: 斜め粗刷毛目調整→縦細刷毛目調整→口縁部付近で調整、胴下部付近で調整 (黒磨き調整状)。 内面: 横刷毛目調整 胴部中位内面に明瞭な粘土粒跡目が見られる。R7729のような分割成形か。
7733	1061 G26-	土師器 甕 (古墳/初)	復原	156				口縁部破片、やや磨滅。
	布留式系	粘土: 粗砂多いが、粗砂は少。シャモットを含む。 器表: 赤褐色。						外面: 口縁部付近で調整 内面: 口縁部付近で調整、胴部磨削調整。
7734	1061 G26-	弥生土器 甕 (終末期)	復原	250				口縁部破片
	外面縦付筋。	粘土: 粗砂多く含む 器表: うすい黄赤 (5YR8/6肌色)						外面: 叩き→刷毛目調整、口部付近で調整。 内面: 蓋で調整
7735	1061 G26-9935	弥生土器 鉢 (終末期)	実測	184	48	123		略完形。内面磨滅。
		粘土: 粗砂を多く含む。 器表: 赤褐色						外面: 刷毛目調整→口縁部を横磨き調整、胴部を強く蓋で調整 (薄黒磨き調整状)。 内面: 刷毛目のみ蓋で調整か。底部に指押さえ痕。
7736	1061 G26-992 5	弥生土器 鉢 (終末期)	復原	250				口縁部小破片
		粘土: 粗砂多く含む。 器表: 赤褐色						外面: 刷毛目調整→胴部付近で調整 内面: 刷毛目調整→蓋で調整
7737	1061 G26-9935	弥生土器 甕台 (終末期)	復原	130	118	182		略完形、厚感顯著
		粘土: 粗砂多く含む 器表: うすい黄赤 (5YR8/6肌色)						外面: 刷毛目調整→蓋で調整 内面: 刷毛目調整→蓋で調整。胴部に指押さえ痕跡。
3306	1065	弥生土器 甕 (復原~終末期)	実測	105	66	135		略完形
		粘土: 砂粒を多く含む。 器表: くすんだ黄みの赤 (7.5 R 6/8 残跡)、内面はやわらかい黄赤 (2.5YR 7.5/6 残跡)						外面: 蓋で調整→胴部縦磨き調整 内面: 刷毛目調整→横磨き調整主体 底部を焼成後に穿孔。内外面赤彩。

表 8 遺構1061出土土物観察表

(4) 11層下の遺構

11層下では、谷の岸部に沿った位置で検出した土塊1010・1014と、谷部で検出した流路1064、杭列1069がある。以下、遺構番号順に記述する。

土塊1010 (図51~53)

G26-9041区で検出した。谷基盤層である15層に掘り込まれた土塊である。平面では、隅円の平行状を呈し、谷西岸に直交するような方向で、長軸は東からやや北へ振れた位置にある。断面は箱形で、部分的に壁面の下方が抉れる。覆土は暗褐色粘

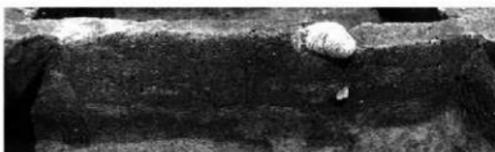


図51 土塊1010土層断面 (西から)

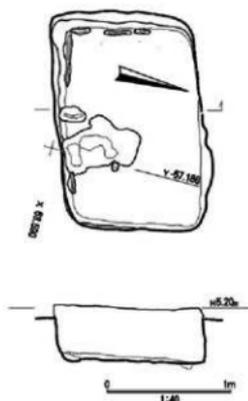


図52 土壌1010 (1:40)



図53 土壌1010 (北から)

土で、粗砂が混り一様である。覆土の中部に地山層である黄褐色粗砂混じり粘土の薄層を挟む。底面には顕著な凹凸がある。そのほか、特に壁に沿った位置に細長い落ち込みが断続して並ぶ。木質等は残らないが、矢板のようなものによる土留め状の構造を想定できる。現状の規模は、長さ1.6m、幅1.2m、深さは0.4m余を測る。

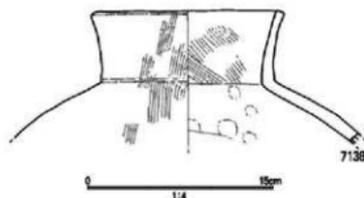


図54 土壌1010出土遺物 (1:4)

出土遺物 (図54、表9) 遺物は覆土中から散漫に少量出土した。ほとんどは細片の土器資料である。器表は磨滅する。

土器は、後期弥生土器の他に終末期土器を含む。図示する7138は、口縁部から肩部までの部分の破片で、器表の遺存状態は不良である。

遺物番号	遺物番号	出土位置	遺物種類 (年代)	計測種類	口径/長さ	器形/形状	器底/高さ	計測単位	遺存 (量・状態)
7138	1010	遺物記	弥生 (弥生-終末期)	復原	145			成少-磨滅	頸部破片、磨滅
			赤生土器 壺 (弥生/後期-終末期)						
			胎土: 砂粒多く含む			外面: 刷毛目調整→環付近接部で調整			
			器表: やわらかい黄赤 [10 R7.5/6赤黄]			内面: 口縁部刷毛、胴部強で調整、指押さえ痕			

表9 土壌1010出土遺物観察表

土壌1014 (図55・56)

調査北区、G26-9921区で検出した。残土層10層を掘り込み、溝427、流路1012と一部で重複し、前者よりは、新しく、後者よりは古い。

土壌1014の検出面では、その南半部から、溝427にかけては黒褐色粘土の広がりとなっており、溝427の上部層との区分ができなかった。またこの層上部で、土器が密集して出土した。その一部には圧潰した完形土器が混じり、溝427の16層の遺物と、出土位置、状態、内容からは、区分できない。また、このような状態は、前述した11層中の遺物出土状況 (遺構798~781) ととも共通しており、一連のものである可能性が高い。

つまり、土壌1014、溝427に生じた、埋没終期の凹地を含め、一帯の谷部に黒褐色粘土層が堆積し、その後半期に形成された一連の遺構であることが考えられる。

実際、この黒褐色粘土を掘り上げた面で、土壌1014の立ち上がりを確認することができた。ただ、溝427との重複部では、覆土はともに水成の堆積層であるが、掘り下げ時の観察から、土壌1014が溝427の埋土を切り込んでいると判断した。

覆土は、上記のように上部0.1m程が黒褐色の粘土層である。以下の覆土も粘土層であるが、上半部には細礫が顕著に含まれて、谷埋積土の4層とよく似た性状を呈す。色調は暗青灰色、下面は波状を呈す。下半部は黒褐色となる。起伏のある土壌底面直上には暗褐色砂が堆積する。それに堅く締まった灰青色砂が載る。その下面は顕著な凹凸を示し、ほとんど塊状を呈す。この砂層の上面、覆土である粘土層の下面に堅果類の種子が密集して出土した。重なり合うような状態ではなく、ある程度の間隔をもち、上下0.1mほどの幅をもった範囲から出土する。

平面形は、不整な長方形形状、断面は緩い逆台形状を呈し、覆土の特徴も併せてみると、掘削時から水を湛えた状態であったことが想像される。

遺構の規模は長さ2.0m、幅1.1m、深さは0.5mほどを測る。

出土遺物 (図57、表10) 上面の黒褐色粘土層からは、投棄されたような状態で土器群が検出されたほかに、覆土中位を中心に、総量でコンテナ2箱程の遺物が出土した。

図示するように大半は、弥生時代後期から終末期にかけての土器資料であるが、木器も遺存していた。

糞7524は、略完形を復原できる内底面にお焦げ状の付着物、外面には煤状の付着物が残る。

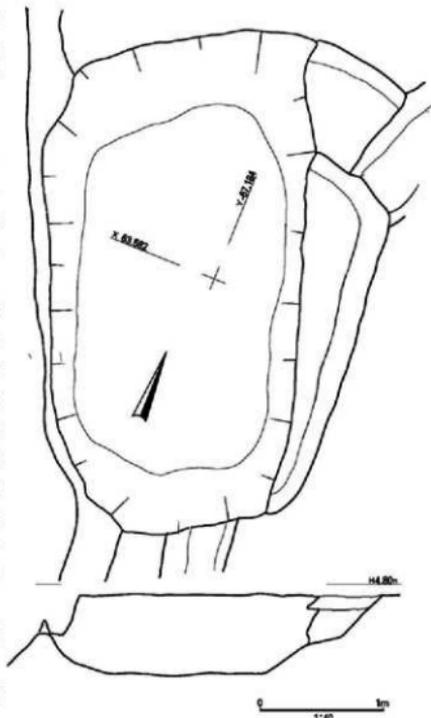


図55 土壌1014 (1:40)



図56 土壌1014 (北から)

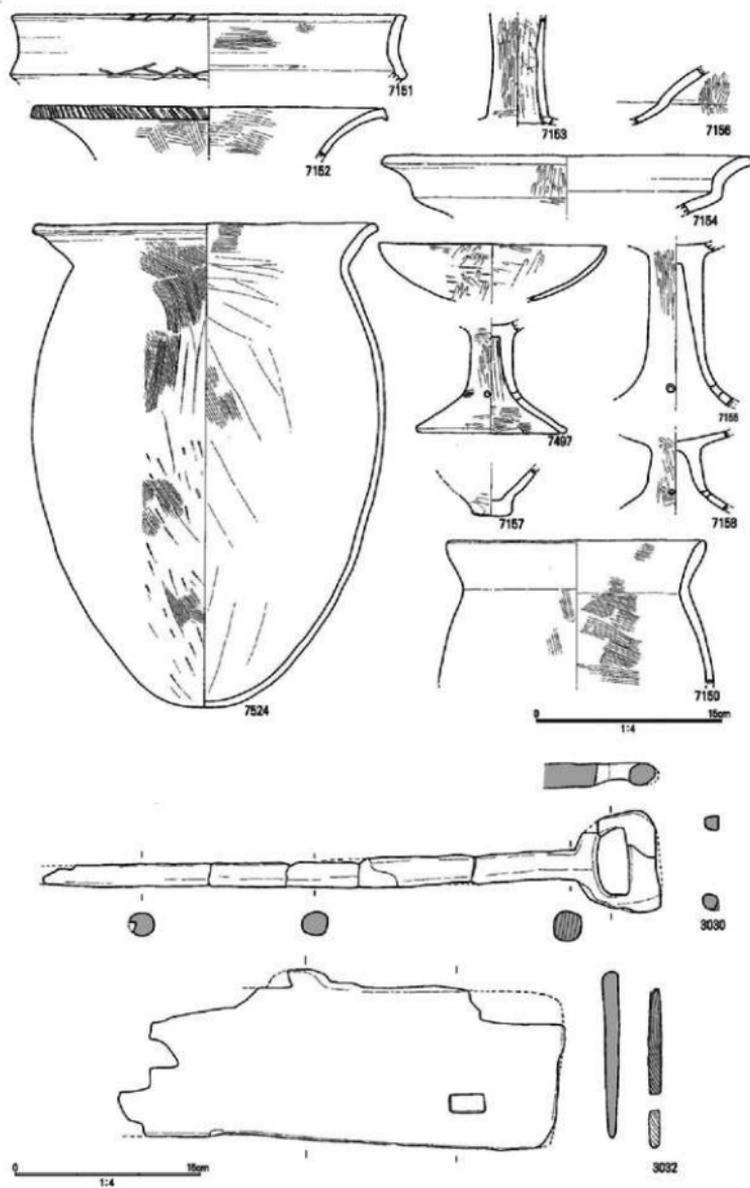


圖57 土墳1014出土遺物 (1:4)

木器は2点を図示する。鋤柄3030は、柄の資料である。把手は環状である。全体に腐蝕が顕著である。50cmほどが遺存する。3032は、長方形の穿孔が残る板状の資料である。厚さは均一でなく、縁部の一部が突出するようにも見えるが、腐蝕が顕著で、詳細は不明である。現状で長さ31cm、幅14cm、厚さは最大部で1cmほどである。

遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物種類(年代)	計測回数	口幅/長さ	底幅/幅	厚さ/高さ	計測回数	遺存(量・状態)
3030	1014	G26-99	木器 簡	実測	500	83	22		柄部、裏面の腐蝕顕著
									環状の把手を有する。
3032	1014	G26-99	木器 有孔板	実測	960	140	12		ほぼ以上欠失
									短辺に寄って、順に長方形穿孔。 長方形片側中央付近が突起状となる。
7150	1014		弥生土器 甕(終末期)	復原	210				口縁部小破片、外底厚縁部
									粘土:粗砂多含む。 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5赤香)
7151	1014		弥生土器 甕(終末期)	復原	306				小片
									粘土:粗砂多含む。 外底:横溝で調整
7152	1014		弥生土器 甕(終末期)	復原	280				口縁部小破片。
									垂下口縁広口蓋。外底系か。 R 294+ 172+ 2795 集合
									粘土:粗砂多含む。 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5赤香)
7153	1014		弥生土器 甕(終末期)	復原					口縁部小破片。
									粘土:粗砂多含む。 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5赤香)
7154	1014		弥生土器 高坏(後期)	復原	292				口縁部破片 内面やや磨滅。
									粘土:粗砂多含む。 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5赤香)
7155	1014		弥生土器 高坏の脚(後期～終末期)	復原					脚柱部欠存、器表厚縁。
									R7154とは別個体か。 粘土:粗砂少量含む。 器表:やわらかい黄赤(10 R7.5/5赤香)
7156	1014		弥生土器 高坏(終末期)						口縁部破片
									粘土:粗砂多含む(僅母含む)。 外底:磨き
7157	1014		弥生土器 ミニチュア土器	実測			27		底部、ほぼ欠存。
									突座部。外底磨滅化、内面お魚 け状付着物。 粘土:粗砂多いが粗砂少。器母含む。 器表:赤みを帯びた黄の暗い灰色(10Y R3/1黄灰色)
7158	1014	G36-9932	弥生土器 高坏(終末期)	復原	183		118		大破片、厚縁
									外底:環溝横溝目調整→横溝削り調整→磨き調整、脚部磨毛目調整→磨 磨き調整、3円形穿孔 内面:環溝磨き調整、脚部下部に横溝目調整→磨き調整、上部に紋り痕
7497	1014	G36-9932	弥生土器 高坏	復原					
									M1014出土 土 粘土:粗砂少量含む。 器表:くすんだ黄赤(7.5 R6/8浅緑)
									外底:磨き 内面:不明 円形穿孔は3か。外底と内面を赤影か
7504	1014		弥生土器 甕(終末期)	実測	274		395		略定形
									外底:脚毛目調整→口縁部付近磨き調整、脚部 中位以下を中心に磨き調整、弱い磨き調整。 内面:口縁部付近脚毛目調整、脚部磨き調整(部分的 に脚毛目状)。

表10 土壌1014出土遺物観察表

流路1064 (図58)

調査北区、G26-88区からG26-89区にかけて続く流路である。11層下面、12層上面で検出した。上位の流路1012、1013と同じように、谷西岸に沿い、やや蛇行して流れる。砂層の帯状の堆積として残る。流路としては、浅く窪む程度の痕跡である。砂層は断面凸レンズ状であることは、上記流路1012・1013との様態と同一である。砂層は、精粗の砂礫層が薄層状に堆積している。流路の幅は一定しないが、最大部で1.0m程である。南半部ではわずかに窪み、上記砂層の堆積でそれとわかる。

出土遺物（図59、表11） 流路1064出土として記録した遺物は、コンテナ21/2箱ほどの分量である。ただし、一部は上位11層資料の可能性もある。

大半は、弥生土器の破片資料であり、後期から終末期までの資料が含まれる。図示する7709は山陰系二重口縁壺口縁部細片資料である。土器の他、土製丸玉（2855）、滑石製紡錘車（2264）の出土があった。また、木製品も遺存する。長さ18cmの板状の製品である。両端縁部に並んで穿孔が行われている。

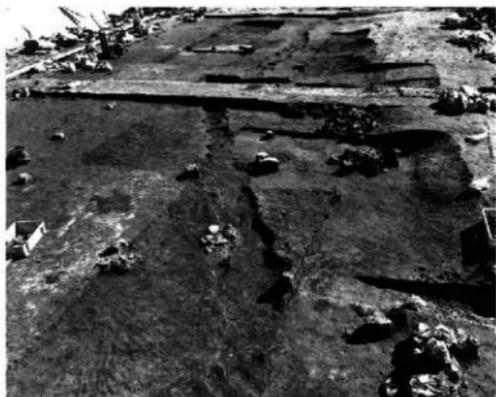


図58 流路1064（北から）

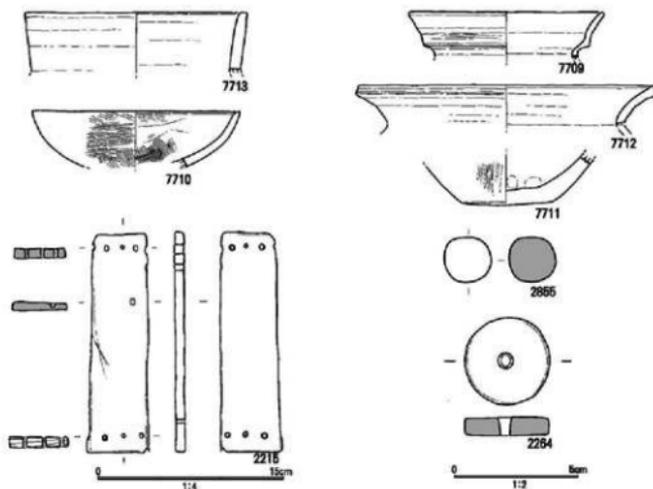


図59 流路1064出土遺物（1：4）

遺物番号	遺物位置	遺物種類(年代)	計測内容	口径/長さ	底径/幅	容積/体積	計測箇所	遺存(遺・状態)
2215	1064 G26-8753	木屑 有孔板	実測	180	50	8		
	用途不明品。種の破片等の再利用品か。	材質(遺土・焼土・焼灰)		両端部に3ヶずつ孔が並ぶほか、未貫通の孔が1つ、側面に位置し半穴の孔が3〜4ある。				
2264	1064 G26-8712	石屑 筋線車	実測		34	8	重量:17	
		滑石製						表面研磨。片削穿孔。
2855	1064 G26-88	土製品 土玉			18			
		胎土:砂粒ほとんど含まない。 色:薄紫色						
7709	1064 G26-85	土師器 甕(古墳/初)	復原	160				口縁部破片
	山形系有段口縁甕	胎土:砂粒多いが、粗砂は少。雲母を含む。 器表:外面黒色化、内面はやわらかい赤みの黄〔10Y R7.5/4.5褐色〕						口縁部内外面を慎重に調整。 口縁部は丸みのある外傾面。
7710	1064 G26-85	弥生土器 鉢(弥生/終末期)	復原	168				口縁部破片
	外面黒色化。	胎土:砂粒定量含むが、粗砂は少。雲母を含む。 器表:やわらかい黄赤〔2.5Y R7.5/6洗練〕						外面:刷毛目 内面:刷毛目調整→上部強で調整 口縁部が内傾する凹面。
7711	1064 G26-85	弥生土器 壺(弥生/終末期)	実測	75				底面、やや磨滅。
		胎土:粗砂多く含む 器表:薄紫色						外面:刷毛目 内面:強で調整、底部付近抑えられ。
7712	1064 G26-85	弥生土器 甕(弥生/終末期)	復原	226				口縁部破片
		胎土:砂粒多いが、粗砂は少。雲母含む。 器表:内外面黒色化。ベースは褐色。						口縁部内外面を慎重に調整。
7713	1064 G26-85	弥生土器 甕(弥生/終末期)	復原	180				口縁部、破片
		胎土:砂粒定量含む 器表:内外面黒色化、ベースは赤紫色。						内外面を慎重に調整。

表11 流路1064出土遺物観察表

杭列1069 (図60・61)

調査中央区のうち、G26-87区で検出した。11層下面、やや盛り上がった砂層の分布範囲に一致する。検出面では杭頭部、流木が分布する。杭状端面の高さは、標高4.7mから4.5mの位置にあり、その分布をみると中央部の杭が高い位置にあり、砂層の状況と一致する。また、その深度も中央部の杭が深く周辺部の杭は浅い。深い部分で杭の長さ0.6m、浅い部分では0.1m前後と差がある。杭の平面分布から一定の方向への配列は終えないが、分布の範囲は、南東方向を示し、後述する、下位の杭列と同一方向を示している。

杭は丸木を用いたもので、材の先端部を一撃で斜めにそぎ落とし、そのままとしたもの、さらにその縁部を面をとるように削いだものといった、片側からの加工により先端部を作り出したものが顕著である。

杭の遺存状態は長短あるが、本来の機能時の状態を考えると、ある程度の深さ打ち込まれた状態を前提とすることができる。それからするとごく短い一連の杭は、より高い位置で機能していたことが想定でき、この杭列1069も、本来2段かそれ以上の杭列が重複したものと復原できよう。

出土遺物(図62、表12) 杭列1069検出面に現れた黒褐色砂層中か



図60 杭列1069(東から)

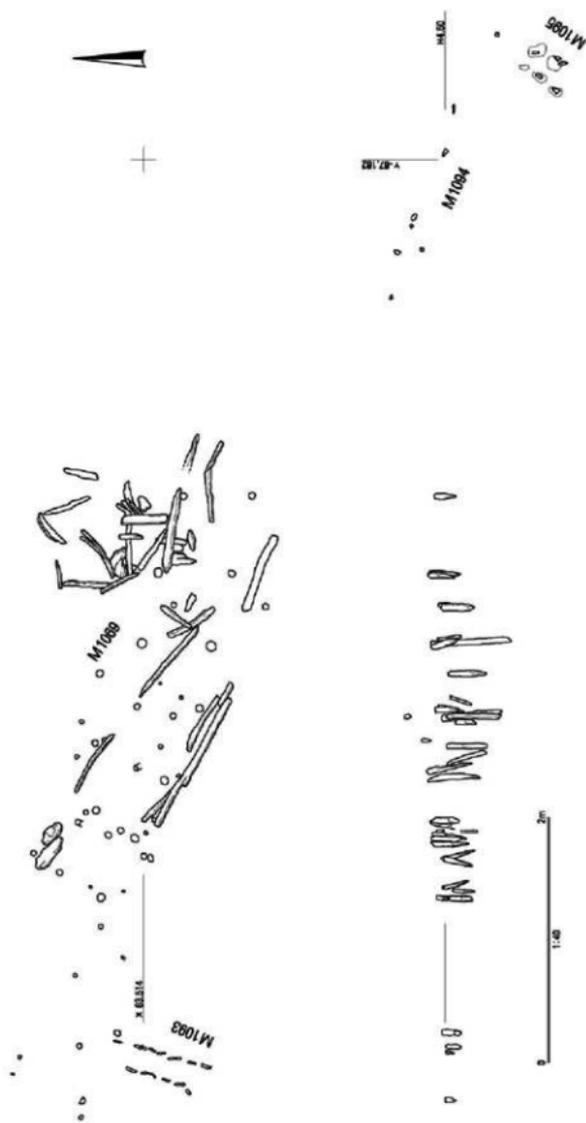


图61 杭州1069 (1:40)

らごく小量の遺物が出土した。

7719は埴形土器の頸部、7718は高坏脚部で、何れも細片資料である。

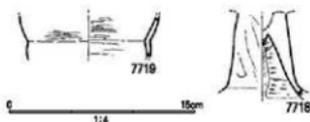


図62 杭列1069出土遺物 (1:4)

遺物 番号	遺物番号	出土位置	遺物種類 (時代)	計測方法	口径/高さ	底径/底径	厚さ/高さ	計測箇所	遺存 (量・状態)
7718	1069	G26-8732	土師器 高坏 (古墳/前期)	実測					頸部、外面摩滅。
			胎土：砂粒少量。 器蓋：うすい黄赤SYR8/A肌色					外面：撫で調整 内面：縦線で調整→横溝削り調整	
7719	1069	G26-8732	土師器 小形丸底壺 (古墳/前期)					頸部径：98	細片
			胎土：砂粒少量 器蓋：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					外面：横磨き 内面：口縁部横磨き、胴部横磨で調整	

表12 杭列1069出土遺物観察表

(5) 12層下の遺構

12層は、11層と同様調査中央区から調査北区に分布する。その下面の谷部では、流路1018、西岸に沿った位置に土壌1065・1066・1067・1077・1085を検出した。以下、遺構番号順に記述する。

流路1018 (図63～65)

調査北区から調査南区までを調査した。調査区外へ続く。南端のG26-93区で東方から調査区に現れた位置で北へ折れ、北端のG26-88区から北東方向に調査区外へ向かう。南北間は距離にして57mほどを測る。土壌1067と重複しそれよりも古い。

平面形は、顕著に蛇行する流路である。幅も一定でなく、0.8mから1.5mまで差がある。底面も深淺部が交互し、不整である。曲流部では水流によるものか、扶れを生じる部分がある。埋土は黒褐色粘土層、明黄褐色砂の部分がある。砂質部はごく軟質である。明黄褐色砂が斑状に混じる部分があることが特徴的である。



図63 流路1018 (北東から)



図64 流路1018土層断面 (南から)

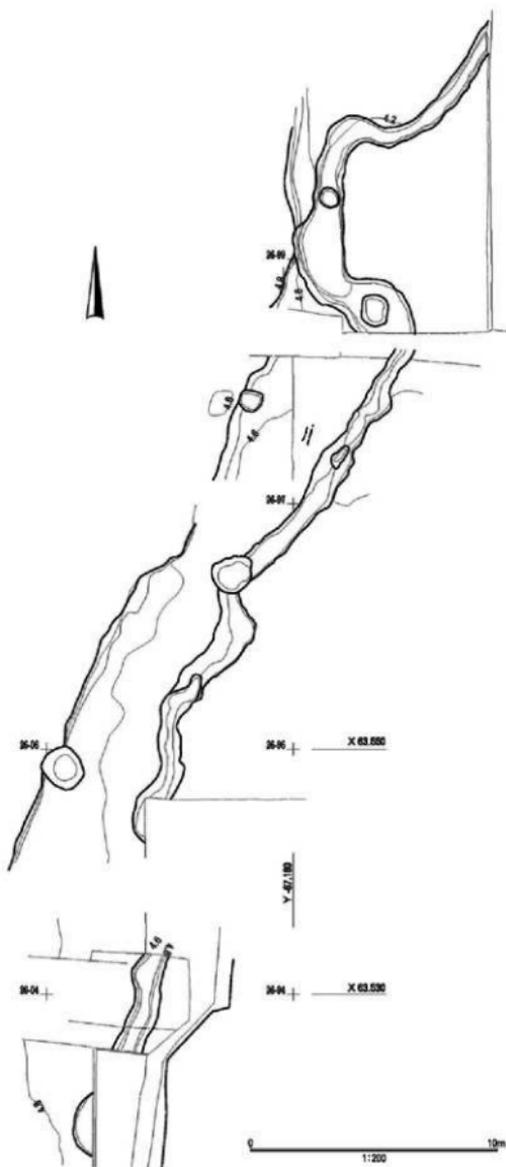


图85 流路1018 (1:200)

出土遺物 埋土中からごく少量の遺物が出土した。他に部分的に集中して出土する位置があるが、別遺構との重複の可能性がある。弥生土器の細片が含まれる。

土壌1065 (図66・67)

調査中央区、G26-65区で検出した。谷西岸肩部にかかる様な位置にある。平面形が不整な楕円形状の土壌である。断面は逆台形状を呈するが、壁面の一部は抉れており、湛水状態であったことが窺われる。長径は1.6m、短径は1.4m、深さは0.8mを測る。

覆土の上半部の一部は渦流状の堆積を示す。下記のように木質遺物の出土位置と一致しており、あるいはこうした遺物が流れ込むような堆積状況があったのかもしれない。以下の覆土は、黒褐色泥炭質粘土で、下半は地山の谷堆積層青灰色細砂質粘で埋まる。上面12層が擁み込むように堆積しているが、これは、あるいは圧密によるものかと思われる。

出土遺物 (図68、表13) 覆土中から散漫に、少量が出土した。そのほかに上部渦流状の堆積層中から木質遺物が密集して検出された。樹幹のような大形の資料に混じり、木製品が出土した。また、ヒョウタンの出土もあった。ただ、土層断面での観察から、この部位は谷堆積層との関係が判然とせず、別遺構または、谷堆積層のものである可能性もある。

3239は、木質遺物の集中部下位から出土した。略全形を復元できる資料である。内面胴部下半にお焦げ状の付着物、外面には煤状の付着物が残る。

木器類は、上部から出土した。3235は、片面に木肌を残す割材を用いる。頭部を残し、柄を削りだす。粗削り段階のものと思われ、製品としては斧柄が想定できる。木器3238は、割材を用い、棒状の一部を切り欠いている。具体的な形態を復元できないが、組み合わせ部材とできようか。

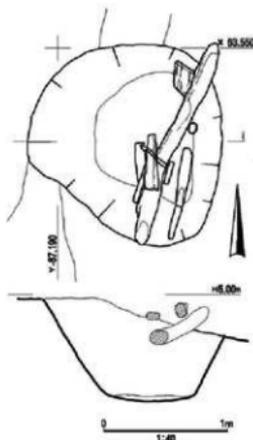


図66 土壌1065 (1:40)

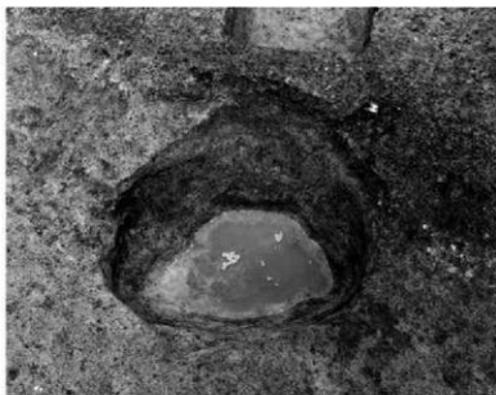


図67 土壌1065 (北から)

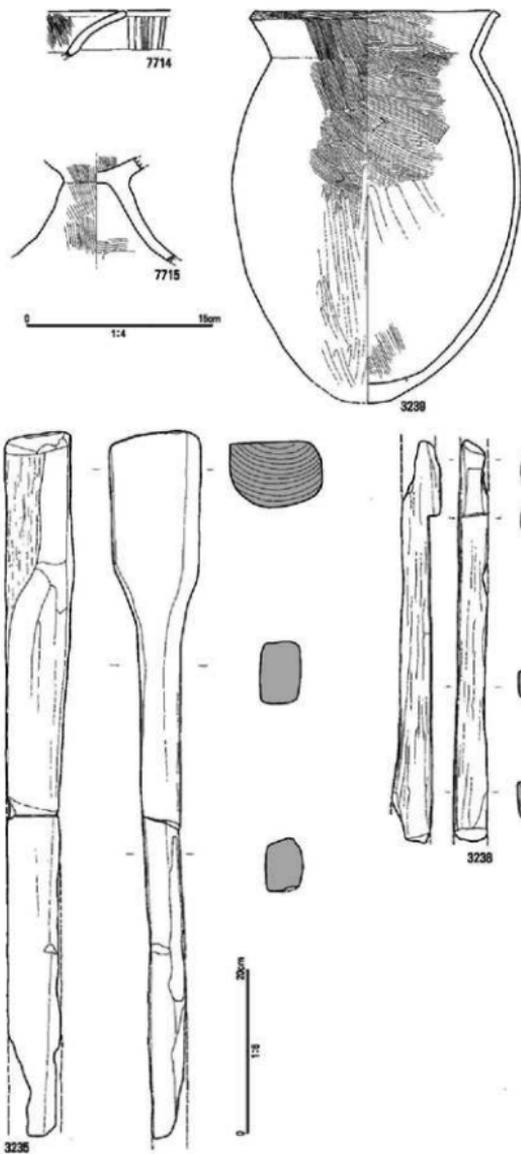


図68 土壙1065出土遺物 (1:4, 1:6)

遺物番号	出土位置	遺物種類 (年代)	計測方法	口径/径さ	底径/幅径	高さ/厚さ	計測箇所	遺存 (量・状態)
3235	1066 G26-	木器 芥鍋未成品	実測	962	110	30	底面・縁部	柄下部を欠く
		直納椀弁の朽木成品	荒削りで成形を作出している途上の段階。厚材面が残る。					
3238	1066 G26-9555	木器 加工棒	実測	327	24	32	中央部の厚さ	両端部を欠く
		用途不明品。別の材と組み合わせる部材とみられる。	棒材の片方を1cmほど彫りこんで、25cm以上に及ぶ平坦な面を作出している。底の下部では平面と反対側で材によくみもたせている。					
3239	1066 G26-9555	弥生土器 甕 (弥生/晩末期)	実測	196		318		略定形
		外面に煤状の付着物、内面順下半を中心におきかけ状付着物。	胎土：粗砂多い、雲母を含む。 器表：やわらかい赤みの黄10YR7.5/4.5結色		外面：刷毛目調整→割下半部で調整 (一部底唇も調整や削削り調整状) 内面：焼刷毛目調整→割下半部で調整			
7714	1066 G26-	弥生土器 高杯 (弥生/晩末)						口縁部細片
			胎土：粗砂を定量含む 器表：赤褐色		外面：焼削で調整 内面：焼削で調整→焼削も調整 外面に電文。			
7715	1066 G26-	弥生土器 鉢 (弥生/晩末期)						脚台部、やや磨滅。
		又は壺	胎土：粗砂多く含む 器表：赤褐色		外面：磨刷毛目 内面：身部刷毛目調整、脚部焼刷毛目調整→焼削調整			

表13 土壌1066出土遺物観察表

土壌1066 (図69・70)

調査中央区、G26-9713区で検出した。谷西岸に位置する土壌である。平面形は不整な円形状で、断面形はやや袋状を呈す。底面は不整である。平面の規模は径0.8m、深さは0.3mほどを測る。

覆土は、上部が砂質土で、暗灰黄色 (2.5YR 3/2)、下部は黒褐色 (7.5YR 3/2) の粘土である。両者は、レンズ状に重なる部分がある。下部黒褐色粘土は、強粘質で、西岸の11層の性状に一致する。

出土遺物 (図73、表14) 覆土中からごく少量の遺物が散漫に出土した。弥生時代終末期までの遺物が含まれる。

図示する7716は、甕口縁部細片資料である。外面は煤状図の付着物が残る。

土壌1067 (図71)

調査中央区、G26-9633区で検出した。谷西岸に沿った位置にある土壌である。流路1064と重複しそれよりも古い。

平面形は不整な楕円形状で、断面では楕円状を呈す。壁の一部には抉れを生じている。底面は丸みをもつ。平面の規模は長径1.1m、短径0.9m、深さは0.4mを測る。

覆土は上部が黒色粘土層で、クロボク様、軟質である。下部は灰黄褐色粗砂層である。上下部とも壁側から黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土の層が



図69 土壌1066 (1:40)



図70 土壌1066 (東から)



図71 土壌1067 (1:40)

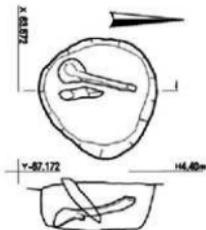


図72 土壌1077 (1:40)

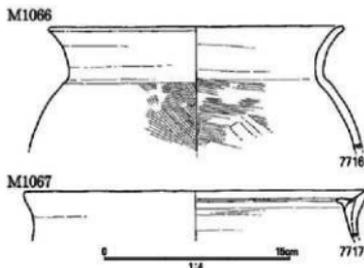


図73 土壌1066・1067出土遺物 (1:4)

遺物 番号	遺物番号	出土位置	遺物種類(年代)	材質(土・漆・瓦)	口径/高さ	底径/底高	器高/器口	計測箇所	遺跡(層・位置)
7718	1066	C26-	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	復原	236				細片
			外面黒酸化。						
			胎土: 砂粒多いが、粗砂は少ない。雲母を含む。						外面: 刷毛目調整→口部形修整で調整
			器表: 外面黒色化。内面はやわらかい黄赤2.5YR7.5/5洗特						内面: 刷毛目調整→口部形修整で調整、胴中位以下を加で調整。
7717	1067	C26-	弥生土器 甕 (弥生/中期)	復原	278				口縁部細片、外面や中層
			胎土: 砂粒少量。						外面: 甕で調整または洗磨で調整
			器表: やわらかい黄赤2.5YR7.5/5洗特						内面: 洗磨で調整

表14 土壌1066・1067出土遺物観察表

流れ込んだような状態で、細かくレンズ状に挟まる。

出土遺物(図73、表14) 覆土中からごく少量の遺物が散漫に出土した。いずれも土器の細片資料である。

7717は中期弥生土器甕口縁部細片資料である。外面はやや磨滅する。

土壌1077(図72・74)

調査中央区、G26-9624区で検出した。谷西岸に沿った位置にある土壌である。流路1018と重複しそれより新しい。

平面形は不整な円形状態で、断面箱状を呈す。平面の規模は径0.7m、深さは0.3mを測る。

覆土は上部が黒褐色(10YR 3/2)の泥炭質粘土層。底部近くは、同様な泥炭質粘土層であるが、やや暗色で、黒褐色(10YR3/1)を呈す。**出土遺物**(図75、表15) 覆土中から土器破片資料がごく少量、細片で散漫に出土したほかに、図示する木器など、木質遺物が出土した。

3234は杓子未成品である。覆土中に斜めになって出土した。杓子の形状を大まかに削りだした段階の資料である。出土時は、白木の色調、状態を保っていた。柄の端部を欠く資料であり、現況で47cmの長さ残る。各部の面取りが明瞭に観察できる。柄の角度はやや浅い。

以上の他に、杭の出土があった。杓子3234と同じ深さで、斜めになって出土した。上端は検出面の高さにあり、より上位の杭である可能性が残る。



図74 土壌1077 (東から)

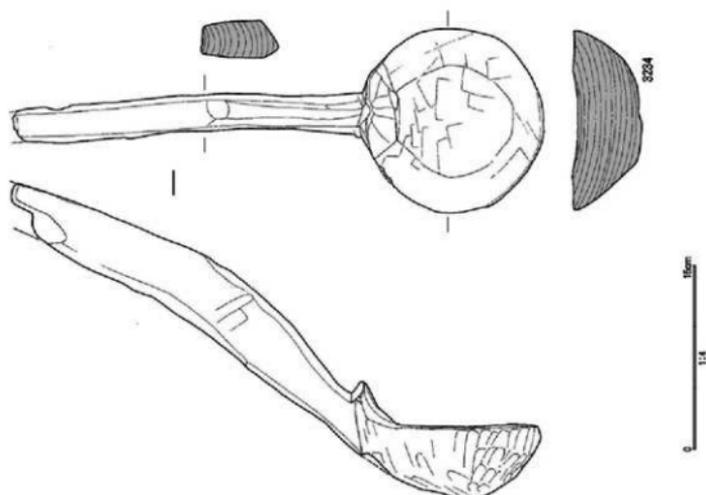


図75 土壌1077出土遺物 (1:4)

遺物 番号	遺物番号	出土位置 遺物付記	遺物種類 (年代) 材質 (土・埴土・磁土)	計測部位	口径/長さ	底径/幅	体高/高さ	計測箇所 成形・調製	備考 (量・収量)
3234	1077	C26	木器 朽子未成品	実測	475	15	55		柄の先端付近を欠く 全体の影はほぼできあがっているが身内部を割っていない。

図76 土壌1077出土遺物観察表

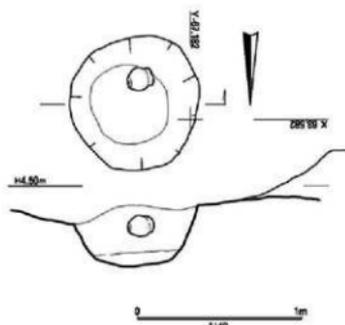


図76 土壌1085 (1:40)

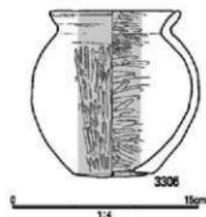


図77 土壌1085出土遺物 (1:4)

土壌1085 (図76・78)

調査北区、G26-8951区で検出した。谷西岸の肩部近く位置する土壌である。平面では不整な円形状を呈し、断面では逆台形状を呈す。径は0.8m、深さは0.4mを測る。

覆土は暗褐色の粘土である。砂混じりで全体に一様である。

出土遺物 (図77、表16) 覆土中から散漫に、ごく少量の土器細片資料が出土したほかに、覆土中位から、完形の土器が横位の状態で出土した。

図示する壺3306は、横位で出土した。底部には内方からの加撃による穿孔が行われている。孔の径は底面に比して大である。内外面に磨き調整を行う。内面では周回方向の、外面では縦方向の調整となっている。外面のそれは短い単位で段階的に行われたようで、帯状の単位の分布となって残っている。

遺物番号	遺物番号	出土位置 遺物略記	遺物種類 (年代)	計測単位	口径/高さ	底径/底厚	器高/器口	計測番号	遺存 (遺-状態)
3306	108 5		赤生土器 壺 (後期~終末期)	実測	105	66	135		略完形
			粘土: 砂粒を多く含む。 磨き: くすんだ黄みの赤 (7.5 R 6/β 洗練)、 内面はやわらかい黄赤 (2.5Y R 7.5/β 洗練)						外面: 縦で磨き→縦方向に調整 内面: 周回方向に磨き→横方向に調整 底部を焼成後に穿孔。内外面赤彩。

表16 土壌1085出土遺物観察表



図78 土壌1085 (北東から)

(6) 28層中の遺構

28層は、調査北区から調査中央区にかけて、谷中央に寄ったあたりから東側に分布する。この28層の掘り下げの過程で杭列1074・1090・1091、重なるように層下面で流路1089を検出した。また、下位の15層上面で杭列1093・1094・1095を検出した。以上は、拡張2区及び、その周辺に位置する。

以下、遺構番号順に報告する。

杭列1074 (図81)

調査区中央区、拡張2区内のG26-86区からG26-87区にかけて、15層上面で検出した杭列である。確認面は、わずかに東へ傾斜する。杭の平面分布を見ると、分散して明瞭な配列は認められないが、全体の分布からして北東方向、分布の軸は北18° 東と計測できる。全く離れた位置にも杭が分布する。

杭は小径の丸木、まれに割材を用いている。杭の深さは、深浅あがるが、0.1mから0.5mの範囲である。

流路1089 (図80)

調査区中央区、拡張2区東壁に沿う、G26-76区からG26-77区で検出した。北方向へ向かう流路である。

28層掘り下げ中に検出したが、明瞭に確認できたのは、28層を掘りあげ、谷堆積15層上面に至ってからである。28層掘り下げ中は、明褐色砂の帯状の分布として、みることができたのみである。

15層面での形状は、わずかに曲流する、幅1.1m、断面が逆台形状を呈し、深さ0.2mほどの規模である。調査区内では、北からやや東へ振れた方向へ流れる。上述のとおり、流路1089は、28層掘り下げ途中に検出したもので、その部分を考慮すると、深さ0.5m程となる。また、28層とする部位自体も、その一部を構成する堆積である可能性がある。埋積層は粘質土層、灰白色砂層の部分があり、相互にレンズ状の互層を成す部分がある。



図79 杭列1090・1091・1092 (南から)



図80 流路1089 (南から)

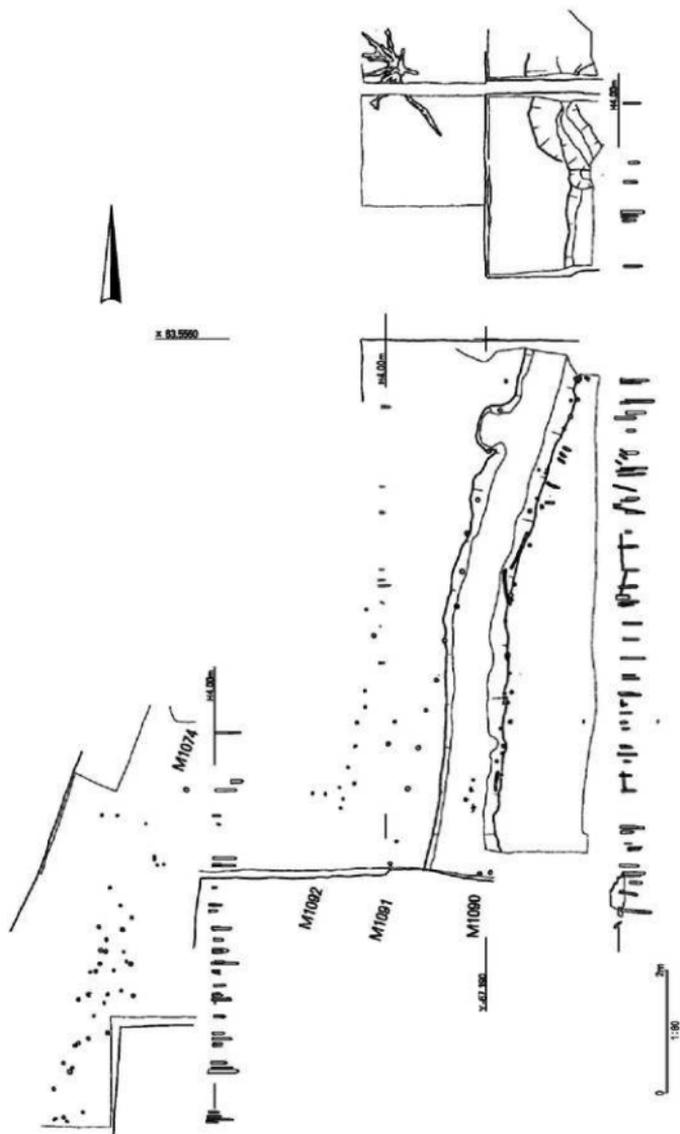


图81 杭州1074·1090~1092 (1:80)

出土遺物 覆土中から散漫に、ごく少量の遺物が出土した。土器細片の他に、板状の木製品がある。また、28層とする部位からもごく少量の遺物が出土した。石鏃、縄文土器粗製深鉢の資料が含まれている。

杭列1090 (図79・81)

調査区中央区、拡張2区東壁に沿う、G26-76区で検出した。流路1089に東岸に略沿う位置にある。ことさらに細い丸木を用い、ジグザグに打設して、2条の杭列を成しているようにも見える。一部は明確に傾いている。深度は0.1mから0.5m程であり、その分布に特徴的な偏りなどは観察できない。杭に、流木状の木が掛かったようにして出土しているが、意図したものか否かは判断できない。

杭列1091 (図79・81)

調査区中央区、拡張2区東壁に沿う、G26-86区からG26-76区で検出した。流路1089西岸にほぼ沿う位置にあるが、一部は流路上に位置する。間隔が一定する1条の杭列である。杭には丸木を用いるが、上述の杭列1090よりも太い。全体として見ると、杭列1090と杭列1091は平行しており、その方向は、北から15° 東へ振れた方向である。調査区内の南端部では、流路1089とははずれた方向へ向かうようにも観察される。

杭列1092 (図79・81)

調査中央区、拡張2区の中央にあたるG26-86区で検出した。28層下部で確認した。丸木を利用した杭を、不規則に1条打設する杭列で、略北方向へ向かう。確認したのは延長5mほどの区間である。杭の深さは浅く、0.2mほどである。

矢板列1093 (図82~85)

調査中央区、G26-8752区で検出した。上位の杭列1069の打設される砂層下、28層で検出した矢板列である。2条平行する矢板列である。東側の長い方の列で、0.8mほどの長さ遺存する。列の方向は北からやや東へ振れ、その軸の方向は北17° 東である。矢板は両縁を削り、尖端を作り出す。矢板の間隔は密でなく5cmほどの間隔が空く部分が多い。矢板遺存部の長さは、10cmから40cmまでの幅があるが、両側の列とも、中央部が深く両端部に向かい浅いという傾向がある。両矢板列間の幅は、0.2m弱で略平行している。

遺存状況から見ると、実際の機能部は、かなり上方にあったものと想像できる。現況は、上位砂層、12層、11層を堆積させた流路により、削平された結果である。

矢板列1093に関連すると思われる遺物の出土はなかった。

矢板列1094 (図61)

調査中央区、G26-87区で検出した。杭列1069砂層下、28層で検出した矢板列である。大きく間隔を置いて打設された矢板列であ

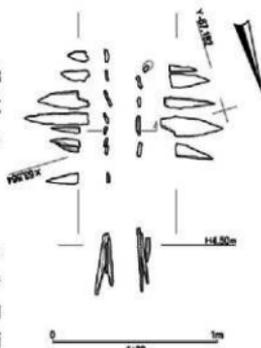


図82 杭列1093 (1:30)

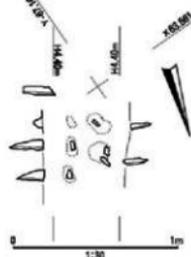


図83 杭列1095 (1:30)



図84 矢板列1093 (東から)



図85 矢板列1093 (根入れ部、西から)

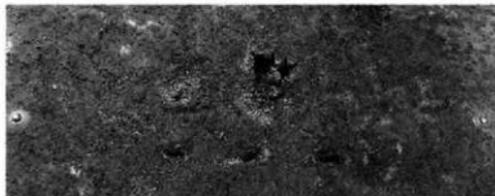


図86 矢板列1095 (東から)

る。1条と見るが、西半部の状況から、あるいは2条の構成であったのかもしれない。1.7mほどの長さが遺存する。矢板列の軸方向は北から西へ振れ、その軸の方向は北 66° 西である。矢板の幅は、矢板列1093・1095よりは、幅が狭く10cm内外である。遺存する深さは15cmから30cmほどの幅がある。また、尖端の削り出し部が深い位置に残る。東端部が、矢板列1095の北端部に近接し、角部を構成するような位置関係にある。

矢板列1094と関係するような遺物の出土はなかった。

矢板列1095 (図83・86)

調査中央区、G26-8711区で検出した。矢板列1093と同様の確認面と考えられるが、この位置には上位の砂層は分布しない。矢板列1093と同方向、同様の構成の遺構である。

遺存するのは長さ0.4mほどである。矢板列の軸方向は北からやや東へ振れ、その方向は北 36° 東である。矢板は矢板列1093と良く似ている。矢板の間隔は矢板列1093より大きく0.1m程ある。矢板遺存部の長さは、10cmから20cmまでの範囲にある。おおくは、尖端の削り出し部までの遺存であり、根入れのかなりの部分が削り取られているものと考えられ、確認面の標高が矢板列1093より低い位置にあることと良く一致している。矢板周囲の空隙に明黄灰色の砂が充している状態がみられ、打設時の環境を窺うことができる。

矢板列1095に關係する遺物は出土しなかった。

矢板列1093・1094・1095 以上3基の矢板列は、一体の施設として機能していたことが窺われる。矢

板列1093・1095は、8.5mほどの距離を置き、平行して設けられている。矢板列はその北端に合わせるような位置に打設されている。矢板列が土留めの機能をもつとして、矢板列1093・1095のそれぞれで形成される、幅0.2mほどの部分に盛土されたと考えるより、両者と矢板列1094とで構成される「コ」の字形の部分に盛土され、矢板列1093・1095は、そこに設けられた水路と考えることのほうが自然であろう。また、上位杭列1069も、この構成の中に整合的に位置するが、明らかに上位であること、丸木で構成されること、不整に打設したものである点などで、一応別のものであるとする。

(7) 13層・17層下の遺構

13層は、調査南区において、ほぼ谷の幅一杯の範囲に分布する。17層は、G26-01区を中心とした範囲にあり、たとえば洪水のような現象により生成し、局部的な堆積と見える。両者の最下部から下位層の上面とする位置で遺構、及び流路等を検出した。

このうち、谷西岸に沿う溝1042・1055、土壌1051の他は3区とした拡張区、その西に接する部分に集中して分布する。以下、遺構番号順に報告するが、特に相互に関連すると思われる杭列については、順に従わず一括して記述する。

溝1042 (図87・88)

調査南区南半部、G35-19からG26-01区にかけて遺存する。溝427と平行して谷側に位置する。調査区南西方向からの溝である。北端部は、流路1044と交差する位置までを検出する



図88 溝1042 (北から)

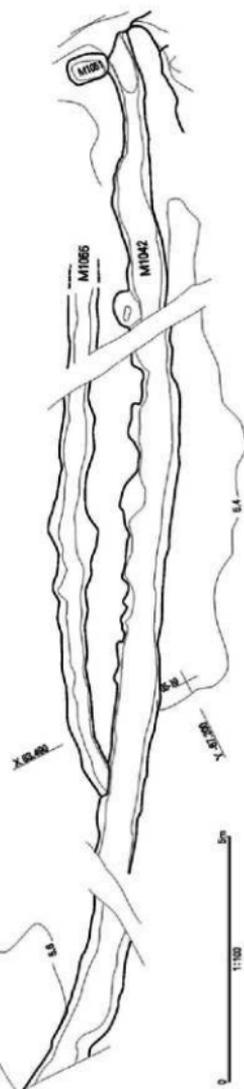


図87 溝1042・1055 (1:100)

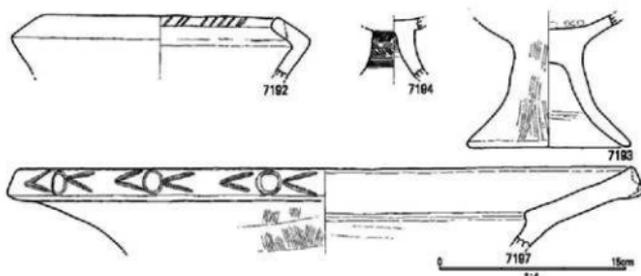


図89 溝1042出土遺物 (1:4)

遺物番号	遺物番号	出土位置	遺物種類(年代)	材質(胎土・釉薬・漆)	口径/高さ	底径/高さ	体径/高さ	計測番号	遺存(破・欠部)
7192	1042	G25-45	赤生土器 壺 (弥生/後期)	復原	190				口縁部破片、摩滅顯著
			胎土:粗砂多く含む。 器表:明るい灰みの黄 (2.5Y7.5/2砂色)				外面:刷毛目のち磨で調整か。口唇部に列点文 内面:横線で調整		
7193	1042	G25-45	土器類 高坏脚部 (古墳/前)						脚部、やや磨滅。
			胎土:砂粒定量含む 器表:やわらかい赤みの黄 (10 YR7.5/4.5粘土)				内外面調整不明。/平行沈線文3段+板状工具列点文2段(上下段で別状)		
7194	1042	G25-53	赤生土器 高坏 (弥生/後期)	復原	128				脚部は完存。
			胎土:粗砂を多く含む。 器表:明るい灰みの赤みを帯びた黄				外面:刷毛目調整一箇で調整、外面赤彩。 内面:環部は磨で調整、底部に指押さえ痕、脚部は刷毛目調整一箇で調整か。		
7197	1042	G25-44	赤生土器 壺 (弥生終末か)	復原	494				口縁部破片、摩滅顯著
			同一個体中M1043、MD44からも出土。特異な文様。接合 R	胎土:粗砂多く含む。 器表:くすんだ黄みの赤 (7.5 R5.5/赤緑)			外面:刷毛目のち磨で調整か。口縁部端部竹管文1と羽状列点文2を単位施文。 内面:横線で調整		

表17 溝1042出土遺物観察表

ことができた。幅は0.8mを前後し、断面形は、全体として逆台形状を呈し、深さは0.2m程を測るが、部分的に深く挟れる。壁から底面は不整であり、それを反映して平面形状も著しく不整な部分がある。覆土は粗砂が主となっており、上部で褐色、下部では鈍い黄褐色を呈す。黒褐色細砂を挟む部位がある。上面に木炭が分布する部分がある。

出土遺物(図89、表17・18) 覆土中から散漫に、コンテナ1箱ほどの分量出土した。細片の土器資料が殆どであり、器表も磨滅するものが多い。古墳時代初頭までの遺物を含む。高坏7194は、脚部資料で、器表がやや磨滅する。坏受部に寄り、周回方向に間隔を空けて3条の条線帯を設け、その間におそらく薄い板状工具による連続刺突文を施す。上下のそのの向きを変えることで、全体として綾杉文を構成している。刺突文に残る木目圧痕は細かく明瞭であり、工具先端の春材部は顕著に磨滅している可能性があり、刷毛目調整工具であったのかもしれない。胎土に細孔が顕著である。古墳時代初頭。壺7197は、口縁部細片資料である。顕著に磨滅する。大きく外反する口縁部端面に、竹管文と「く」



図90 溝1042・凹地1043出土遺物 (1:4)

遺物 番号	出土位置		遺物種類 (JRA)	計測測定	口幅/長さ	底幅/幅値	容積/高さ	計測担当者	遺存 (量・状態)
	遺物種別	遺物種別							
1087	1043	G35-S3	石器 穿孔具 軟質の変成岩	実測	66	10	9	重量: 9	表面を研磨。中央部の横断面が略三角形で、両端が円筒状になる。
7666	1043	G35-1923	土師器 甕 (古墳/前期)	複製		178			口縁部破片
			布留式系 胎土: 砂粒多いが粗砂は少 器表: 明るい灰みの赤みをおびた黄 (10Y R3/3薄赤)						外面: 横線で調整 内面: 口縁部縁線で調整、胴部擦り調整。 口縁部が窪み気味の水平面となる
7667	1043	G35-1933	土師器 鉢 (古墳/前期)	複製		148		63	
			胎土: 砂粒少量含む。雲母含む 器表: 明るい灰みの赤みをおびた黄 (10Y R8/3薄赤)						外面: 刷毛目調整→擦り調整、手で調整 内面: 手で調整
7668	1043	G36-124	土師器 甕 (古墳/前期)	複製		220			破片
			布留式系 胎土: 砂粒多いが粗砂少。雲母、角閃石含む 器表: 外面は薄い灰色 (N2.5 消灰色)、内面はやわらかい黄赤 (10 R7.5/5薄赤)						外面: 刷毛目調整→横線で調整 内面: 口縁部縁線で調整、胴部擦り調整 口縁部が窪み気味の傾面。

表18 凹地1043出土遺物観察表

字状の板状工具による押圧文を組み合わせた単位文様を繰り返して、施文する。

古墳時代前期の土師器鉢7667は小破片、甕7666は細片資料である。

石器1087は磨製の尖頭器である。両端に尖頭部をもつ。変成岩(片麻岩か)を使用する。回転の痕跡などは確認できない。形態を想定できない。

流路1043 (図91・92)

調査南区、G26-0区で検出した。基盤の15層を掘り込んで、洪水時の穿掘部かと思われる。南北方向に曲流するように凹地が形成されている。底面は不整で、東辺部の壁は抉れており、南西方からの流水を窺うことができる。また、さらに北へ向かう浅い凹地を形成している。凹地は粘土混じりの黒褐色砂層で埋まる。部分的に、黄灰色粗砂の堆積部を挟んでいる。東に接する凹地1112も同時の形成かもしれない。

埋没後、凹地に直交するような位置に杭列が複数条打設されている(杭列1059・1117・1118)。



図91 凹地1043 (北から)



図92 凹地1043土層 (杭列1118・1059) 南から

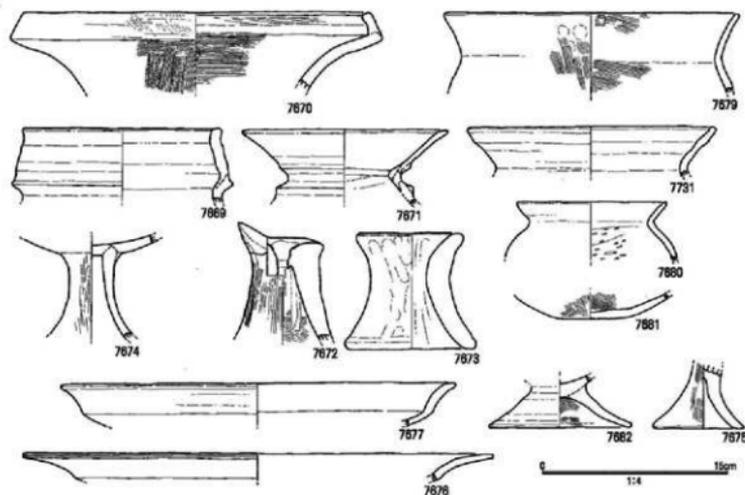


図93 流路1044出土遺物1 (1:4)

出土遺物 (図90、表18) 覆土中から散漫に、総量でコンテナ2箱ほどが出土した。大半は細片の土器資料であるが、石器が少数混じる。土器には古墳時代前期までの資料が含まれる。

流路1044 (付図)

調査南区、G26-01区を中心とした、17層とする砂層の広がりとして検出した。西端部は溝427の西岸に地滑りのような痕跡を残し、前面下流側に砂の堆積がある。さらに、溝427東岸では、地山15層を溝状に抉れた部分から東方へ抜けている。当初、溝427の埋没後の凹地を流れる流路の屈曲部と考えたが、判断としない。ただし、上述砂堆(付図)に対し、その上流側に分布する黒色粘土が溝427から流路1044の方向に従い、溝427を逸れて東へ分布することが認められたことなどから、そういった蓋然性がある。後述する遺構1047は、位置からすると、その黒色粘土層中に形成されたものとみえる。

また、砂堆とする層の性状は、砂礫、粘土混じりの砂層であり、遺物を顕著に含む。遺物は細片化した土器片で、他の層とは性状、遺物の状態も異なって見える。あるいは、人為的な盛土の可能性も考えられた。

出土遺物 (図93・94、表19) 覆土中から総量でコンテナ7箱程の分量出土した。G26-01区東部からの出土が最も多く、次いで溝427上に堆積する砂堆からの出土である。大半は土器の細片資料であるが、器台等は完存に近い資料がある。弥生土器から、古墳時代前期の土師器までを含む。

複合口縁蓋7669は、口縁部資料である。細片化した資料が、まとまった数出土している。器表の遺存は良好である。内外面とも周回方向の撫で調整で仕上げるが、口縁部立ち上がり部の調整後、頸部にかかるくびれ部の調整を行うことで、上方に押し出し、稜部を成形している。口縁端直下は内外面から強く押し、特に外面は口縁端直下に凹面を形成し、結果的に口縁端を外反させている。

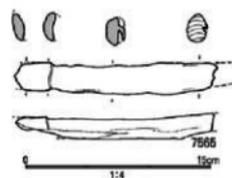


図94 流路1044出土遺物2 (1:4)

遺物 番号	遺物位置	遺物種類 (JPOC)	計測位置	口径/径2	底径/幅	高さ/径2	計測時期	遺存 (注・状態)
遺物 番号	遺物形状	材質 (注1・焼成・焼期)					成形・焼成	
7665	1044	木器 陶物形	実測	165	22	16		口縁部を欠き、裏面の裏腹
7669	1044 G36-1112	土師器 甕 (古墳/初)	複製	180				口縁部破片
		胴部の内側に磨蝕痕を呈し口縁部。胎土は在地のものと思われる。		胎土：砂粒多く含む。雲母含む 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)				口頸部内外面磨蝕で調整
7670	1044	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	複製	280				口縁部破片
		胎土：粗砂多く含む。雲母含む。 器表：明るい灰みの黄 (2.5Y7.5 /2砂色)					外面：胴毛目調整→口縁部磨蝕で調整 内面：横刺毛目調整→口縁部磨蝕で調整	
7671	1044 G36-1112	土師器 釜合 (古墳/初)	複製	165				口縁部破片、厚減。
	山形系鼓形釜合	胎土：粗砂多く含む。雲母、シャモット 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					外面：横腹で調整。 内面：裏で調整。受け部は磨蝕も調整または裏で調整。	
7672	1044 G36-1112	弥生土器 支脚 (弥生/終末期)	実測	57				胴部を欠く、やや磨蝕。
	首形支脚	胎土：粗砂多く含む。 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					外面：胴部毛目調整、頂部付近で調整 内面：横刺毛目調整→胴上部縁部で調整(磨蝕り磨蝕状)	
7673	1044 G36-0152	弥生土器 釜合 (弥生/後期)	実測	80	100	94		底元形、やや磨蝕。
		胎土：粗砂多く含む 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					内外面を指押さえ風、裏で調整	
7674	1044 G36-1112	弥生土器 (弥生/後期)						
		胎土：雲母多く含む 器表：薄香					外面：磨蝕も調整 内面：不明	
7675	1044 G36-0152	弥生土器 小形高坏						厚減
		胎土：粗砂多く含む。 器表：やわらかい赤みの黄 (5YR7.5 /磁粉色)					外面：胴毛目	
7676	1044 G36-1112	弥生土器 高坏 (弥生/終末期)	複製	376				口縁部破片、厚減。
		胎土：砂粒少ない。 器表：薄香					内外面調整不明。口縁部部に凹線。	
7678	1044 G36-1112	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	複製	398				口縁部破片、やや磨蝕。
	R7803と同一個体で、M1044とM1047から出土する(後者に属する?)	胎土：粗砂多く含む。 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					外面：横刺毛目調整→口縁部付近と胴部付近を横腹で調整 内面：裏で調整 文様：口縁部部に三機具による押引文(文様には二機具しか面当っていない箇所が多い) /頸部に三角突。	
7679	1044	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	複製	232				口縁部破片、やや磨蝕
	外面と口縁内面横付着。	胎土：粗砂多く含む。角閃石含む 器表：やわらかい赤みの黄 (5YR7.5 /磁粉色)					外面：胴毛目調整→裏で調整。口縁部に指押さえ風。 内面：横刺毛目	
7680	1044	土師器 甕 (古墳/初)	複製	122				口縁部破片、外面やや磨蝕
	布留傾内	胎土：粗砂を多く含む。 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					外面：口縁部磨蝕で調整、胴部不明。 内面：口縁部磨蝕で調整、胴部縦割りで調整。 口縁部部尖り気味。	
7681	1044	弥生土器 甕又は甕		56				
		胎土：砂粒多い。雲母と角閃石多く含む。					外面：胴毛目	
7682	1044	土師器 甕又は甕 (古墳)	実測	114				胴部、ほぼ完好。
	胴合	胎土：砂粒多いが粗砂は少。雲母含む。					外面：強い横腹で調整 内面：身磨きで調整、胴部横刺毛目調整→裏で調整	
7731	1044 G36-1112	土師器 甕 (古墳/初)	複製	192				口縁部破片
	布留式系	胎土：砂粒多いが、粗砂少。雲母含む。 器表：うすい黄赤 (SYR8/A肌色)					口縁部内外面磨蝕で調整 口縁部部外縁。	

表19 流路1044出土土物観察表

土壌1051 (図95・96)

調査南区、G26-01区で検出した。溝427の東岸の10層分布域に位置する。おそらく10層上から掘り込むもので、流路1044の南側肩部にかかる位置で検出した。流路1044よりも下位の土壌である。平面形は楕円形状、断面形は逆台形状であるが、上部が外方に開く形状となっている。長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。覆土は粘土味の強い砂層である。覆土上半部から、集中して木材の出土があった。割材の様に見えるが、一方を尖らせているように見えるものがあり、明らかに杭としての加工を行うものが混じる。また、板状の資料が混じる。底部からも木質遺物の出土があった。



図96 土壌1051(北から)

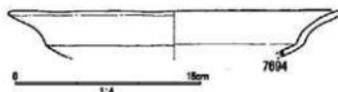


図97 土壌1051出土遺物(1:4)

遺物番号	出土位置		遺物種類(年代)	計測程度	口径/高さ	底径/幅	器高/深さ	計測番号	遺存(遺・破)
	遺物種別	遺物種別							
7694	1051	G26-1	赤生土器 高環(弥生/晩末) 粘土:砂粒少量 器表:うすい黄赤SYR8/5肌色	復原	266				細片、厚減。

表20 土壌1051出土遺物観察表

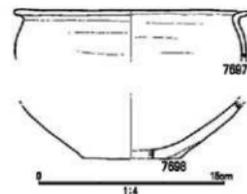


図98 流路1055出土遺物(1:4)

遺物番号	出土位置		遺物種類(年代)	計測程度	口径/高さ	底径/幅	器高/深さ	計測番号	遺存(遺・破)
	遺物種別	遺物種別							
7698	1055	G26-1021	赤生土器 壺(弥生/中期) 粘土:砂粒少量 器表:やわらかい黄赤10 R7.5/5赤香	復原			78		底部の大破片、厚減。

表21 流路1055出土遺物観察表

杭列1058(図99~102)

調査南区、G26-01区では、流路1044の項で触れたように、溝427の東岸が深さ0.3m程切りかかれて、幅2m程の開口部を生じている。この開口部が谷の西岸と接する位置に杭列が打設されている。杭列は、開口部の縁に沿う方向のものと、開口方向に直交するものがある。前者には、杭列1058・1118

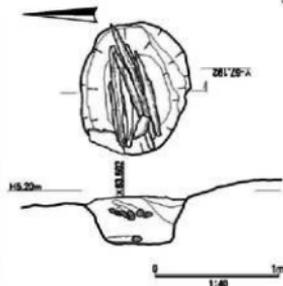


図95 土壌1051(1:40)

出土遺物(図97、表20) 上述した木質遺物の他、覆土中から散漫に細片の土器がごく少量出土した。7694は、高環口縁部細片資料で、弥生時代終末期。

流路1055(図87・88)

調査南区、溝427の東岸で、溝427に

沿って走り、南端部で交差する。10m程を検出した。南北方向への延長は確認できなかった。平面形はやや不整で、断面形は逆台形状を呈す。幅は0.6m前後、深さは0.1m程である。埋土は黄灰色シルトで堅く締まる。南部では粗砂質となる。

出土遺物(図98、表21) 遺物は埋土中から散漫にごく少量出土した。土器は、弥生時代後期までの資料が出土した。大半は細片資料である。図示する7698は、中期無頸壺底部大破片資料である。器表は磨滅する。口縁部と底部と同一個体資料である。

がある。杭列1059・1117もこれに含まれるものかもしれない。後者には1116及び1058の一部が含まれる。

杭列1058は、溝427開口部の南縁に沿うような位置に打設された杭列である。東西方向でわずかに弧状に連なる。小径の丸木あるいは、矢板というよりむしろ割材といった様な材を用いた杭を、部分的に2条打設している。約5.5mの長さを検出した。その西半部は地山である粘土層へ打たれる。ここでは杭列の周囲が溝状に決れている。これが、杭打設のための造作なのが、打設後流水により削り取られた結果なのかは判然としない。杭列東半部は、下位の流路1043埋没後の砂層部に打設される。この位置では、図上で検討する限杭は、やや幅広に2条打たれる様であるが、不整である。東端部ではさらに纏まりがなくなる。別にこの列の半ばから分岐し、北方向へ伸びる1条の杭列がある。本来、溝427開口部に対して横断方向の別の杭列とすべきものであるが、調査時同一のものとして記録した。粘土層に打ち込まれるもので、杭の痕跡のみが小穴の連続として遺存するものである。長さは2m程が遺存し、矢板列の接線方向で北から74° 東へ振れた方向をとる。

粘土層に生じた小穴の壁面に突き刺さった様な状態で銅鏝の出土があったほかは、遺物の出土をみていない。

杭列1059 (図99・100)

調査南区、G26-0114区で検出した。当該区域の杭列では最も北に位置する。開口方向に沿い、東西方向に打設された杭列であるが、北側に離れた位置にある3条のうちの北側の杭列である。位置としては、下位の流路1043埋土上で、それを横断する方向に打設されるものである。この場所の一連の



図99 杭列1058・1059・1116~1118 (1:40)



図100 杭列1058・1059・1116～1118
（北から）



図101 杭列1058 杭遺存状況（南東から）



図102 杭列1058 遺物出土状況（北から）

杭列のうちでは最も大形の杭を使用する。杭は間隔をもって打設される。丸木、割木、矢板が利用されている。杭列の報告は、北から69°西へ振れた方向をとる。

杭列1059に関する遺物は確認できなかった。

凹地1112 (図103)

拡張3区、G26-91区で検出した凹地である。平面形は、凹凸の著しい不整な形状である。底面も凹凸があり、断面では、袋状に抉れる部分がある。南北4.5m、東西4.1mの範囲で、深さは0.5mを測る。南北方向での土層断面を見ると、大部分は地山粘土塊の間を暗褐色粗砂が充している。上部、南端部は白色砂の薄層を挟む黒褐色砂で埋まるが、性状からして17層相当と観察される。中央部の堆積の状況は、北方向からの埋没を示している。

出土遺物 埋土中から散漫にコンテナ1/3程の分量の遺物が出土した。細片化した土器資料で、器表はわずかに磨耗する。土器はすべて弥生土器で、大半が中期土器である。少量であるが、二重口緑壺等終末期までの遺物を含んでいる。

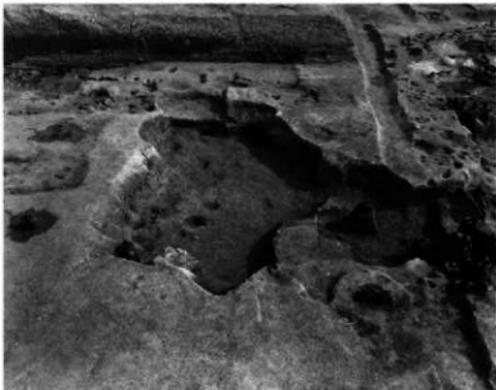


図103 凹地1112 (北から)

凹地1113 (図104)

拡張3区、G26-81区で検出した凹地である。調査区南東隅部にあたり、深く抉れ込む。一部が確認できたのみであり、平面形状は不明である。

断面を見ると、壁面は急に立ち上がり、深さは0.8mほどである。埋土は褐灰色砂層で、粘土混じり、上部は淡黄色で薄層を成す砂層である。

出土遺物 埋土中から散漫に遺物が出土した。総量でコンテナ1箱程の分量である。少数を除いて弥生土器である。大半は後期土器の細片資料である。その他に終末期土器の資料が少量ある。



図104 凹地1113・流路1114 (北から)

流路1114 (図104)

拡張3区、G26-81・82区で検出した流路である。調査区南東辺部を北方向へ流れる。調査区内では幅1.4m程で一定している。断面形は逆台形状で、上部が大きく開く。底面の幅は不整で幅0.1mから0.4mと差がある。深さは0.8mを測る。流路の軸方向は北1°西である。埋土は粘土混じ



図105 3区東辺部遺構 (1:40)

りの黒褐色砂層である。

遺物の出土はなかった。下部では流木が出土した。

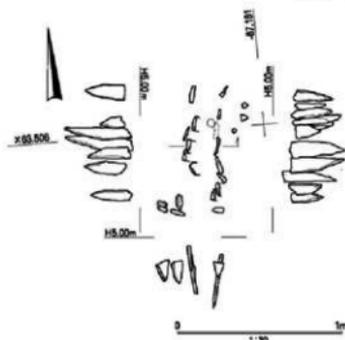


図106 杭列1115 (1:30)

杭列1115 (図106・107)

拡張3区、G26-81区、17層下面で検出した。矢板列1093・1095と同種の矢板列である2状の矢板列を平行して打設するが、やや不整で、間隔の空く部分、重なる部位等ある。長さは0.8m程が遺存し、幅は0.2m、遺構の軸方向は、北9°東である。南端部では、それぞれの列の端の矢板は、遺構長軸から90°外方に向きを変えて打設する。これにより矢板で土留めしていた範囲を推定することができる。現状での根入れ深さは中央部で最も深

く0.4m、両端部で浅く0.2m程である。矢板先端は、両縁を削ぎ取るもの、片縁のみを削ぎ取るものがある。やはり先端部のみ遺存するもので、機能部分はより上位のあったことが窺われる。

本遺構に係わる遺物は確認できなかった。

杭列1116 (図99・100)

調査南区、G26-01区、溝427開口部に打設される杭列1058を初めとする杭群のうちの1基である。杭列1116は、そのうちで最も西にあり、上



図107 杭列1115 (東から)

記開口部に接して、それを塞ぐような位置に打設される。ほぼ開口部の幅一杯に、弧状に1条の杭列が間隔を密に配列している。杭の多くは腐蝕として痕跡として残るのみである。溝状を呈す部分もある。検出した長さ3.1mを測る。弧状を成す杭列の接線の方向は、北から10° 東へ振れている。遺存する杭からすると、杭には丸木材、割木材を使用している。杭の根入れ深さは、記録をとったものでは、0.4mから杭0.2mの幅がある。杭痕跡の深さは概して0.2m程である。

杭列1058の分岐する1条が平行する位置にあり、両者の間隔は1.3mである。また、その方向は、北から10° 東へ振れており、杭列1116と一致する。

本遺構に関する遺物を検出することはできなかった。

杭列1117 (図99)

調査南区、G26-01区、溝427開口部に打設される杭群のうちの1基である。杭列1117は、そのうち北部の東西方向の一群に属し、そこで検出した3条のうちの中央に位置する杭列である。径が5cm以下の細目の丸木杭を主として、1条、直線状に、0.1m前後の間隔をとって打設する。杭列の方向は、北から68° 西へ振れる。杭列西端部から南方へ、割木を材とする杭が打たれるが、間隔が広く、少数であることから、杭列とすべきか判断できない。杭列の位置は、下位流路1043を埋積する砂層上である。

本位遺構に関する遺物を確認することはできなかった。

杭列1118 (図99)

調査南区、G26-0113区に位置する。溝427開口部に打設される杭群のうちの1基である。杭列1118は、上述杭列1117と同じ北部の一群に属し、3条あるうちの南側の杭列である。杭は、径10cm前後の丸木材、割木材を用い、0.2m前後の間隔をとって1条東西方向へ直線状に打設されている。検出した延長は2.2m、その方向は北から79° 東へ振れる。地山礫層（粘土部）から、流路1043埋積砂層にかかる位置にある。杭の一部は、下位砂層中の板材を打ち抜いている。

本遺構に関する遺物を確認することはできなかった。

矢板列1119 (図108・109)

拡張3区、G26-91区、17層下面で検出した。間隔を空けて矢板を1条打設する。延長3.7m程を確認し

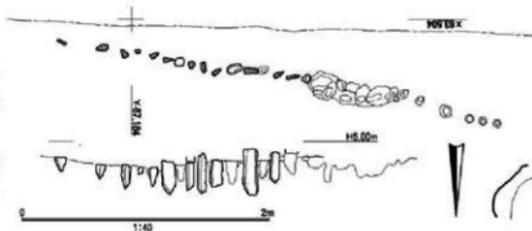


図108 杭列1119 (1:40)



図109 杭列1119 (北から)

た。矢板の方向は北から79° 西へ振れている。

17層堆積時に 削剥され、埋積されたものか、矢板列の西部の大部分と、その他部位の一部の矢板は、圧痕、若しくは掘形の痕跡に、灰黄色砂が充した状態で遺存している。矢板には、尖端部の削り出しが部分的なものが混じり、矢板列1093ほかの小規模のものとはやや異なった印象を受ける。

矢板の根入れ深さは、遺構中央部の矢板で確認面から0.3m、東端部では0.1mが遺存する。

本遺構に関係する遺物を検出することはできなかった。

杭列1120 (図105)

拡張3区、G26-81区、17層下面で検出した。流路1114確認面から埋積層掘り下げに伴って検出した杭列である。杭は列としての配列は確認できず、南北方向に帯状の範囲に散布する。杭の材は径が5cmから10cm前後の丸木を利用する。調査区内で確認した延長7.8m、方向は北から79° 東へ振れる。

平面分布範囲と確認深度の分布から、流路1214の東岸と関連をもっているように観察される。杭の検出深度は標高4.7mから4.1mの間にあり、根入れ深さは標高4.2mから3.7mの間、極端に深い1例は、標高3.3mの位置まで打ち込んでいる。杭の立面形を南からみてもと、ほぼ流路1114の東岸の立ち上がりに沿うような分布をしており、杭の平面分布とよく一致する。

調査中、本杭列と関係づけられる遺物を確認することはできなかった。

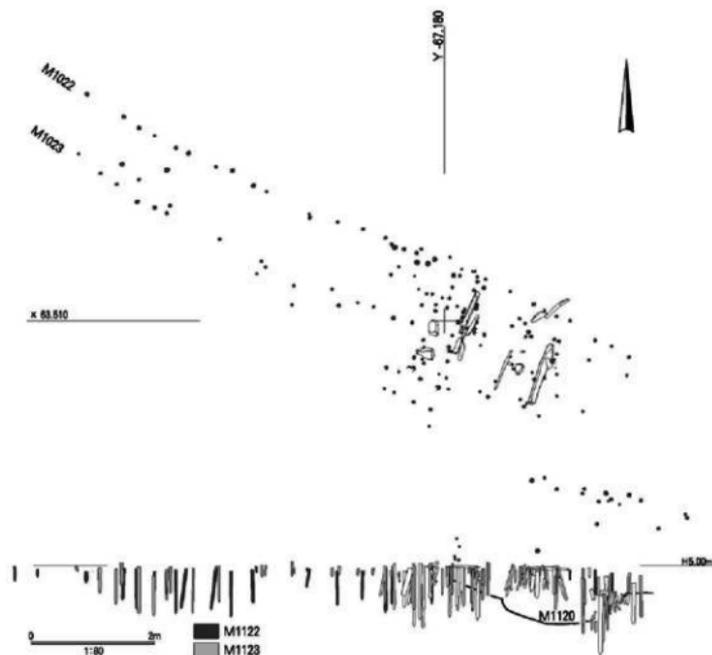


図110 杭列1122・1123 (1:80)

杭列1122 (図110)

拡張3区、G26-92に位置する。17層下面、15層上面で検出した。両層の間に暗褐色砂層が挟まれており、これが13層にあたるものか。ここでは杭列が2条平行しており、杭列1122はそのうちの、北側の杭列である。杭には径10cm以下の丸木材を用い、間隔を空けて、1条打設している。東部分では、別の杭列と交差するものか、G26-9211区中心とした位置では平面分布が乱れる。杭列は流路1114埋積土上へも続き、調査区外へ伸びる。調査区内で確認した延長は9.8mである。杭列の方向は北から65°西へ振れる。

調査中、本杭列と関係づけられる遺物を確認することはできなかった。

杭列1123 (図110)

拡張3区、G26-92に位置する。17層下面、15層上面で検出した。上述の杭列1122に平行して、南側に位置する。杭列1122と同様の杭を用い、同様に打設しているが、やや疎らな部分がある。東部では、杭の配列が散漫となる。調査区内で確認した延長は、9.0m、杭列の方向は北から63°西へ振れる。

調査中、本杭列と関係づけられる遺物を確認することはできなかった。

3. 溝427

(1) 溝427の調査

溝427 (図111～119)

調査区南端付近から、調査区北辺に抜ける溝である。今宿五郎江遺跡の位置する西側台地とその東に広がる谷部との境界部を選んで掘削するように、緩く蛇行している。今宿五郎江第9次調査地点(以下、第9次地点)では、一部地形を掘り割るように掘削が行われていたが、調査南半部の南部分を除き、略地形に沿った位置を選んでいるようである。第9次地点では、溝427は、西から東へ、やや北へ振れた方向へ続き、調査区東端部で大きく北へ振れて、今宿五郎江第10次地点(以下、第10次地点)の南端部へと続いている。第10次地点では、略北方向へ直進した後、蛇行しながらやや東へ振れた北方向へと続く。この間検出した溝427は、第9次地点での東西端間の距離約90m、第10次地点の南北端間の距離約110m程の範囲である。

第10次地点では、溝427の確認面は、南端部で標高5.6m、北端部では標高4.9mの位置にある。溝の幅は調査南区のG35-10区で3.0m、断面形は逆台形状で、東岸部では段をもち、溝底の幅1.5mを測る。調査中央区のG26-06区では、幅2.8m、断面は逆台形状で、溝底の幅2.0m、調査北区のG26-90区で3.8m、断面逆台形状で溝底の幅2.5mを測る。

また、それぞれの位置での深さと底面の標高は、G35-10区で深さ0.8m、底面の標高4.8m、以下、G26-06区で深さ0.8m、底面の標高4.2m、G26-90区で深さ0.9m、底面の標高3.9mである。このうち、底面の標高を縦断方向にみていくと、溝底は北へ向かい一様な勾配をもつのではなく、調査区北区で緩い勾配を示し、調査中央区から調査南区の北部分では、殆ど勾配がなく、広い範囲に凹地を形成していることがわかる。一方、調査南区の特に南半部では、部分的に段を成すようにして比較的急な勾配を示し、調査南区G26-03区の溝底面と、調査区南壁際のG35-01区溝底面との比高は0.8m以上ある。ちなみに第9次地点の溝427の溝底は、標高5.0mよりやや高い位置にあるが、東西両端部でも殆ど高度差を示さない。つまり、第9次地点の東端から第10次地点の南半部にかけての距離にして50mの間で最大1m程の比高をもつ。この状況は、この位置での上位の包含層5b層の示す河原状の遺物堆積状況の分布とよく一致するものであり、現況地形とも一致している。

溝427の土層 多くの部分は砂、有機物を含む砂混じり、泥炭質粘土により構成される。最上部層は16層とする黒褐色粘土層である。溝427の埋没の最終段階で、浅い流路状の凹地に堆積する。部分的に深い部分があり、木質の資料がよく残る。灰色から黒色までの色調の変化があり、夾雑物のごく少ない部位から、粒状の植物遺体を含む部位までがある。後者は、深みの下位層に顕著である。

中位層は、18層が主となる。灰褐色あるいは灰黄褐色砂層のレンズ状堆積の間に、黒褐色、粗砂混じりの粘土を挟む。部位より両者の比に大小の変化がある。本層下部から下位層にかけて、木質遺物の出土が顕著である。

下位層の主体を占めるのは、22層とする泥炭質粘土で構成される層である。新鮮な断面では黒褐色を呈すが、空気中では短時間のうちに黒化する。層中には粗砂を含み、植物遺体、特にシダ、樹枝等の細片を顕著に含む。上層下部から本層上部にかけて木質遺物を多く出土する。

出土遺物 溝427出土土器の分量は、計量によると、総量6,291kg、うち16層出土とするもの1,896kg、18層出土とするもの948kg、22層とするもの183kgである。また、25層とするもの320kgである。その他は、21層、23層出土ほかの出土である。土器の大半は弥生時代後期の資料である、これに中期、終末期資料が加わる層がある。また、部分的に土器器の出土があった。石器類では、石錘を初めとした資料の出土があった。資料の詳細については、現在整理中であり、改めて報告する。



図111 溝427上部遺物出土状況
(調査区中央部、北から)



図112 溝427完掘 (調査区中央部、北から)



圖116 溝427土層 (G26-98北面)



圖117 溝427土層 (G36-06北面)



圖118 溝427土層 (G26-02北面)



圖119 溝427土層 (G35-10西面)

(2) 溝427-16層中検出遺構

流路1016 (図120・121)

調査中央区、G26-9645区に位置する。5b層下で検出したが、同種の遺構の位置から、本項で報告する。

溝427肩部を一部掘り込む土壌で、平面形は不整な楕円形状、断面は逆台形状を呈す。長さ1.4m、幅1.2m、深さは0.5mを測る。

覆土は黒褐色粘土である。上部では粗砂、細礫を含む。底面近くは粗砂混じりとなる。覆土の中心位以下では一様で、堅果類の種子が遺存している。上方では散漫にみられるのみであるが、底部近くでは塊となって集中出土する部分がある。

出土遺物 (図122、表22) 遺物は覆土中からコ

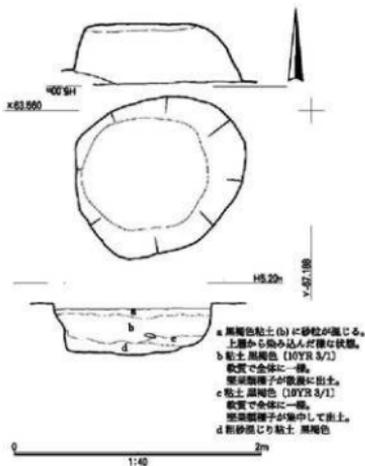


図120 土壌1016 (1:40)



図121 土壌1016土層 (南から)

ンテナ1箱ほどの分量出土した。大半は弥生土器細片資料である。終末期までの弥生土器を含む。

図示する遺物は、すべて細片資料である。

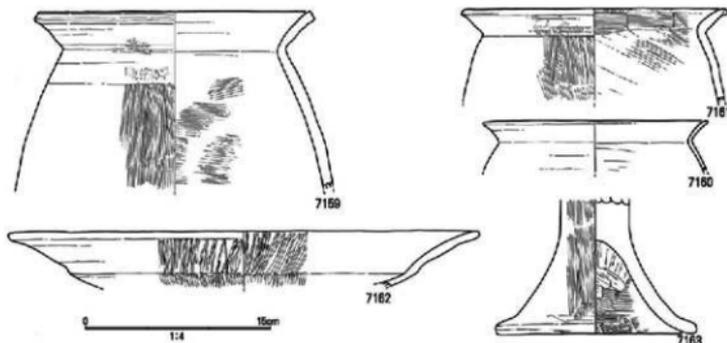


図122 土壌1016出土遺物 (1:4)

遺物 番号	遺物番号	出土位置 遺物種別	遺物種類(年代)		計測期間	口径/高さ	底径/底厚	体高/深さ	計測者番号	遺年(遺・出)
			種類	時期						
7159	1016	G26-	赤生土器 甕 (弥生/晩末期)	復原	218					口縁部小破片
			外面は黒色化 内面はやわらかい黄赤(10R7.5/5赤昏、外面は)	胎土: 粗砂多く含む。 器表: 内面はやわらかい黄赤(10R7.5/5赤昏、外面は)	外面: 縦刷毛目調整→口縁部横溝で調整(口縁付近強い溝で調整) 内面: 横刷毛目調整→口縁部を中心に横溝で調整					
7180	1016	G26-	赤生土器 薄壁 (弥生/晩末)	復原	180					口縁部破片、やや厚紙
			胎土: 粗砂多く含む(黒母含む) 器表: やわらかい黄赤 (8.5Y R7.6加薄褐色)	外面: 横溝で調整 内面: 口縁部付近横溝で調整、割部削り調整のち横溝で調整						
7161	1016	G26-	赤生土器 甕 (弥生/晩期)	復原	208					口縁部破片
			胎土: 砂粒定量含むが粗砂少 器表: 暗い灰色 (N4褐色)	外面: 縦刷毛目調整→口縁部付近中心に横溝で調整 内面: 横刷毛目調整→口縁部付近と割部を中心に横溝で調整						
7162	1016	G26-	赤生土器 高坏 (弥生/晩末期)	復原	376					破片
			胎土: 砂粒定量含む(黒母含む) 器表: 外面は明るい黄赤(10R7.5/9黄褐色) 内面は黄赤みの灰色 5 YR6/1 茶風	外面: 横溝で調整→縦溝磨き調整 内面: 横溝で調整→縦溝磨き調整 坏外面上部の磨き調整は縦溝文磨き風						
7163	1016		赤生土器 高坏 (弥生/晩期)	復原	160					脚部小破片
			胎土: 粗砂多く含む 器表: やわらかい黄赤 (10 R7.5/6赤昏)							外面: 縦刷毛目調整→脚部付近溝で調整 内面: 縦刷毛目調整→上部磨り調整状態で調整

表22 土壌1016出土遺物観察表

土壌1039 (図123・124)

調査南区、G26-0144区に位置する。溝427上部の16層掘り下げ中検出した土壌である。平面形は不整な円形状、断面形は逆台形状を呈す。壁の一部は壊れている。径は0.9m、深さは0.4mを測る。覆土は、黒褐色(10YR2/1)の粘土である。全体に一様であるが、中位に灰の薄層を挟んでいる。

出土遺物 (図125、表23・24) 遺物は覆土中から出土したほかに、下半部では纏まりをもって投入されたような状態で出土した。総量でコンテナ1箱ほどの分量である。完形完存する資料を含む。古墳時代中期までの土器が主体となっている。壺、鉢、甕、高坏といった器形が含まれている。

小形丸底壺(5003・5004)のほか、鉢5002、壺5009、台付甕5008が、完形か、完形に近い形で出土した。これらの調整は概して、これらの多くの器表には黒色の付着物が残る。鉢5002は、内外面に黒色煤状の付着物が残る。外面は片側に特に顕著である。口縁部直下の内面には黒色の付着物が帯状に残り、底面にも顕著である。台付甕5008では、脚部には、付着物が残らないほかは外面の全体に斑状の煤状付着物が残る。

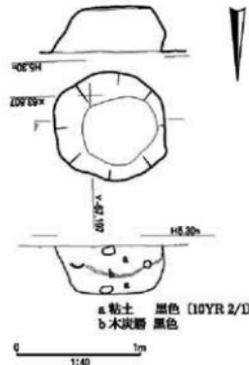


図123 土壌1039 (1:40)



図124 土壌1039 (東から)



図125 土埴1039出土遺物 (1:4)

遺物番号	遺物番号	出土位置	遺物類別(年代)	計測規模	口径/高さ	底径/底厚	器底/器口	計測箇所	遺存(量・状態)
遺物番号	遺物記		材質(粘土・磁土・灰)					形状・特徴	
6001	1039		土師器 高杯(古墳/中期)	実測		96		略光形	胴部、ほぼ完存、厚減。
			胎土:粗砂、膠礫含む 器表:くすんだ黄赤(10Y R5.5/強中性色)				外面:刷毛目調整→口頸部を以て調整 内面:柱部を横筋削り調整、器底を横筋で調整。		
6002	1039		土師器 鉢(古墳/中期)	実測	142	78	64	略光形	
		内外面黒灰、底部赤灰(内面口縁部直下に黒化部が斜状に透)	胎土:砂粒多いが粗砂は少。 器表:明るい灰みの赤みをおびた黄(10Y R8.5/薄赤)				外面:胎押さえ板→器で調整 内面:刷毛目調整→器で調整		
6003	1039		土師器 手形碗形(古墳/中期)	実測	64		66	完形	
		小型丸底形	胎土:粗砂多く含む 器表:明るい灰みの赤みをおびた黄(10Y R8.5/薄赤)				内外面胎押さえ板、器で調整。		
6004	1039		土師器 壺(古墳/中期)	実測	82		69	略光形	
		小型丸底壺	胎土:砂粒多く含む。器底含む。 器表:うすい黄赤(10Y R.5/亜赤色)				外面:刷毛目調整→器で調整 内面:器で調整		
6005	1039		土師器 支脚	実測	80	86	94	完形	
		香形支脚。混入品か。	胎土:粗砂多く含む。 器表:やわらかい黄赤(8.5Y R7.6/加褐色)				外面:胎押さえ板、器で調整 内面:器で調整(口縁による?)		
6006	1039		土師器 甕(古墳/中期)	復元	148			口縁部の大破片	
			胎土:粗砂含む 器表:うすい黄赤(5Y R.5/肌色)				外面:刷毛目調整→口頸部を中心に横筋で調整 内面:横筋毛目調整→口頸部を横筋で調整、胴部を横筋削り調整		
6007	1039		土師器 壺(古墳/中期)	復元	90			口縁部破片	
			胎土:砂粒多く含む 器表:明るい灰みの赤みをおびた黄(10Y R8.5/薄赤)				外面:器で調整 内面:口頸部横筋で調整、胴部斜削り調整		
6008	1039		土師器 甕(古墳/中期)	実測	105	83	128	略光形	
		脚合を有する竜留系甕。身部外面と口縁の内面に横筋。脚部と身部の一部が破損により赤灰。	胎土:細砂、粗砂を含む。 器表:濃い赤味の黄(10Y R 6/7.5 黄土色)				外面:刷毛目調整→口縁部と脚部付近を中心に横筋で調整 内面:口頸部横筋で調整、胴部斜削り調整、器底横筋		
6009	1039		土師器 壺(古墳/中期)	実測	116		141	完形	
		口縁部に粘土懸垂目がよく残る。 胴外面に黒色付着物(顔料)か。底部付近が一次焼成により赤灰	胎土:砂粒多い。器底を多く含む。 器表:やわらかい黄赤(2.5Y R7.5/5洗灰)				外面:器で調整 内面:刷毛目削り調整→器で調整		

表23 土埴1039出土遺物観察表 1

遺物 番号	遺物番号	出土位置 遺物時代	遺物種別(年代)	材質(土質・産地・産別)	計測種類	口径/長さ	底径/幅径	体高/高さ	計測箇所	備考(注・状態)
7185	1039	布留式系、外面環付者。	土師器 甕 (古墳/中期)	復原	160					口縁部破片、外面やや磨滅
			器表: ごくうすい赤みの黄 (10Y R8.5/3薄赤色) 胎土: 砂粒多いが、粗砂は少							外面: 装飾で調整 内面: 口縁部破損で調整、胴部磨削り調整 口縁端部は内傾する肥厚面
7186	1039	布留式系	土師器 甕 (古墳/中期)	復原	230					口縁部破片
			胎土: 砂粒多く含むが粗砂少。雲母を含む 器表: 明るい灰みの赤みをおびた黄 (10Y R8.5/薄赤)							内外面装飾で調整
7187	1039		土師器 甕 (古墳/中期)	実測						
			胎土: 砂粒少量 器表: 外面は薄赤色、内面は薄黒色							外面: 磨き 内面: 磨で調整
7188	1039		土師器 高杯 (古墳/中期)	復原	118					脚柱部、ほぼ完存、磨滅
			胎土: 粗砂多く含む。雲母含む。 器表: うすい黄赤 (5Y R6.5 黒色)							内外面調整不明

表24 土埴1039出土遺物観察表2

遺構1047 (図126)

調査南区、G26-0152区を中心とした範囲に位置する。ここで黒色粘土層中に土器が一括投棄されたような状態で出土した。この出土範囲について遺構1047として記録した。出土土器は、完形の状態では投棄され、その場で圧潰したように細片化した状態で出土した。掘り込みなどは確認できなかった。また、出土範囲は限られたものであった。この位置は、先に報告した流路1044と重複しており、本遺構出土土器はそれの上部黒色粘土層からの出土となる。この層は、溝427の凹地への堆積層とみていたが、溝427開口部に沿い、東方へ分布を広げているように観察されて、下流側の16層とは、別の層ともみえる。流路1044は、溝427の18層の一部あるいは前部を削り取って堆積しており、その上位の16層も削滅されてしまった可能性がある。遺構1047を含む黒色粘土層は、調査時16層とした粘土層とは別の層として取り扱っておく。また、粘土層の性状についても、前者は漆黒、強粘質の部分があり、後者はやや灰色みがあり、シルト質である点も留意される。

出土遺物 (図127・128、表25・26) 上記の様な出土状態での遺物出土量は、コンテナ2箱ほどの分量である。土器には、古墳時代前期までの遺物を含む。出土状態から完形かそれに近い資料を予想したが、器表の荒れが著しいなど遺存状態が不良であり、また、小形で薄い器壁の資料が含まれているなど、全体を復原できる資料は少数である。



図126 遺構1047 (東から)

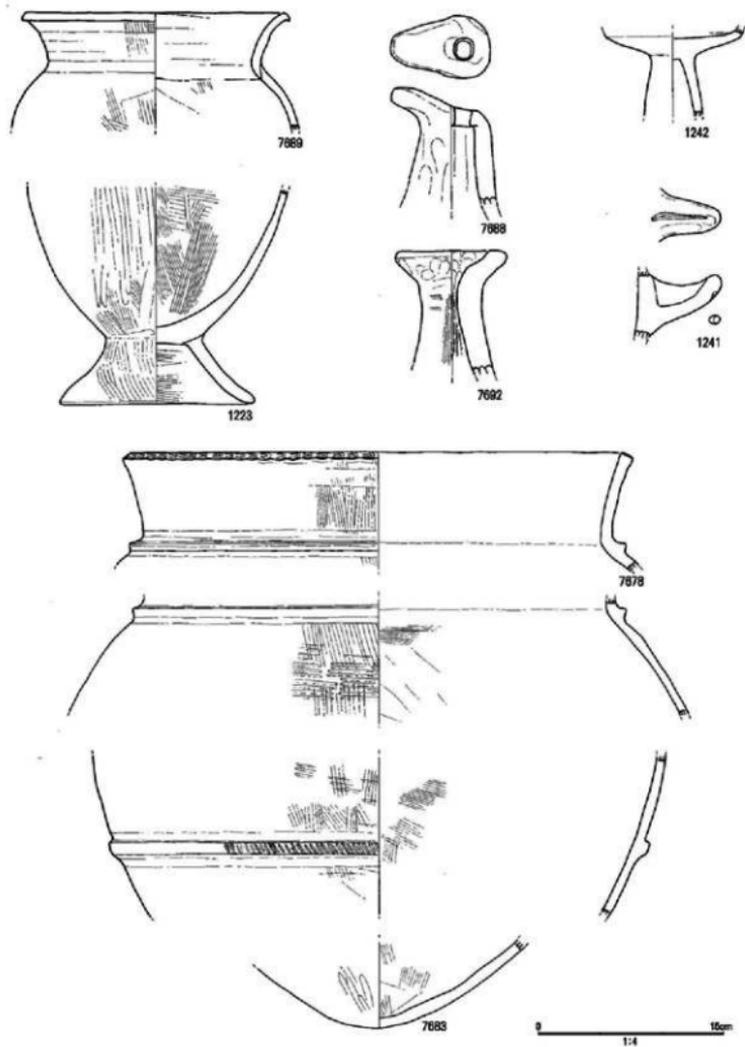


圖127 濠洲1047出土遺物1 (1:4)

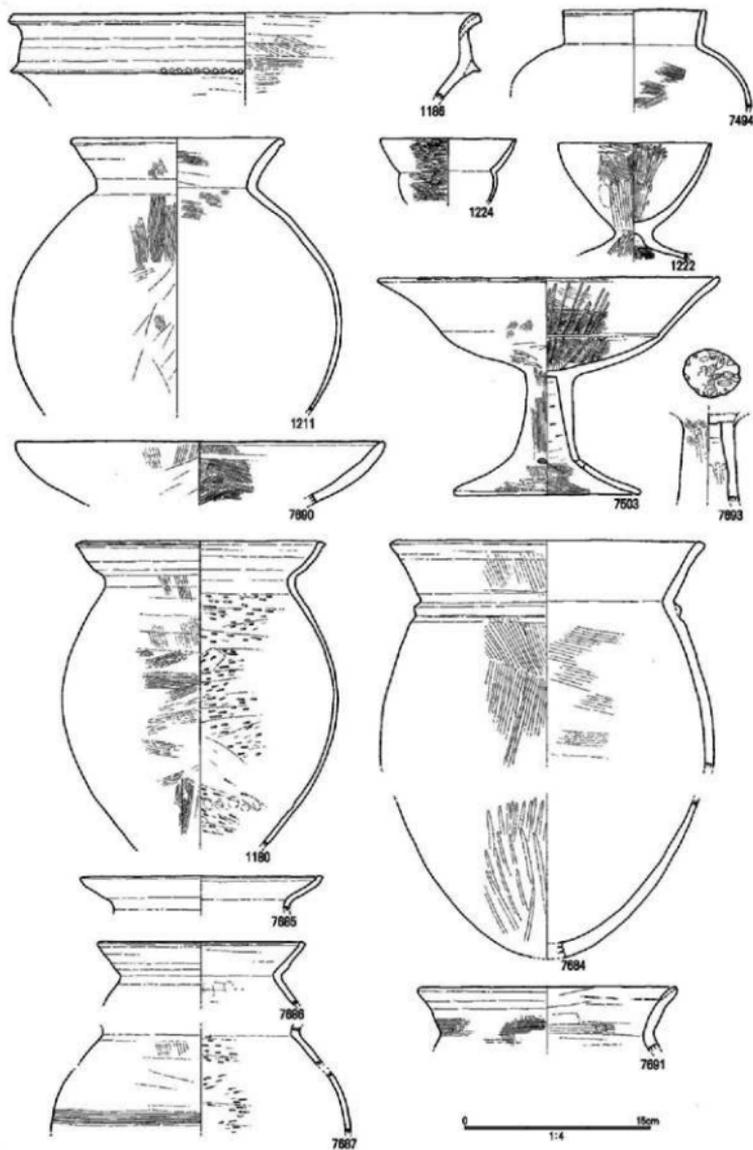


圖128 遺跡1047出土遺物2 (1:4)

遺物番号	出土位置	器物種類 (JPC)	計測位置	口径/径2	底径/幅径	胎厚/高さ	計測器番号	備考 (注・写真)
遺物番号	遺物部位	材質 (土質・産地)					成形・機能	
1180	1047 G36-0152	土師器 甕 (古墳/前期)	復原	192				
	布留式系	胎土: 砂粒多いが、粗砂は少ない。 器表: うすい黄赤 (5YR8/6 肌色)			外面: 刷毛目調整→口縁部狭帯で調整、胴下部は刷毛目状の條で調整 内面: 口縁部狭帯で調整、胴部底面調整。底部付近に指押さえ痕。 口縁部は外方へ突出気味の外面。			
1186	1047 G36-0152	弥生土器 甕 (古墳初?)	復原	376				口縁部細片
		胎土: 粗砂多く含む 器表: うすい黄赤 (5YR8/6 肌色)			外面: 横帯で調整。口縁下部等に列点文。 内面: 横刷毛目調整→横帯で調整			
1211	1047 G36-0152	土師器 甕 (古墳/前期)	復原	168				口縁部小破片、厚減箇所
		胎土: 粗砂多く含む 器表: うすい黄赤 (5YR8/6 肌色)			外面: 刷毛目調整→口縁部狭帯で調整、胴下部狭帯で調整。 内面: 横刷毛目調整→横帯で調整、胴部は横刷毛目調整とみえる。			
1222	1047 G36-0152	弥生土器 紙脚杯 (弥生/終末)	実測	122				略定形、やや磨滅。
	杯部が鉢形、口縁部を一部欠くので、片口の可能性がある。	胎土: 粗砂多く含む 器表: 赤褐色			外面: 横刷毛目調整→指押さえ調整 内面: 杯部は刷毛目調整→横帯調整、脚部は横刷毛目調整→上部を横帯で調整。			
1223	1047 G36-0152	弥生土器 甕又は甕 (弥生/終末)	実測	155				胴上部、やや磨滅。
	R768と同一個体か	胎土: 粗砂多く含む 器表: 赤褐色			外面: 横刷毛目調整→胴下部狭帯で調整。脚部の刷毛目調整は粗目で横帯調整は横帯で調整 内面: 調整は横刷毛目調整→横帯調整、脚部は横刷毛目調整→部分的に横帯調整			
1224	1047 G36-0152	土師器 小形丸底甕 (古墳/前期)	復原	110				口縁部細片
	複製B種土器	胎土: 砂粒少量含む。シャモット含む。 器表: やわらかい黄赤6.5Y7/6無顔色			外面: 刷毛目調整→横帯調整 内面: 不明			
1241	1047 G36-0142	土師器 甕 (古墳/中期)	実測					厚減。
	把手等。瓶入?	胎土: 粗砂多く含む 器表: 赤褐色			内外面調整 上面に切り込みがあり、先端付近下面に貫通しない穿孔がある。			
1242	1047 G36-0142	土師器 高杯 (古墳/中期)	復原					厚減箇所
	瓶入	胎土: 粗砂多く含む 器表: うすい黄赤 (5YR8/6 肌色)			内外面調整不明			
1494	1047 G36-0153	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	実測	102				口縁部、厚減箇所
	複製品	胎土: 砂粒ほとんど含まない 器表: うすい黄赤 (5YR8/6 肌色)			外面: 刷毛目の磨きか 内面: 横刷毛目調整、横帯で調整			
7503	1047 G36-0142	弥生土器 高杯 (弥生/終末)	復原	273	150	177		杯部の半ば欠。杯部外周部
		胎土: 砂粒多く含む 器表: くすんだ黄赤 (9R6/7.5洗末)			外面: 刷毛目調整→横帯調整厚減のため器文の有無不明。胴端部に赤形の痕跡、脚部の円形透孔は3箇所。 内面: 杯部は刷毛目調整→上部を中心に横帯調整、脚部は横帯調整、杯部は刷毛目→内面に器文。			
7683	1047	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	復原					
	R7678と同一個体。	胎土: 色調ともにR7678と同			外面: 叩き→横刷毛目調整→胴下部磨き調整状の條で調整胴部に三角尖突、胴部下位に刷毛目のある扁平尖突帯。 内面: 刷毛目調整→横帯調整			
7684	1047 G36-0152	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	復原	122				内面厚減
	外面に指状の付着物、内底面付近にお揚げ状の付着物。	胎土: 粗砂多く含む 器表: 肌色→赤褐色			外面: 横刷毛目調整→口縁部付近と頸部付近を横帯で調整、胴下部を横帯で調整。胴部に三角尖突			
7685	1047 G36-015 3	土師器 甕 (古墳/前期)	復原	190				口縁部細片、厚減箇所
	布留式系	胎土: 砂粒多く含む 器表: ごくうすい赤みの黄 (10YR8.5/3薄赤色)			内外面: 横帯調整 口縁部: 外傾面。			
7686	1047 G36-0152	土師器 甕 (古墳/前期)	復原	160				口縁部細片
	布留式系	胎土: 砂粒多いが粗砂は少。角閃石や雲母を含む 器表: 赤褐色			外面: 横帯調整 内面: 口縁部狭帯で調整、胴部底面調整。胴部下に指押さえ痕。 口縁部: 内側に突出する外傾面			
7687	1047 G36-0142	土師器 甕 (古墳/前期)						胴部径160 胴部細片
	布留式系	胎土: 砂粒多いが、粗砂は少ない。角閃石や雲母を含む。			外面: 刷毛目調整→横帯調整。胴中に4条の条線 内面: 横帯調整			

表25 遺構1047出土土物観察表1

遺物 番号	遺物番号	出土位置 遺物内記	遺物種類(年代)	材質(胎土・焼成・釉)	計測種類	口径/高さ	底径/幅	底厚/深さ	計測番号	遺存(復・状態)
7688	1047	G26-0153	弥生土器 支脚 (弥生/終末期)	実測	77					脚部を欠く。厚減顯著
			胎土: 粗砂多く含む 器表: 赤褐色							外面: 釉で調整 内面: 釉で調整
7689	1047	G26-0142	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	復原	208					口縁厚断片、内面厚減
		R1223と同一個体 か	胎土: 粗砂多く含む 器表: 赤褐色							外面: 刷毛目調整→口縁部を中心に換装で調整 内面: 刷毛目調整→換装で調整
7690	1047	G26-0152	弥生土器 鉢又は高坏	復原	296					断片
			胎土: 粗砂多く含む(器底含む) 器表: やわらかい黄赤 (6.5YR7/6加褐色)							外面: 刷毛目調整→換装で調整 内面: 刷毛目調整→換装で調整 口縁部内面に粘土結晶目を残す
7691	1047	G26-0152	土師器 甕 (古墳中期?)	復原	204					口縁部小断片
		内外面輝付	胎土: 粗砂多く含む 器表: 暗い灰みの赤みをおびた黄 (7YR4/3黄粘土)							外面: 刷毛目調整→換装で調整、頸部付近は刷毛目状。 内面: 刷毛目調整→換装で調整 口縁部内面に粘土結晶目を残す
7692	1047	G26-0153	弥生土器 椀合 (弥生/終末)	実測	75					脚部を欠く
			胎土: 粗砂多く含む。器底含む。 器表: うすい黄赤 (5YR8/5黄赤)							外面: 受け部を指押さえ痕、換装で調整、脚部を刷毛目 内面: 換装で調整(弱い泡刷り調整状)。指押さえ痕。
7693	1047	G26-0152	弥生土器 高坏 (弥生/終末)	実測						
			胎土: 砂粒少ない粗砂含む 器表: くすんだ黄赤							外面: 刷毛目調整→換装も調整 内面: 換装で調整(弱い泡刷り調整状)。指押さえ痕。 環との接合面に刺突や切り込みを遺す。

表26 遺構1047出土遺物観察表2

土壇1049 (図129・130)

調査中央区、G26-0332区に位置する。16層掘り下げ時、下位の18層上面で検出した。18層の砂層に掘り込んだ部分が遺存する。平面形が楕円形状の土壇である。断面は逆台形状を呈す。長さ0.6m、幅0.4m、深さは0.2mを測る。覆土は黒褐色粘土で、全体に一樣である。

覆土は16層と同質であり、16層中からか、あるいは上位からの掘り込みが考えられる。

出土遺物 覆土中から、少量の遺物が散漫に出土した。細片の土器資料である。

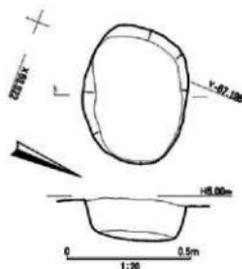


図129 土壇1049 (1:20)

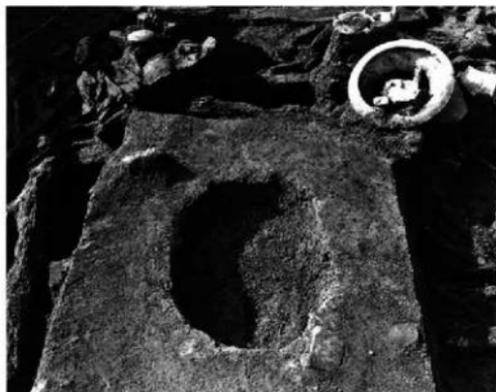


図130 土壇1049 (西から)

土壌1054 (図133)

調査南区、G26-0153区に位置する。溝427-16層の掘り下げ時、土層断面の観察から、16層が一段落ち込む凹地を検出した。断面での確認であり、平面形状などはわからなかったが、調査時、木質遺物の集中する部位があり、その範囲が当該遺構であった可能性がある。断面での観察では、横断面は逆台形状を呈し、幅は0.7m、深さは0.3mほどとなる。

確認できた部分では、樹枝等木質が密に埋没する中に、砧、槽、槌等、木器がある程度まとまって出土した。

出土遺物 (図131、表27) 上記のほか、覆土中から土器が、コンテナ1/4程の分量出土した。細片資料のほか壺口縁部大破片資料が含まれる。

(3) 溝427-16層下検出遺構

断面の観察、検出状況から溝427-16層中あるいは、より上位からの掘り込みとは考えられず、16層生成以前に、溝427中に掘り込まれたとみられる遺構である。

土壌1061 (図132・134)

調査中央区、G26-0534区に位置し、溝427-16

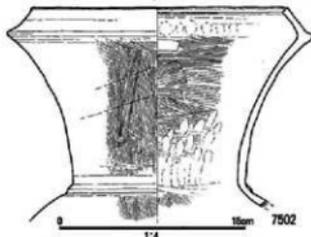


図131 土壌1054出土遺物 (1:4)

遺物 番号	遺物番号	出土遺物 遺物名称	遺物種類 (時代)			口径/長さ	底径/幅径	器底/高さ	計測番号	遺存 (量・状態)
			材質	出土	形状・用途					
7502	1064	G26-3	赤生土器 壺	弥生/終末期	実器	206				上半部
			胎土: 砂粒多く含む。 器表: 明るい灰みの黄2SY7.5 / 2砂色	外面: 粗刷毛目調整→粗刷毛目調整→口縁部と頸部付近を中心に検査で調整 内面: 横方向主体粗刷毛目調整→口縁部と頸部付近を中心に検査で調整。口縁下部と頸部に指押さへ痕。 頸部に扁平な三角突唇。						
7696	1064	赤生土器 壺 (弥生/中期)			66					底部
		乱入か。	胎土: 砂粒多いが粗砂は少ない。 器表: やわらかい赤みの黄 (9YR7.5A)							外面: 縦刷毛目調整→底部付近で調整 内面: 磨で調整。底部付近に指押さへ痕。

表27 土壌1054出土遺物観察表

層下面で検出した土壌である。平面形は、不整な長方形形状を呈し、断面形は逆台形状を呈す。長さ1.6m、幅1.4m、深さは東辺部で0.3mを測る。16層掘り下げ時、16層中の遺物が分布する直下で土壌肩部を検出したことで、16層下の遺構と判断した。溝427の東岸部を一部掘り込んでいる。覆土は黒褐色の粘質土である。覆土中位から矢板が2枚重なって出土した。

出土遺物 (図135、表28) 上記木製品のほか、覆土中から散漫遺物が出土した。大半は土器細片資料であり、弥生時代終末期資料が主体となる。壺7700のほかは何れも細片資料である壺7701・7702とともに口縁部までの外面に煤状の附着物が顕著に残る。

矢板2408は長さ99cm、矢板2409は長さ75cmを測る。幅は15cm前後で、一端の両縁を削り、尖端部を作出する。1:40



図132 土壌1061 (1:40)



図133 土塚1064 (北から)



図134 土塚1061 (東から)

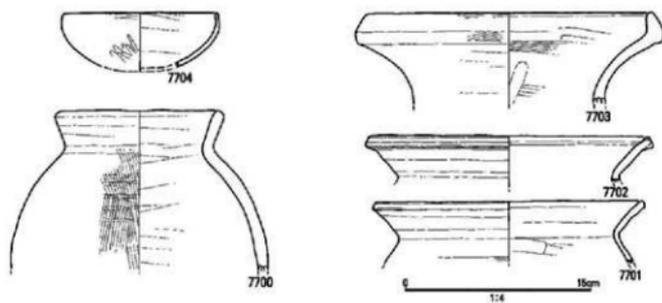


図135 土塚1061出土遺物 (1:4)

遺物 番号	発掘番号	出土位置	遺物種類 (JPC)	計測位置	口徑/長さ	底径/幅	厚み/高さ	計測担当者	保存 (庫・枚数)
7700	1061	G96- M1061 上面出土。	弥生土器 甕	復原	125			成野・藤橋	口縁部大破片
			胎土：粗砂多く含む。 器表：やわらかい赤みの黄 (10 YR7.5/4.5枯色)						外面：叩き→縦溝毛目調整→口縁部破損で調整 内面：煮で調整
7701	1061	G96- 器壁が比較的薄い。 R 1993+ 2397 接合	土師器 甕 (古墳/初)	復原	218				口縁部破片
			胎土：砂粒多いが、粗砂は少。器中や角閃石を含む。 器表：外面黒色、内面はうすい黄赤 (5YR8/5黒色)						外面：縦溝毛目調整→破損で調整 内面：平滑な煮で調整。
7702	1061	G96-	弥生土器 甕 (弥生/終末期)	復原	224				口縁部破片
			胎土：粗砂多く含む。 器表：外面黒化、内面はうすい黄赤 (5YR8/5黒色)						内外面：横溝で調整
7703	1061	G96-	弥生土器 甕 (弥生/後期)	復原	228				口縁部小破片
			胎土：粗砂多く含む。 器表：やわらかい黄赤 (2.5Y R7.5 /6洗赫)						外面：刷毛目調整→煮で調整。頸部は煎磨も調整の可能性ある。 内面：刷毛目調整→煮で調整
7704	1061	G96- 二次的な被熱により内外面破付 着。	弥生土器 鉢 (弥生/終末期)	復原	124				口縁部破片、やや磨滅。
			胎土：砂粒多いが、粗砂は少。雲母を含む。 器表：やわらかい黄赤 (6.5Y R7 /6洗赫色)						外面：磨き 内面：横溝で調整

表28 土壌1061出土遺物観察表

土壌1062 (図136・137・138)

調査中央区、G26-0621区に位置し、溝427-16層下面で検出した土壌である。土壌1061と同様、溝427東岸に寄った位置にある。平面形は、不整な長方形形状、断面形は逆合形状を呈すが、土層断面の観察からすると上端部で大きく外方に開く形状であったことが窺われる。長さ1.7m、幅1.3mを測る、深さは東辺部で0.3mを測る。土層断面の観察から、16層下の遺構と判断した。溝427の東岸部を一部掘り込んでいる。覆土は均質、緻密な黒褐色の粘土である。

覆土中位から矢板が2枚重なって出土した。

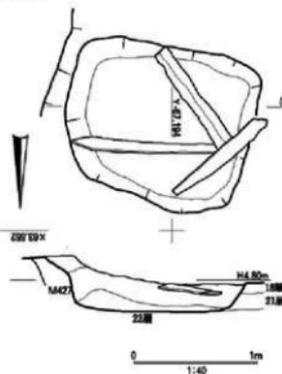


図136 土壌1062 (1:40)



図137 土壌1062 (北东部、東から)



図138 土坑1062(断面、北から)

出土遺物(図139、表29) 覆土中位から矢板を含む木質遺物が出土したほか覆土の主に上部から散漫に遺物が出土した。

土器はいずれも細片資料で、弥生時代終末期の資料である。7705・7706は甕口縁部資料である。甕7706の内面は黒色の付着物が残る。7707は壺口縁部で、器表の磨滅が顕著である。7708は甕底部資料である。

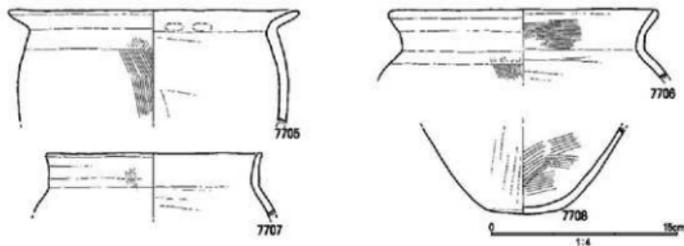


図139 土坑1062出土遺物(1:4)

遺物番号	遺物番号	出土位置	遺物種別(年代)	計測機数	口径/高さ	底径/底高	器底/高さ	計測番号	遺存(遺心)
7705	1062	C26-	弥生土器 甕(弥生/後期)	復原	222				口縁部細片
			胎土: 砂粒多いが粗砂は少。 器表: やわらかい赤みの黄(9YR7.5/4砥粉色)						外面: 縦刷毛目調整→口縁部横割で調整 内面: 割で調整。器底上に指押さえ筋。
7706	1062	C26-	弥生土器 甕(弥生/終末期)	復原	212				口縁部細片
			胎土: 砂粒多い。雲母含む。 器表: 内外面黒化。ベースは明るい灰みの黄赤(4YR7/4薄茶)						外面: 縦刷毛目調整→口縁部横割で調整 内面: 横刷毛目調整→横割で調整
7707	1062	C26-	弥生土器 壺(弥生/終末期)	復原	170				口縁部細片、厚減顯著
			胎土: 粗砂多含む 器表: 赤褐色						外面: 縦刷毛目調整→横割で調整 内面: 横割で調整
7708	1062	C26-	弥生土器 甕(弥生/終末期)						底部
			胎土: 粗砂多含む						外面: 割で調整

表29 土坑1062出土遺物観察表

(4) 溝427-22層中検出遺構

溝427下部層である22層中から溝427底部にかけて検出した遺構である。

杭列1053 (図140・141)

調査南区、G26-0152区に位置する。溝427-22層中から溝底面にかけて検出した、溝を横断する方向に打設した杭列で、溝の走向と略直交する。杭列は2条ある。下流側に相当する北側の杭列は、割木材を杭に使用している。間隔が密な部分と、大きく空いている部分があり、不整である。溝西岸に寄って長さ1.3mほどが遺存している。南側つまり、上流側の杭列は細い丸木材を用い、疎らな間隔で打設する。溝の東岸に寄って長さ1.3mほどが遺存している。

何れの杭列も溝底面に打設される。底面からの根入れは最も深いもので、0.3mを測る。0.1m前後の杭が多い。また、溝埋積層中に突出した状態で残る杭もあり、その最も高いもので、溝底面から0.2m突出している。突出するもの割合は小さいが、このような遺存状態から考えると、杭列1053が打設されたのは少なくとも溝427-22層よりは上位からであったことが推測できる。

杭列1053の位置する地点の下流側では、先述した遺構1047、流路1044を検出しており、杭列1053はそれらとの関わりをもっている可能性を捨て去ることはできないが、具体的な関係について、調査資料から跡づけることはできていない。

杭列1053に直接関連づけられる遺物の出土は確認することができなかった。

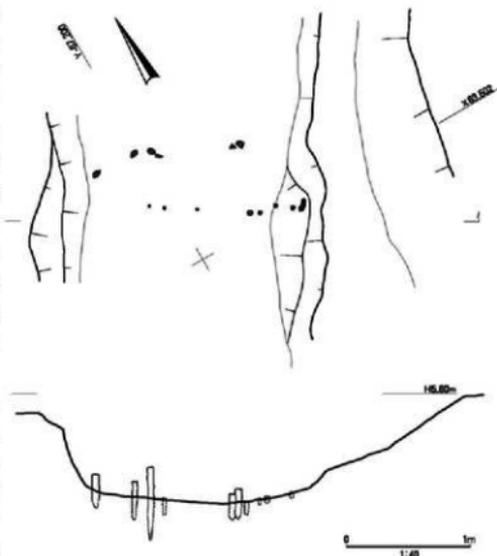


図140 杭列1053 (1:40)

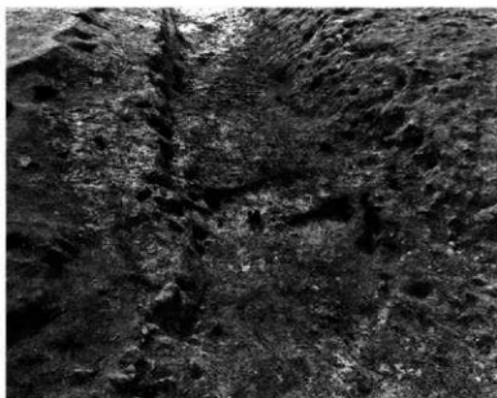


図141 杭列1053 (北から)

矢板列1070 (図142~145)

調査中央区、G26-0544区に位置する。溝427-22層上面で検出した矢板列である。

溝427の走向に直交する方向で、矢板を間隔を空けずに打ち込んでいる。さらに溝中央部では、上流側となる矢板南面に、板を横にして当てている。矢板は、溝427東岸側では、壁にかかる位置まで打設され、地山段丘礫層に深く打ち込まれている。矢板列は長さ1.9mほどの規模である。頂部の高さは略揃い、それが溝427-18層の下面におおよそ一致する。また、矢板上端に載るように、18層中の丸太状の樹幹が出土した。確認面からの深さは、溝中央部で最も深く0.8m、西岸側では浅く、西端部のは、極端に浅く0.1mを測るが、0.5mより深いものが多い。

溝に沿う方向の断面を検討すると、22層は、矢板列の位置から下流側へ浅くなるが、それは、溝形状が浅くなるためではなく、22層下位に別の溝427-31層が存在するからである。この層は、粘土塊の間を真砂土が充填するものである。粘土は、溝427東岸側の地山層由来のものと、表土若しくは谷底

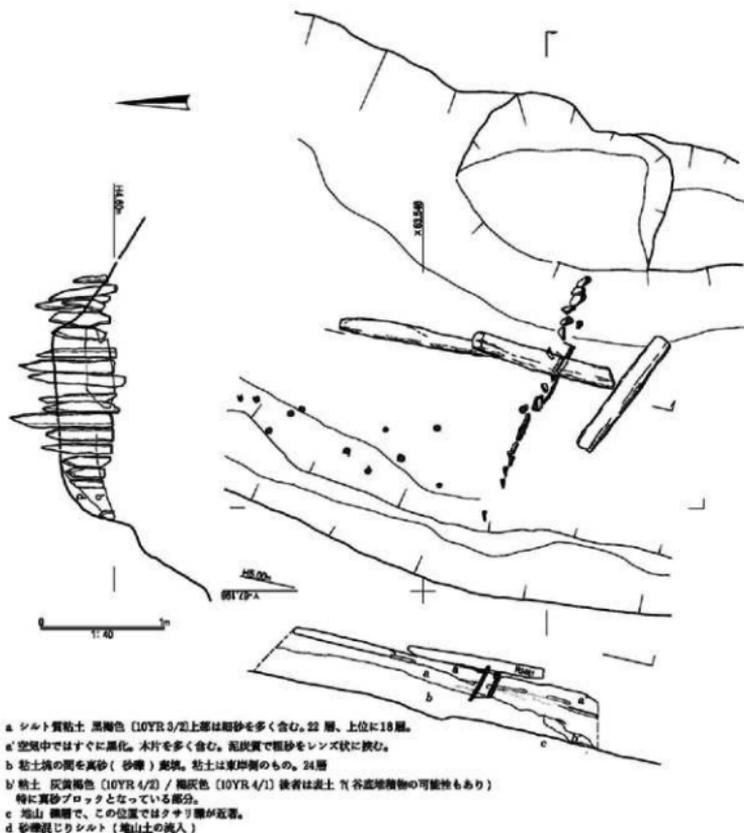


図142 矢板列1070 (1:40)



図143 矢板列1070 (断面、東から)



図144 矢板列1070 (断面、西から)



図145 矢板列1070
(矢板根入れ状況、北から)

堆積層由来のものがあるように観察された。このようなことから、一旦、溝の底を埋め立てた後、矢板列を打設した可能性を考えることができる。また、矢板後面の板もこの層に載るような位置に置かれている。

31層上の22層と矢板列1070との関係を、同様土層断面から、矢板列を境として上流側と下流側とを比較してみると、間層の砂層が、矢板を境に途切れたりするものがあるようにもみえ、上流側の砂礫層が、下流側には分布しないなどの差がみられる。また、矢板根入れ部に生じた間隙を、22層下面から粗砂が落ち込んだような状態で充している。ここでは、矢板1070は、22層に対して機能していた可能性が高いとしておく。また、18層の堆積時には、機能を失っている。

矢板列1070に直接関連づけられる遺物の出土は確認することができなかった。

遺構1071 (図146~148)

調査中央区、G26-0445区に位置する。溝427-22層上部で検出した、割材の集中部である。溝427の下部層全体にわたり、樹木片を含めた木質遺物が遺存し、集中出土するが、ここでは、同質の割材が集中していることから、人為的な可能性を考えて記録した。割材の多くは、溝の流れに交差する方向で密集しており、出土深度は上下0.3mの範囲に収まる。全体として西へ向かって緩く傾斜している。長さは1.5mを超えるものまでであるが、1mを前後するものが最も多いようである。

この、集中部から、定型的な木製品の出土はなかった。多くは角材状を呈す。

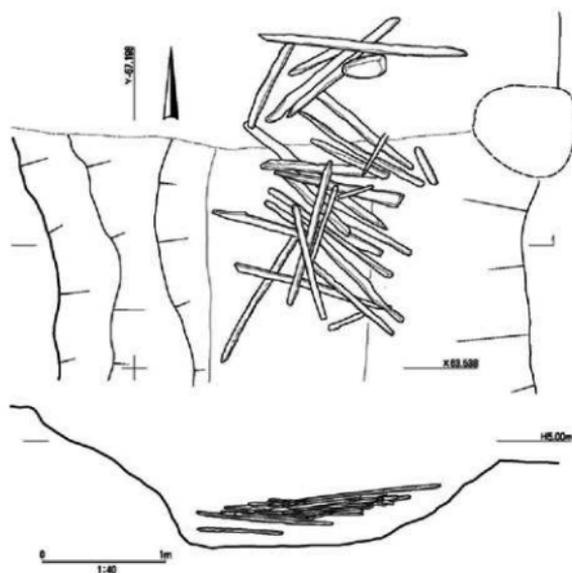


図146 遺構1071 (1:40)



図147 遺構1071（東から）



図148 遺構1071（北から）

(5) 溝427以前の遺構

これまで報告した遺構の大半は、溝427より谷側に位置し、殆どは谷堆積層中に残されたものである。その重複関係のなかで、溝427との時間的な前後関係を確認できるものと、間接的にも時間的な関係をとらえられないものがある。多くは前者に属すが、後者に属するものとして矢板列（1093～1095、1115・1119）がある。それらのほかに溝427よりも台地側に位置し、5b層下面で検出された遺構がある。検出面としては同位であるが、重複関係、出土遺物から、溝427掘削時期よりも古い時期のものだと判断する遺構である。

遺溝1017（図149・151）

調査中央区、G26-06区で検出した。溝427と斜めに交わる南北方向の遺構である。

調査中、同種遺構を距離をもって検出したものを同一遺構の部分として、記録した。しかし、遺構

の取り扱いとしては不適切であり、今回報告の時点で別番号を与え、別に報告する。

溝とするが、延長8m程が遺存するものである。南端部は溝427と交差するが、それ以南では検出できなかった。両端部とも終端部があり、溝の態は成さない。

平面形状は、やや曲流し、幅1.5m前後で、底面が南方へ傾斜する。北端部と南端部との比高は0.5mある。南端部の深さは0.2mである。

覆土は灰褐色粘土である。緻密で硬質である。中位に木炭の薄層が挟まる。

出土遺物 (図153・154、表30) 覆土中から土器を主体とした遺物がコンテナ3箱程の分量出土した。大破片の土器を含む弥生時代中

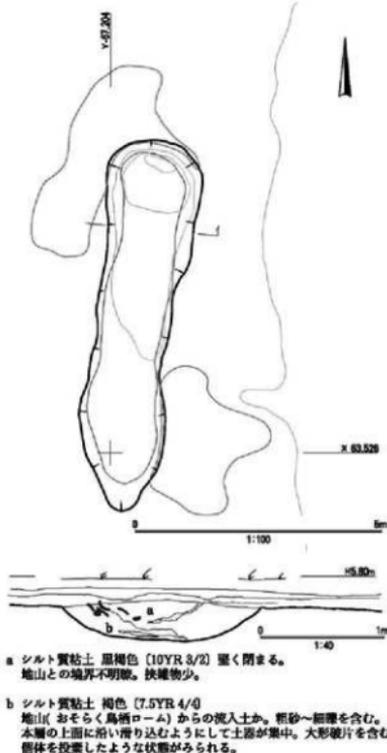


図150 遺構1096 (1:100)

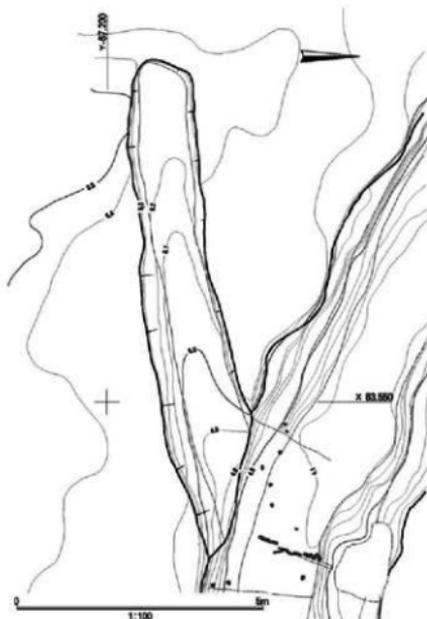


図149 遺構1017 (1:100)

期から、後期にかけての資料である。

遺構1096 (図150・152)

調査南区、G36-13区に位置し、5b層直下の地山礫層面で検出した。溝状で、長さ7.5m、幅1.8m、深さ0.3m程が遺存する。平面形状は不整である。覆土は黒褐色シルト質粘土で堅く締まる。中位、下部には両岸から流入したような、粗砂混じりの粘土層がみられる。これに沿ったような位置で、弥生土器が投棄されたような状態で出土した。

出土遺物 (図153・154、表30) 上記のように、投棄された弥生土器を主とする遺物が、覆土中の特定部位から集中して出土したほかに、覆土の各部から散漫に出土した。弥生土器には、中期後半から後期にかけての資料が含まれる。

図示する大部分は、遺構1017側の出土であるが、図154中、甕7167・7169・7179・7484が、本遺構出土資料である。

図151 遺構1017 (北から)



図152 遺構1096 (西から)

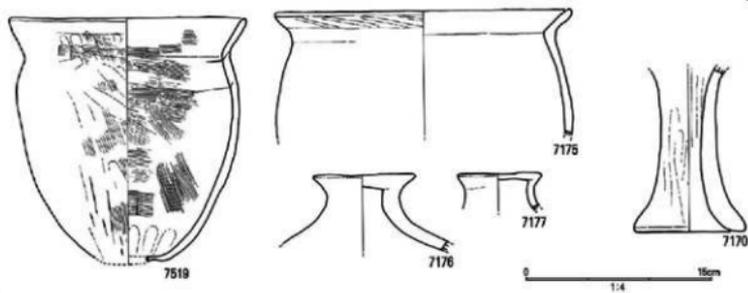


図153 遺構1017・1096出土遺物1 (1:4)

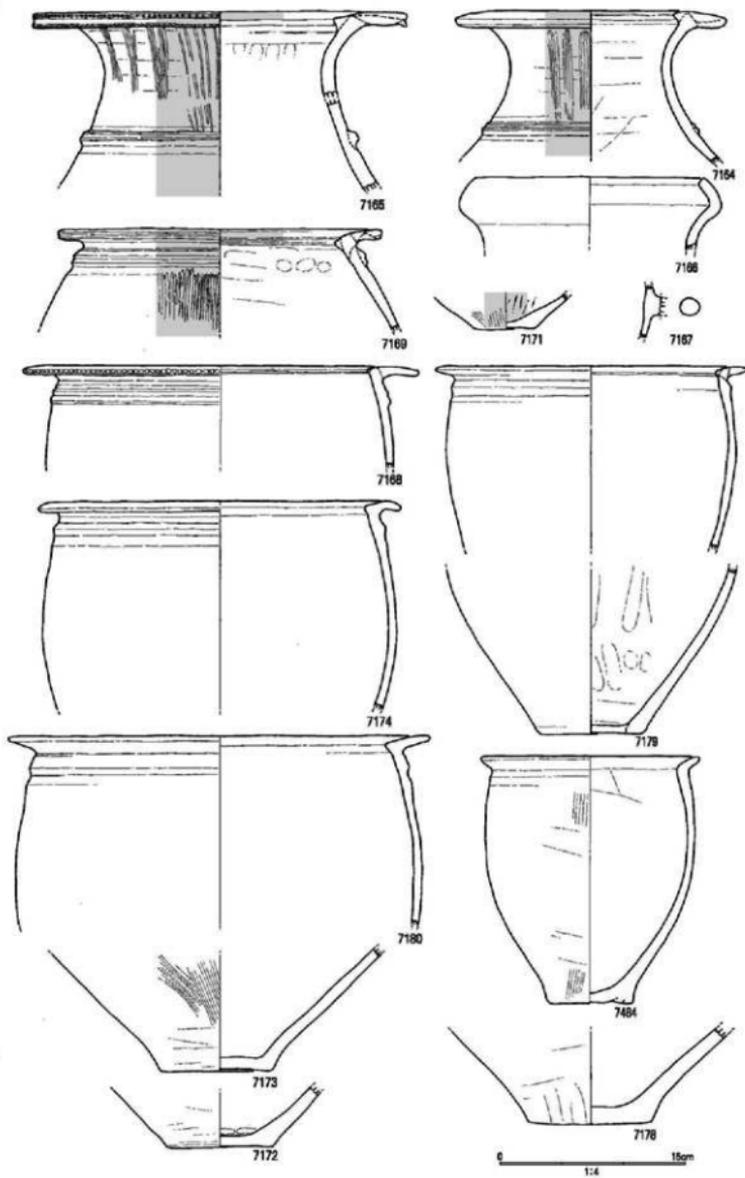


圖154 遺構1017・1006出土遺物2 (1:4)

遺物 番号	発掘番号	出土位置	器物種別 (年代)	計測年度	口徑/径さ	底径/幅径	高さ/高さ	計測担当者	遺存 (量・状態)
		遺物所在	材質 (出土・形状・色)					測定・検査	
7165	1017	G36-6545	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	302				口縁部小破片、厚減顯著 胎土:粗砂多く含む。 器表:やわらかい黄赤 (10 R7.5/5赤香)、赤彩はつよい黄赤 (10 R3.5/10赤色)
7166	1017	G36-6633	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	184				口縁部破片、器表欠れ 胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい黄赤 (10 R7.5/5赤香)
7167	1096	G36-1421	赤生土器 蓋?						破片、厚減 胎土:砂粒少量 器表:やわらかい黄赤10 R7.5/5赤香
7168	1017	G36-1325	赤生土器 筒胴壺 (赤生/中)	復原	320				口縁部破片、器表欠れ 胎土:粗砂含む 器表:こい赤 (4 R3.5/11褐色)
7169	1096	G36-0651	赤生土器 筒胴壺 (赤生/中)	復原	262				口縁部小破片、やや磨滅。 胎土:粗砂含む 器表:赤彩帯はこい赤4 R3.5/11褐色、赤赤彩帯は赤 文様:口縁部部に列点文、頸部に強い輪で調整によりM字形突帯。口縁上面を含む外面を赤彩
7170	1017	G36-0652	赤生土器 支脚 (赤生/中期)	復原	90				脚取、ほぼ完存 胎土:粗砂多く含む 器表:くすんだ黄赤 (9 R6/7.5洗赤)
7171	1017	G36-0652	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	47				底部、ほぼ完存 胎土:砂粒少量 器表:こい赤4 R3.5/11褐色
7172	1017	G36-0651	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	84				底部、ほぼ完存 胎土:砂粒少量含む 器表:やわらかい黄赤 (10 R7.5/5赤香)
7173	1017	G36-0651	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	89				底部、磨滅著しい 胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい黄赤10 R7.5/5赤香
7174	1017	G36-0652	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	292				口縁部小破片、厚減顯著 胎土:粗砂多く含む 器表:くすんだ黄赤2YR6/8?
7175	1017	G36-0652	赤生土器 蓋 (赤生/後期)	復原	240				口縁部破片、厚減顯著 胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい黄赤 (10 R7.5/5赤香)
7176	1017	G36-6545	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	830				外面の磨滅顯著 胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい黄赤 (10 R7.5/5)
7177	1017	G36-0652	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	実測	68				厚減 胎土:砂粒少量含む 器表:くすんだ黄赤 (2YR6/8?)
7178	1017	G36-6545	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	実測	100				底部、ほぼ完存 胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい黄赤 (10 R7.5/5赤香)
7179	1017	G36-1325	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	復原	262				大破片、外面磨滅に磨滅 胎土:粗砂多く含む 器表:うすい黄赤 (5YR8/5褐色)
7484	1096	G36-1424	赤生土器 蓋 (赤生/中期)	実測	172	69	200		略完形、厚減顯著 胎土:粗砂を多く含む 器表:やわらかい赤みの黄 (9YR7.5/4紅棕色)
7519	1096	G36-0651	赤生土器 蓋 (赤生/後期)	復原	190		200		略完形 胎土:粗砂多く含む 器表:やわらかい赤みの黄 (9YR7.5/4紅棕色)

表30 遺構1017・1096出土遺物観察表

IV まとめ

今回報告は、今宿五郎江遺跡第10次調査についておこなった。

本地点の主要な遺構である溝427については、出土遺物量が膨大であり、遺物については今回報告することができなかった。また、包含層出土遺物についても同様、概要に触れたのみである。そのため、ここでは、層位関係と層間に検出した遺構との関係から、本調査地点遺跡の変遷について触れておくこととする。

今宿五郎江遺跡第10次地点の変遷

溝427掘削以前 溝427は、第9次地点から続く、遺跡中央の台地周縁を巡る大溝であり、その埋積層の特徴も一致しており、掘削後、同様の変遷をたどって埋没している。第9次地点では、溝427掘削時の残土が土手状に谷側へ積み上げられており、その残土層からは、弥生時代中期土器が圧潰した状態で出土した。このことから、溝427の掘削時期は弥生時代中期後半かそれを余り下ることのない時期が想定される⁹⁾。本地点では、残土層の大部分が後世の水流により削られ、遺存は部分的で、遺物の出土はごく少量の土器片があったのみである。

溝427掘削以前の遺構は、溝427に直交あるいは、斜交し、溝427と重複して古い溝状の遺構1011・1017がある。その底面は、台地側から谷に向かう明瞭な勾配をもっており、段丘崖を流れ下る流路、あるいは溝といったものがあつたことが分かる。べつに同種遺構で、溝427に沿う方向の遺構1096は、等高線に沿う方向をとり、あるいは、一段古い時期の溝が存在したのかもしれない。

谷中では、13層、17層下で検出した杭列・矢板列も上部を大きく削られての遺存であり、あるいは同時期か、より遡る可能性がある。また、さらに下位に流路があるが、遺物を確認していない。

溝427終期 溝427埋没の過程は、出土遺物が未報告のため触れないが、埋没の終期段階で、溝427の一部を削り取る流路1044、土器投棄1047の形成があり、何れも弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺物が出土している。また、11層（6・7層）中に形成された遺構1078～1081も同時期の遺構である。これらは、黒色粘土層分布と重なることが多く、あるいは、溝427の最上層の黒色粘土層と関係をもつかもしれない。11層下、12層下で検出した遺構も、出土遺物から弥生時代終末期とできるものが多い。一部の杭列もこの間に含めて考えることができるかもしれない（杭列1069）。

溝427埋没後 溝427の埋没後の遺構は、5b層を挟んで上下から検出された。5b層は下位の層を大きく削り堆積しているが、部分的に溝427の痕跡に沿ったような堆積状況が見とれる。あるいはその時期まで、微地形として溝427の痕跡を見ることができたものかもしれない。

5b層下から検出した土壌1046は、平安時代の遺物を出土し、5b層を掘り込んでいる土壌1020～1022からは、中世の遺物が出土した。

【注】

(1)『今宿五郎江6～今宿五郎江遺跡第9次調査報告②』福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集

報告書抄録

ふりがな	いまじゅくごろうえ 7							
書名	今宿五郎江 7							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1009							
編集者名	杉山富雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL. 092-711-4667							
発行年月日	20080331							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
今宿五郎江10次	福岡県 福岡市西区 今宿町	40130	626	33° 34' 26"	130° 16' 24"	20040524 ～ 20050707	2,998	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
今宿五郎江10次	集落 包含層	弥生時代 (後期) 平安時代	溝・土壇・杭列			弥生土器（後期を主とし、終末期・中期）緑釉陶器・輸入陶磁器・土師器・須恵器・瓦木器・銅製品		9次地点からつながる大溝
要約								

いまじやくごろうえ

今宿五郎江 7

—今宿五郎江遺跡第10次調査報告(1)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1009集

2008年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 協文社印刷株式会社
福岡市西区小戸4丁目24番5号
